

平成 2 4 年 度

研 究 紀 要

創

第 1 5 号

TSUKURU



北海道今金高等養護学校

巻 頭 言

厚生労働省の平成23年度の障害者への職業紹介状況によりますと、国内の一般的な雇用情勢が依然として厳しい状況にある中で、ハローワークを通じた障害者の就職件数は、平成22年度の52,931件から大きく伸び、59,367件（対前年度比12.2%増）と過去最高となっています。また、就職率も40.0%（同0.1%増）と、2年連続で上昇しています。さらに、知的障害者については、新規求職申込件数は27,748件（前年度比7.5%増）就職件数は14,327件（前年度比8.8%増）となっています。また、平成25年4月1日より、障害者雇用率制度による障害者の法定雇用率が、民間企業においては現行1.8%から2.0%に引き上げとなります。

このような数値からは、障害者雇用の現状に追い風が吹いているようにも見受けられます。しかしながら、学校現場の手応えとしては、依然として障害者雇用の現実は厳しいと言わざるを得ません。確かに、雇用の間口は広がってきているかもしれませんが、地域によって状況に違いがありますし、求められる知識・技能・態度などのハードルは低くなってはいないという認識は必要であると思っています。

さて、本校においては、このような社会情勢や昨年度までの第5次研究「社会参加・自立を目指した働く力の育成」の成果を踏まえ、今年度から研究主題を『社会の変化に対応できる力を育てる実践的研究～「今養版キャリア教育」の創造を目指して～』とし、3カ年計画で第6次研究に取り組み始めました。初年度は、研究テーマを「キャリアプランニングを中心とした基礎的研究～学校教育目標達成への道筋を明確にし、よりよい実践の礎とするために～」としながら、校内研究に取り組みました。

校内研究の推進にあたっては、昨年度に引き続き本校の研究アドバイザーとして、北海道教育大学函館校の北村博幸准教授に、本校へ何度も足を運んでいただき、数多くの貴重なご助言をいただきましたことに深く感謝申し上げます。また、道内外の研修会にも本校の職員が多数参加させていただき、キャリア教育に関わる教育課程の編成や授業実践など多くの先進的な取り組みから学ばせていただきましたことにも、この場を借りて深く感謝申し上げます。

最後になりますが、本研究は、限られた時間の中で研究推進委員会を中心に全校であるいは各学年、各学科等で研修をし、協議をしながらまとめたものです。皆様には今年度の研究のまとめを御高覧いただき、忌憚のない御意見などをいただきながら、次年度以降の研究を進めていきたいと思っております。あわせて今後も、本校への御理解と御支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成25年3月

北海道今金高等養護学校長
佐々木 誉之

目 次

<巻頭言>

第 1 章	研究の取り組み	・・・・・・・・	5～12
第 2 章	課題研究	・・・・・・・・	13～44
第 3 章	プロジェクト研究	・・・・・・・・	45～60
第 4 章	寄宿舍の研究	・・・・・・・・	61～88
第 5 章	研究の成果と課題	・・・・・・・・	89～94
資 料	特別支援教育研修会の記録	・・・・・・・・	95～105

<あとがき>

<共同研究者>

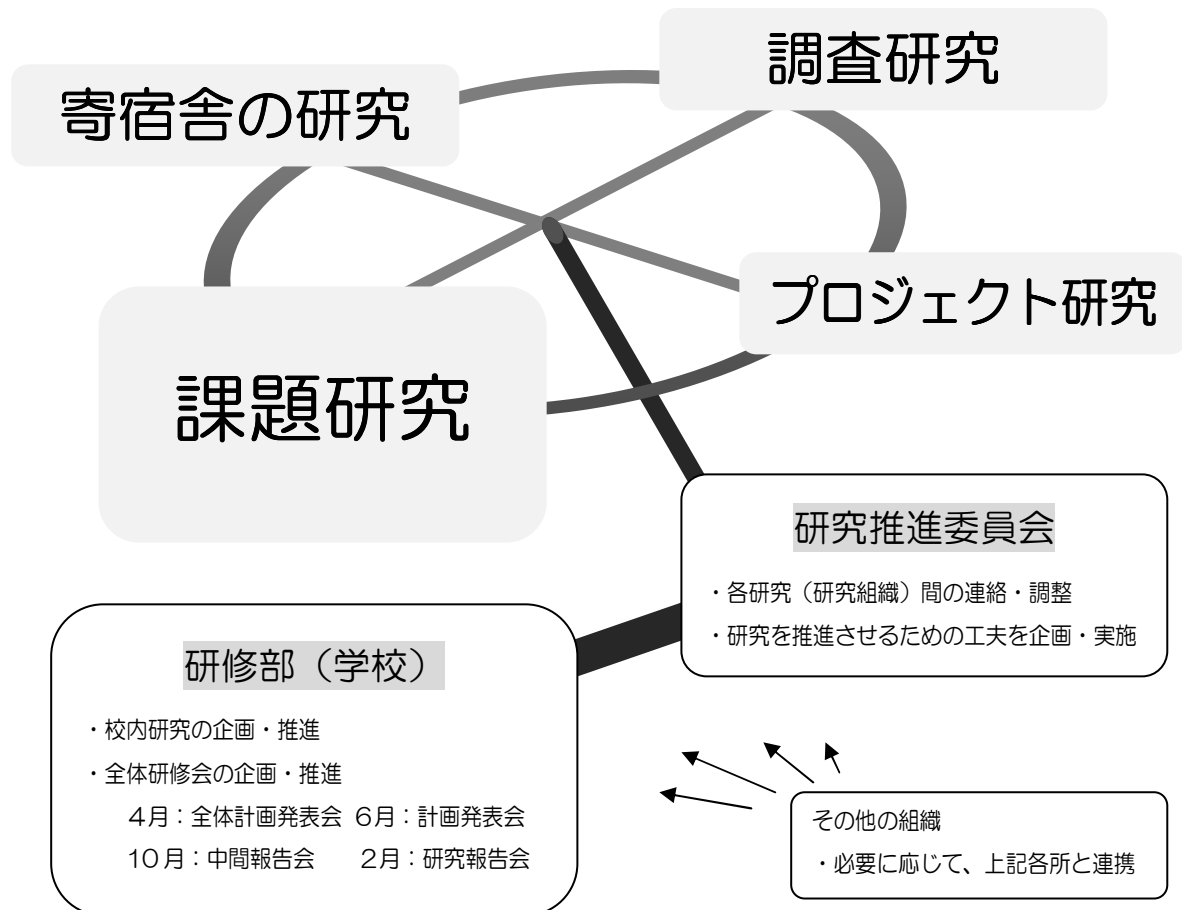
第 1 章

研究の全体像

1 本校の校内研究

本校では、1つの校内研究主題に基づいて取り組む「課題研究」「プロジェクト研究」「調査研究」「寄宿舍の研究」の4研究があり、それぞれが相関している（[図1](#)参照）。

～ [図1](#) 「本校の校内研究」イメージ ～



課題研究

本校の研究の中心的研究と位置づけている。本校における教育実践等のニーズの優先度などに応じて設定された実践研究であり、日常の指導実践と最も密接に関連する研究である。

プロジェクト研究

課題研究だけでは解決できない課題、もしくは別の課題を解決するために、その課題に関係する組織で進めるものと位置づけている。学校教育の動向や本校における教育実践等のニーズに基づく緊急の課題に関する実践的・総合的研究であり、校内部署の横断的なプロジェクトチームを編成して実施することもある。取り組むべき課題があるかどうか、どういった組織で取り組むかといったことは、年度当初に公募している。

調査研究

文字通り、調査による研究である。校内外における教育実践等に関する情報を、資料・統計として調査及び研究するものであり、研究内容に関する専門性の高い部署が担当する。取り組みについては年度当初に検討して決定している。

寄宿舎の研究

寄宿舎研修部を中心に、校内研究主題及び学校が行う上記 3 研究の流れに沿う形で取り組むものと位置づけている。また、研究推進委員会を通じて学舎の情報交換や連携を図っている。

校内研究の企画・推進は、学校の研修部（以下「研修部」と略す）が行っている。研修部員も委員となっている研究推進委員会（以下「研推委」と略す）は、4 つの研究が相互に連携して推進されるよう、必要に応じて連絡・調整する、いわばコーディネーター的役割を果たしている。

4 つの研究を進めるそれぞれの研究組織は、研究主題や内容によって変化する（表 1 参照）。また、研究の方法としては、理論研修（学習会）、研究授業、事例検討、教材教具の開発・工夫などがある。各研究組織は、研究の内容に合わせて方法を選択し、ときには組み合わせている。

～ 表 1 本校の校内研究のあゆみ ～

	研究主題	概要（主な研究内容）	研究の種類（研究組織）
第 1 次	【平成 9～10 年度】 生徒一人一人の発達段階・特性等に応じ 社会参加・自立を促す教育課程の編成は いかにあるべきか	教育目標の具現化、教育課程の基本方針、指導内容の選択・組織、個別指導計画の作成、地域環境・素材を生かした教育活動	・課題研究（形態部会、教科部会） ・調査研究（進路指導部） ・寄宿舎の研究
第 2 次	【平成 11～13 年度】 生徒一人一人が自立し、社会参加できる 力を育む授業づくりと教育課程の編成 はいかにあるべきか	教育課程の編成、授業の実践と検証、個別指導計画の充実、現場実習及び進路状況の把握	・課題研究（形態部会、教科部会） ・調査研究（進路指導部） ・寄宿舎の研究
第 3 次	【平成 14～16 年度】 生きる力を育む指導の研究	総合的な実態把握、指導課題の具体的設定と指導内容の関連、単元・題材指導計画の工夫、個別化と集団化が最適化された授業作り	・課題研究（学年部会） ・調査研究（進路指導部） ・寄宿舎の研究
第 4 次	【平成 17～20 年度】 授業作りに活かす、教師の専門性の向上 を追求する実践的研究	課題単元の教材開発、作業工程分析の充実、個別的教育支援計画等の様式及び作成に関する研究、体力つくりの見直し	・課題研究（形態部会） ・P 研究（CO+進路部代表、体力つくり部会） ・調査研究（進路指導部） ・寄宿舎の研究
第 5 次	【平成 21～23 年度】 社会参加・自立を目指した働く力の育成	教科及び領域・教科を合わせた指導の授業研究、体力つくりの見直し、指導内容表の検討、教育支援計画・指導計画・通知表のあり方の整理	・課題研究（学年部会） ・P 研究（体力つくり部会、研推委、指導計画 WG） ・調査研究（進路指導部） ・寄宿舎の研究

（P はプロジェクトの略 / CO はコーディネーターの略 / WG はワーキンググループの略）

2 第6次研究

(1) 経緯

平成23年度初頭、今年度のプロジェクト研究では何に取り組むかという職員アンケートを実施した。その結果、「本校の教育をキャリア教育の視点に照らし合わせながら、本校の良い所、改善ポイントを探る」という内容で研究を進めることに決まり、研究推進委員会が主体となってスタートさせることになった。

研究推進委員会は、平成24年度以降の校内研究全体の方向性、つまり第6次研究の計画の素案をまとめることを目指した。具体的には、キャリア教育の概要を学び、これまでの教育課程・教育内容の成果と課題を洗い出しながら今後の研究の進め方を検討するべく『本校としてのキャリア教育の進め方の洗い出し』という主題を設定し、研究を進めた。

まず、キャリア教育学習会を計2回実施した。キャリアとは何か、まずはイメージを共通認識することから始め、本校の現状や道内外の取り組み（実践事例）について学習した。全職員に資料を配付し学習することで、キャリア教育の必要性について確認することができた。しかし、意識を浸透させ、共通理解を図るには時間を要する。

次に、学習会を踏まえた上で「キャリア（教育）の視点を生かして、本校でどのような取り組み・研究を進めていくのがよいか」というテーマで、研究推進委員会の各委員はレポートを作成した。「行事や授業をはじめとする教育課程をキャリア教育の視点で見直す必要がある」「キャリア教育について校内の共通理解が必要である」という意見が多く出された。また、見直しや共通理解の具体的な方法、研究組織や期間についての具体的な意見も多く出された。そして次のような「第6次研究の方向性」がまとまった。

「第6次研究の方向性」

<1年目>

- ・キャリア教育の指針を決めていく段階
- ・具体的には、各学科、各学年、研究推進委員会を研究組織として、3年間の系統的な教育目標・方針（≡基礎・柱・道筋）の明確化に取り組む

<2年目>

- ・教育実践を見直していく段階
- ・教育課程（行事、授業等）、指導内容表、各教科・形態内の指導段階（指導の系統性）などを見直し、修正し、まとめていく

<3年目>

- ・1年目の土台、それをもとに2年目で改められた教育計画のもと、実践とその検証・評価を重点的に行う段階
- ・3年間の取り組みによる成果と課題をまとめ、次期研究へと引き継ぐ

これまでは、研修部が考えた研究主題を各研究組織（学年部会や形態部会）がある意味“自由”に解釈して課題を見つけ、研究授業をするという、いわば“形式的”な研究だった。一方、第6次研究は現場の声から始まり、テーマがキャリア教育であるだけに学校教育全体という視点を持ち、研究を進めながら研究の方法を見いだしていかなければならないという、いわば“創造的”な研究である。今後もボトムアップ方式で研究を推進し、チームワークを発揮して課題を解決していきたい。そして、生徒の成長と将来に結びつく成果を残したい。

(2) 研究主題

社会の変化に対応できる力を育てる 実践的研究

～ 「今金版キャリア教育」の創造を目指して ～

(3) 主題設定の理由

本校は開校以来15年間、卒業後の就労、広義には社会参加・自立を目指した職業教育に取り組み、284名の卒業生を輩出した。生徒実態や社会情勢の変化に対応しつつ、生活単元学習と作業学習を中心とした教育課程のもとで指導を行い、生活する力と働く力の両方を身につけられるよう工夫を続けている。

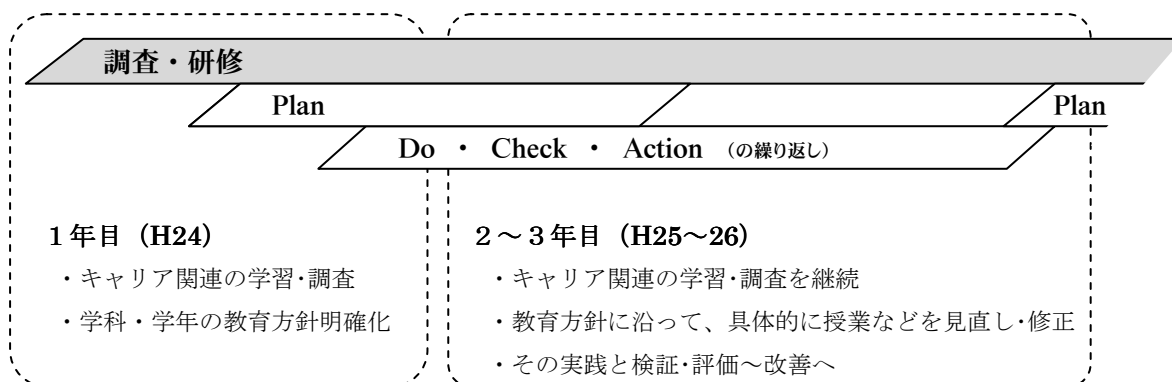
しかし、近年の生徒実態や社会情勢の変化は、これまでとは変化の質も幅も大きく異なっている。例えば、障害の多様化（特に発達障害を持つ生徒の増加）、それに伴う個に応じた指導・支援のあり方の多様化、経済の不安定さがもたらす就労への影響、障害者自立支援法の動向をはじめとする障害者福祉の課題点などが挙げられる。これらは、生徒が卒業後、社会の中で主体的に生きていこうとする上での“内外部的な困難さ”として立ちはだかっている。全国に存在するこの困難は、道南地域、本校周辺の地域も例外ではない。さらには、地理的条件など地域ならではの困難さも存在する。だが、これを乗り越えられる道を切り拓き、その道を歩んでいく力を身につけさせることこそ、我々教職員の使命である。

こうした状況を踏まえ、本研究では、本校の学校教育目標である「豊かな心と体をつくり、努力する生徒を育てる」の実現に向けて、その道筋とも言える教育課程、授業・指導の一つ一つをキャリア（教育・発達）の観点から再点検する。教職員のチームワークをもって今一度本校の教育のあり方を見直し、生徒や社会の変化に柔軟に対応できる生徒を育てていくことを目指し、本主題を設定した。

(4) 研究期間

原則として、平成24年度から平成26年度までの3年間とするが、「課題研究」として位置づける図2の「調査・研修」から「Action」までが一定程度終わるまでとする。何を達成すれば一定程度とするかについては、研究推進委員会を中心に全校的な協議を進めて決定したい。つまり、研究の進み具合から、3年未満もしくは3年以上になることもあるということになる。

～ 図2 「課題研究」イメージ ～



(5) 研究内容

① 課題研究

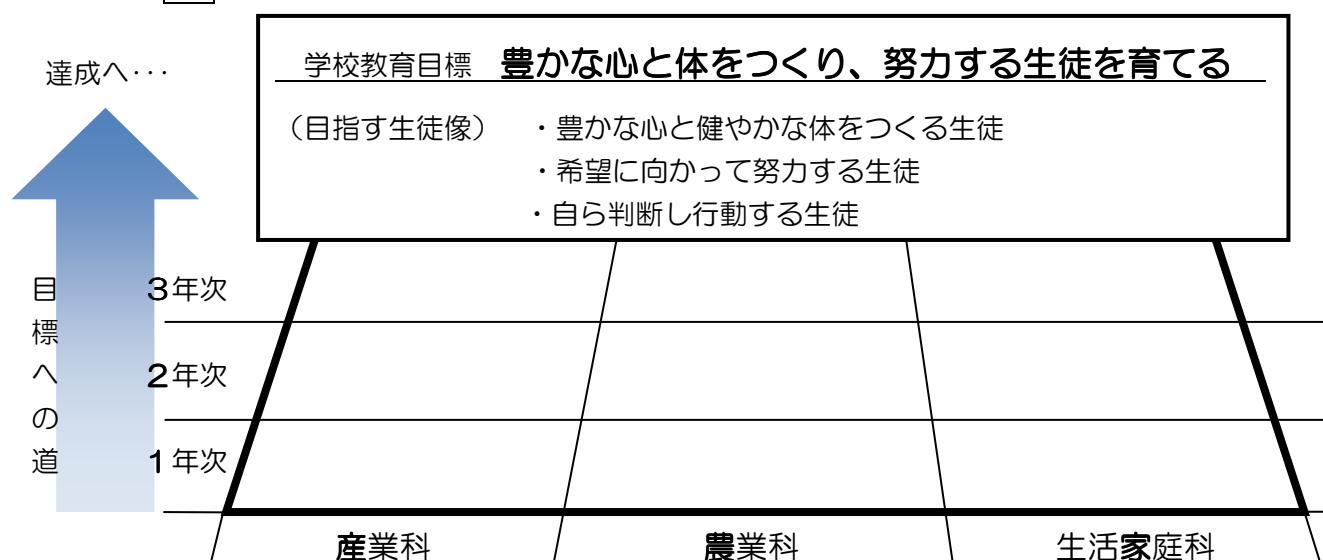
<調査・研修> 第6次研究期間を通して取り組む

- ・研究推進委員会が主体となって進める。この委員会は、研究主題に基づく実践的な研究推進にかかわる業務の企画、研究・研修内容等の推進等を行う特別委員会である。教頭、研修部長、研修部員、各研究グループの代表、その他必要な職員で構成する。
- ・キャリア教育の学習会を行う（全体研修会の中で）。また、キャリア教育の学習に役立つ資料を、各研究組織に提供する。これらにより、キャリア教育の概念について職員間の共通理解を図る。
- ・担任をはじめ、全職員が在校生の実態把握に努める。また進路指導部や旧担任を中心に、卒業生の現状と課題を調べる。調査した内容をまとめ、各研究組織に伝える。これらにより、キャリア教育の必要性について職員間の共通認識を図る。
- ・各研究組織と協議しながら、具体的な研究の進め方を検討する。つまり、いわば舵取りをすることにより、各研究組織が同じ方向・方法で研究を進められるようにする。

<Plan> 1年目後期から取り組む

- ・各学科・各学年が主体となって進める。研究推進委員会を連絡・調整の場とする。
- ・各学科・各学年の教育方針（指導段階）について協議する。キャリア教育について学習したことも踏まえて、3年間の系統的な教育目標・方針（≒基礎・柱・道筋…仮に「目標への道」と呼ぶ）をはっきりさせる（[図3](#)参照）。
- ・これにより、学校教育計画の学科経営案や学年経営案の様式・内容についても検討が必要となることが予想される。その際は教務部も含めて検討を進める。
- ・最終的には教育課程検討委員会、職員会議にかける。

～ [図3](#) 「目標への道」のイメージ ～



<Do・Check・Action (の繰り返し)> 2年目から取り組む

- ・「目標への道」に沿って、本校の教育全般を見直す。教育課程（行事、授業等）、指導内容表、各教科・形態内の指導段階（指導の系統性）など、実践～評価（検証）～改善を繰り返しなが見直しを進めていく。

- ・Plan 段階を経て検討するが、研究組織はおそらく Plan 段階とは異なる。分掌や部会が担当する方法、その枠を超えた研究グループを組織する方法などを検討する。
- ・教育相談や進路支援、就学支援など、保護者や外部とのつながりがある部署は、教育の柱の周知をする。あわせて、相談・支援の在り方についても検討する。

② プロジェクト研究

課題研究だけでは解決できない課題、もしくは別の課題を解決するために、その課題に係る組織で進めるものと位置づける。何か取り組むかどうか、年度当初に公募する。

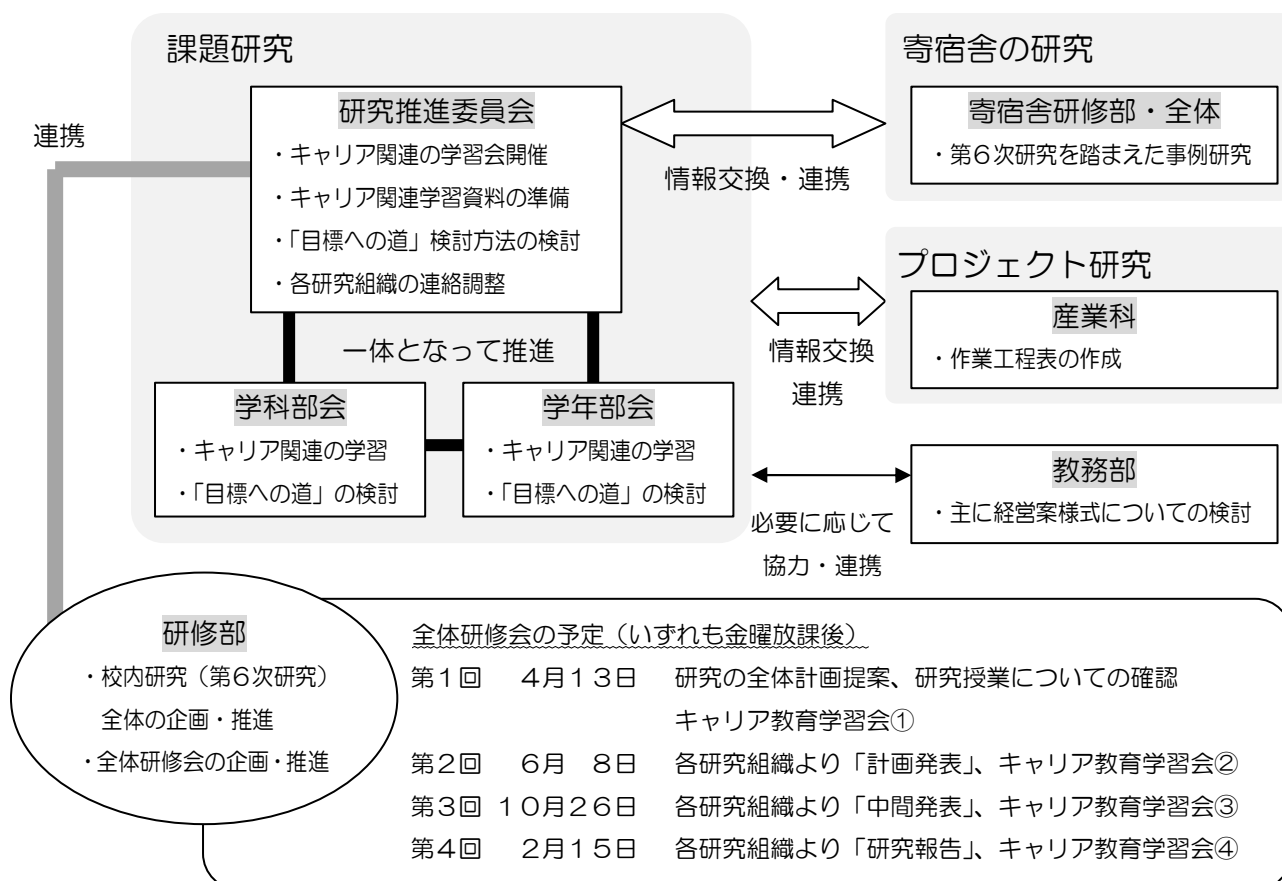
③ 寄宿舍の研究

寄宿舍研修部を中心に、第6次研究の流れに沿う形で、学校教育目標の達成に向けた事例研究を進める。なお、寮務主任に研究推進委員会の委員に加えることで、学舎の情報交換や連携を図る。

(6) 平成24年度の研究

課題研究は、調査・研修と並行して Plan の段階に取り組む。プロジェクト研究は、昨年度に引き続き産業科が取り組む。寄宿舍の研究は前述の通り、事例研究を中心に取り組む。調査研究は予定しない。研究組織とその相関については図4の通りとする。

～ 図4 平成24年度研究組織及び相関図 ～



第 2 章

課題研究

1 研究の概要

(1) 研究主題

キャリアプランニングを中心とした基礎的研究

～学校教育目標達成への道のを明確にし、よりよい実践の礎とするために～

(2) 設定理由

今年度からの第6次研究では、学校教育目標である「豊かな心と体をつくり、努力する生徒を育てる」の実現に向けて、教育課程や指導のあり方をキャリア（教育・発達）の視点から見直し、今金版のキャリア教育を創造していくことになった。

研修部が作成した原案をもとに、研究推進委員会で今年度の取り組みについて検討したところ、キャリア教育について教職員一人一人がその内容と必要性を共通理解することが必要だという結論に至った。また、キャリア教育の観点と現在の実践を照らし合わせ、学校教育目標を達成するため道のを明確にしてから、具体的に指導のあり方を見直していくという順序が望ましいのではないかと仮定した。この2点について重点的に取り組むことで、キャリア教育実践の基礎を固めるべく、本主題を設定した。

(3) 研究の内容と方法

研究推進委員会において、具体的にどのような取り組みが必要か検討した結果、次の事項が挙げられた。次の①～③について、研究推進委員会、学年部会、学科部会の3組織が連携して取り組んでいくこととする。

- ① キャリア教育という考え方やその必要性についての共通理解
- ② 在学生や卒業生の実態把握
- ③ 学校教育目標の達成に向けた「今養版キャリアプランニングマトリックス」の作成と各学年・学科の指導目標・内容の見直し

①について

研究推進委員会が主体となって取り組む

- ・キャリア教育に関する学習会を行う（主に全体研修会の中で）。
- ・キャリア教育の学習に役立つ資料を、各学年・学科に提供することで、各部会において学習を進めてもらうようにする。

②について

研究推進委員会が主体となって取り組む

- ・担任をはじめ全職員と連携し、在校生の実態把握とその整理に努める。
- ・進路指導部や旧担任と連携し、卒業生の現状と課題を調べ、その整理に努める。
- ・③に役立ててもらうため、整理した情報は全職員に伝達する。

③について

研究推進委員会・学年・学科が連携して取り組む

- ・第1回全体研修会で示した「目標への道」をより具体化したのが「今養版キャリアプランニングマトリックス（以下「マトリックス」と略す）」である。
- ・マトリックスの大枠は研究推進委員会が作成する。第1案を各学年・学科で協議し、その意見を反映して様式としてまとめる。
- ・マトリックスの中身（空欄、すなわち指導方針にあたる部分）は、まずは学年において協議する。次に各学科において協議する。学年間・学科間の調整作業は、研究推進委員会にて行う。

（４）推進日程

研究を進めていくごとに明らかとなる課題が多く、検討日数を逆算して計画立てることが困難である。よって、おおよその予定として以下の日程とする。

- 8月 マトリックス様式の完成、学年での検討開始。
- 10月 全体研修会（中間発表会・学習会）。
- 12月 マトリックス、各学年での検討終了、研推にて調整。その後学科での検討開始。
- 1月 マトリックス、各学科での検討終了、研推にて調整。次年度の研究の方向性を検討。
- 2月 全体研修会（研究報告会・学習会・次年度の方向性発表）

2 キャリア教育の学習

(1) 学習の企画と実施



- ① キャリア教育という考え方やその必要性についての共通理解
- ② 在学生や卒業生の実態把握
- ③ 学校教育目標の達成に向けた「今養版キャリアプランニングマトリックス」の作成と各学年・学科の指導目標・内容の見直し

この取り組みは①に該当するものであり、研究推進委員会が企画し実施した。計4回計画されている全体研修会において、講義形式、グループ協議形式など、学習内容に応じてスタイルを変えて学習会を実施した。また、学年部会や学科部会においてもそれぞれ学習を進めてもらうよう、学習資料を作成した。さらに、こうした学習の様子や補足的な内容は、研修部が適宜発行している「研修部だより」に掲載し、全職員に配布した。

こうした取り組みにより、研究への意識喚起、キャリア教育の必要性や考え方の共通理解を進めることができた。本研究の礎ともなるこうした取り組みは、次年度以降も継続して取り組んでいきたいと考える。

(2) 学年部会・学科部会用学習資料の作成

昨年度のプロジェクト研究において作成・学習した資料を一部改訂したものである。多くの職員が両部会に重複して所属しているため、同じ内容を2度学習することのないよう、学年部会用と学科部会用の2種類を用意した。

学年部会用は「キャリアとは何か」に焦点を当て、その言葉の意味・定義を共通理解してもらえるような内容にした。学科部会用は「データで見るキャリア教育の必要性」に焦点を当て、本校卒業生の就職・離職率や生活実態、他校の取り組みの紹介などから、本校の教育実践の見直しが必要であることを共通理解してもらえるような内容にした。いずれの資料も次項以降に掲載しているので、参照していただきたい。

これらの資料は5月の各部会に間に合うよう作成・配布し、適宜学習を進めてもらうようにした。しかし、部会の議題量の多さから、なかなか学習を進められないという声が多かった。そこで、6月の第2回キャリア教育学習会は、学年部会用の学習資料を活用して学習する内容にした。これについては(4)を参照していただきたい。

(3) 第1回学習会

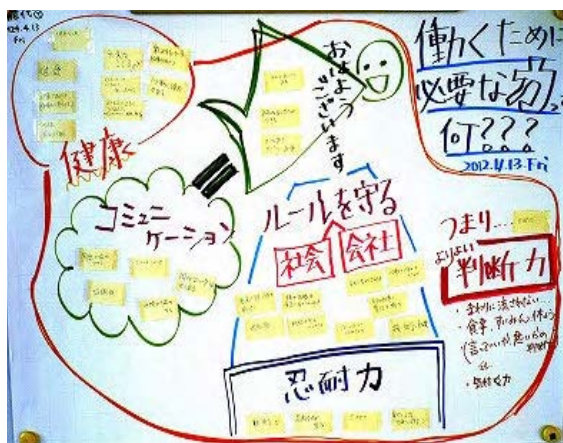
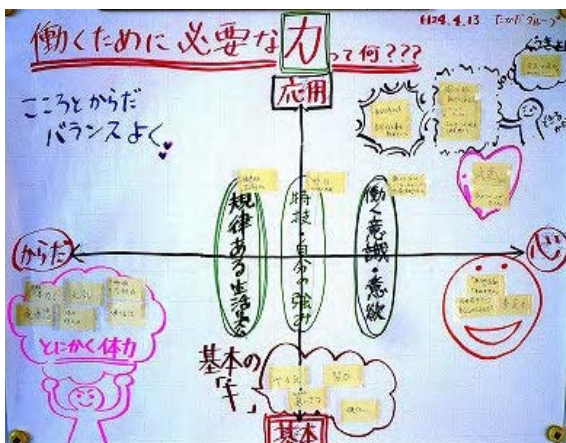
4月の全体研修会とあわせて実施した。グループに分かれて「働くために必要な力とは何か」というテーマで自由に協議する時間（ワークショップ）とした。このとき、各グループとも最低10個は挙げる、全員必ず発言すること、用意した模造紙には些細なことでも書くこと、相手を批判しないことを条件として、30分間協議していただいた。



以下の写真は、グループ協議と発表の場面である。グループは、経験年数、所属、男女などを考慮して話が盛り上がりやすいメンバー構成にし、7つのグループに編成にした。結果、どのグループでも一人一人が日々実践しながら思っていることや考え方を積極的に交わすことができた。さらに、各グループから協議の内容を発表したこと、書き込んだ模造紙を見合ったことで、今後研究を推進していくための原動力とすることができたと考える。



以下の写真は、各グループで書き込んだ模造紙である。模造紙の他に用意したのは、色とりどりのマジック、付箋紙、普段よく目にする生徒の作業日誌などの参考資料である。これらを用いて自由に協議していただいた結果、KJ法とファシリテーショングラフィックの要素を融合したような形となっている。ちなみに、こうした協議形式は、近年の生活単元学習やホームルームなどの授業でも用いられ始めている。



(4) 第2回学習会

6月の全体研修会とあわせて実施した。このときは(2)で述べたように、学年部会用の学習資料を活用して学習する内容にした。単に読み合わせるだけではなく、グループに分かれて演習をする場面を設けた。



演習は、「周囲と話し合いながらもよいので、先生方ご自身の『キャリア』を自由に書いて(描いて)みてください」という内容にした。学習資料で図解しているように、キャリアという言葉“積み重なっていく”“連なる”“ずっと続く”といったイメージで捉えてもらうことを狙いとした演習である。

各グループから1人ずつキャリアを発表していただいたが、経歴紹介のようになってしまった雰囲気もあった。しかし、その後の研修部たよりを通じて、経歴が積み重なって今の生き方があるということをまず指導者自身が実感することが大切であること、そして生徒にも自分の「キャリア」を意識させ、自己有用感、自信、意欲、向上心、目標・夢を抱かせられるような教育を実践していくことが大切であり、それがキャリア教育ではないか、と補足した。

また、本校の学校評議委員でもある北海道教育大学函館校の北村博幸准教授を研究アドバイザーとして迎え、今のうちにキャリア教育についての理解のズレが生じないように工夫を続けるべきだとのご助言もいただいた。

(5) 第3回学習会

10月の全体研修会とあわせて実施した。このときは9月に行われた「全特連全国大会」の出席者が、キャリア教育の視点から研修報告をまとめて発表するという講義形式の学習会とした。

道内外の学校の実践を見た3名の大会出席者に報告していただいた。報告を受け、キャリア教育の考え方が全国的に浸透していることを実感するとともに、本校の実践を客観的に見つめ直す機会となった。



(6) 第4回学習会

2月の全体研修会とあわせて実施した。内容は、12月に行われたキャリア教育の実践を学ぶための道外研修報告（千葉県立特別支援学校流山高等学園と埼玉県立特別支援学校さいたま桜高等学園の公開研究会）と、北海道特別支援教育センター「キャリア教育研修講座」の研修報告の2本立てで、講義形式の学習会とした。

道外研修報告では、道内や本校とは規模の異なる生徒数や実践を知ることができた。それに圧倒されつつも、地域とのかかわりを重視したキャリア教育の実践など、本校の教育においても応用できる点があることを学ぶことができた。また、北海道特別支援教育センターの研修報告では、キャリア教育の基本的な考え方を再確認した上、これから本校が目指すべき方向性を考える機会となった。



(7) 学習会の成果と課題

全体研修会とあわせて学習会を実施することで、時間的な負担を抑えながら効率的に学習を進めることができた。一方、学習内容は研究当初から十分な計画をしていたとは言えない状態だった。そのため、研究の進み具合や校外研修の有無に沿って、学習会が近づいた頃にその都度内容を考えるという、場当たりの、よく言えば臨機応変な構成となった。これに伴って、学習会のスタイルも講義形式が2回、グループ協議形式が2回となった。

学習会の実施そのものは、キャリア教育の必要性や考え方の共通理解・共通認識を進めるにあたって大きな効果があったと考えられる。しかし、学習会の内容も研究開始当初から計画していれば、より大きな効果が得られたかもしれない。内容に応じて、学習スタイルも工夫する必要がある。こうした今年度の成果と課題を踏まえ、次年度以降も学習会を実施していきたいと考えている。

3 マトリックス（試案）の作成 ① ～構想から様式の完成まで～

- ① キャリア教育という考え方やその必要性についての共通理解
 ② 在学生や卒業生の実態把握
 ③ 学校教育目標の達成に向けた「今養版キャリアプランニングマトリックス」の作成と各学年・学科の指導目標・内容の見直し

（1）研究のはじまり ～マトリックス作成構想の経緯

この取り組みは③に該当するものであり、研究推進委員会が中心となって研究を進めた。今年度は、教頭、教務主任、寮務主任、支援部長、生徒指導部長、進路指導部長、学年主任、学科長、研修部研究担当で構成し、研修部長が議長を務めた。

第1回委員会は5月に行った。そこでは、4月の第1回キャリア教育学習会で行ったワークショップ（2（3）参照）の成果をいかして研究を進めていきたいという意見で一致した。各グループが書いた模造紙からキーワードとなりうる文言を抽出し、それが国立総合研究所（以下「国総研」と略す）の「知的障害がある児童生徒のキャリアプランニング・マトリックス（試案）」で示されている4能力のどこに当てはまるのかを検証することにした。

文言の抽出は研修部担当が行った。検証作業は、教頭を除く研究推進委員会のメンバーが2人1組になり、国総研のマトリックスとその解説を参考にしながら取り組んだ。こうして“職員の思いがキャリアの4能力に乗っかっている”ということを視覚的にはっきりさせた。



ワークショップ

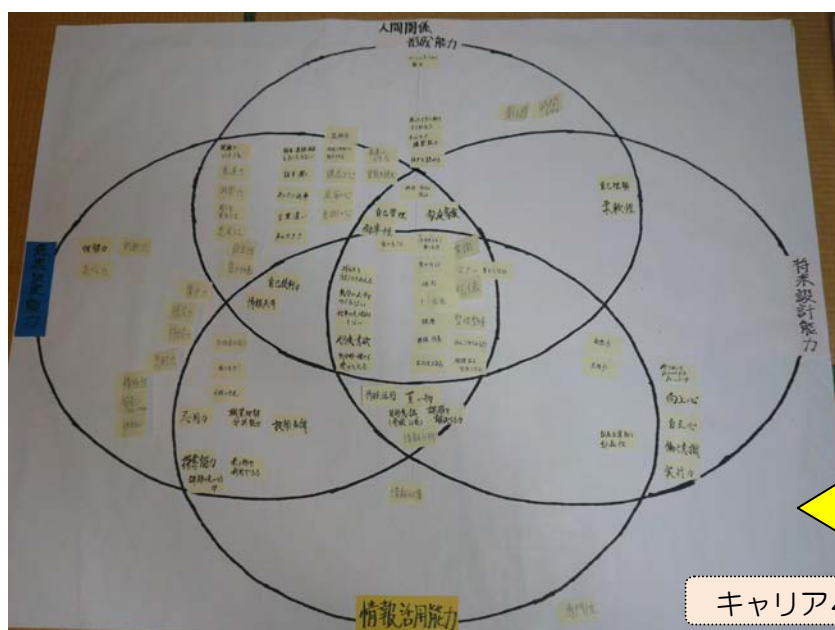


完成した模造紙7枚

文言の抽出

あいさつ、判断力、素直さ、自己理解、ルールを守る、理解力、体力、向上心、自己統制力…などなど。

似たような言葉は1つにまとめて、
 合計90個の文言を抽出した。



キャリア4能力にあてはめる

次に、これをもとに“目標への道”（第1章2（5）①  参照）を検討するための観点
を導き出す作業を、研修部担当が行った。意味合いの近い言葉をひとくくりにすることで、8
つのカテゴリーができた。この8カテゴリーを研究推進委員会に提示したところ「つまり、今
金なりのマトリックスを作るということではないか」という意見が挙がった。この意見がきつ
かけとなり、「今養版キャリアプランニングマトリックス」を作成するという今年度の研究方
針がようやく明確となった。

（2）マトリックスの様式の作成

マトリックスの様式は研究推進委員会で作成し、その後各学年・学科からも意見をもらって
完成させることにした。

まず形そのものは国総研のマトリックスに倣い、縦軸を4能力ではなく前述の8カテゴリー
に、横軸を小～高等部ではなく1～3学年にした。また、“目標への道”では学科ごとの指導
方針の明確化も目指しているため、学科による区切り線を設けた。さらに、3学年の横には到
達目標である学校教育目標を明記することにした（第2章6（2）①）。

次に、8カテゴリーとその中身（第2章6（2）①の太枠部分）について検証し、整理する
作業を進めた。8カテゴリーは、キャリア教育の視点から学校教育目標の具現化を図るために
必要と考える8つの『指導観点』と捉えた。また、その中身については、『指導観点』を具体
化するための指導要素の集まりであり、指導観点を解釈がぶれないよう解説として明記してお
く必要があると考え、『観点の中身（解説）』と名付けることにした。

そして8つの『指導観点』と『観点の中身（解説）』について、1つずつ検討した。幅広い
意味を持つ（指導者によって意味の捉え方が変わりそうな）『観点の中身（解説）』の文言を、
他の『観点の中身（解説）』の文言と統合したり、削除することで、スリム化を図った。また、
『指導観点』で用いている言葉がわかりやすい言葉であるか、『観点の中身（解説）』を的確に
示している言葉かどうか検討し、必要に応じて別の言葉に言い換えるなどした。

以上の方針で検討を進めた結果、主に次のような点を修正した（以下、『～』は指導観点、「～」
は観点の中身で記述する）。

『健康な心と体』

- ・簡潔に表現しても問題がないと判断し『心と体』と名称を変更。
- ・「ストレスとうまく付き合える」は「ストレスコントロール」に換言。
- ・「気分のムラを作らない」は『自己内省』の観点の中身で対応できると判断して削除。

『自己理解』

- ・観点の中身を結合して簡潔に「自分の長所や課題を見つける力」に一本化。

『進路（職業）』

- ・観点の中身の内容から、働くことに限定した方が良いと判断して指導観点名
を『職業』に変更。
- ・「仕事のえり好みをしない」、「気分的に嫌でも受け入れる」などの観点の中身を『自己内
省』の観点の中身で対応できると判断して削除。

- ・「職業理解・分析能力」「実行力」など、他の指導観点にあった観点の中身を『職業』の観点の中身に移動。

『意欲』

- ・観点の中身を的確に指し示すと思われる言葉『自己内省』に名称変更。
- ・『コミュニケーション』の観点の中身「素直さ」「忠実さ」「謙虚な心」「反省の心」「感謝の心」を、この指導観点に移動。

『知識・技術』

- ・やや抽象的な「技術・知識」を「買い物」、「乗り物」などの観点の中身とあわせて「公共交通機関の利用」、「金銭管理」、「職種に応じた知識・技能」とより具体化。
- ・「時間を守る」を削除。
- ・「読み書き計算の知識」を追加。

『コミュニケーション』

- ・「周囲と協力できる」を「協調性」と統合
- ・「ネットワーク構築能力」を、具体的にイメージを持ちやすい言葉「人づきあい」に名称変更

『応用力』

- ・「周りを見ること」、「空気を読む」は「洞察力」に統合
- ・「気づく力」「めんこがられる力」などやや抽象的な観点の中身は削除。

『感性』

- ・観点の中身の内容をより明確に示すため『感受性』に名称変更。

こうしてマトリックスの様式を完成させ、6月の全体研修会にて提案した。その後、以下のような意見を各学年・学科からもらい、研究推進委員会で再度微調整した。

- ・『知識・技術』に「ルールを守る」とあるが、「ルールを知る」が先になるのではないかと。
→「知る」「守る」の両方の要素を含め「ルール」に修正した。
- ・『コミュニケーション』に「協調」とあるが、「協力」はない。「協力」は「協調」と少し違い、様々な要素がクリアできないとできないことではないかと思うため、『応用力』に入れてはどうか。
→「協力」という言葉を『応用力』に追加した。
- ・『自己理解』の観点の中身に「他者からの評価を受け入れる力」を追加してほしい。
→ その通り追加した。

同時に、次のような質問も挙がった。質問とその回答は次の通りである。

- ・ 空欄部分は、生徒の実態によって「観点の中身」の語句を組み合わせる目標にし、埋めていくということで間違いはないか。
→ その通りであり、「観点の中身」を基本として作り上げて行くことであると回答。

- ・ 到達目標である学校教育目標そのものが変更になるということはないのか。
→ 当面はないと思われると回答。
- ・ このマトリックスは、いわゆる“4領域8能力”に含まれる内容が網羅されているのか。
→ 6月の全体研修会で説明した通り、されているはずであると回答。

こうして7月末、今養版キャリアプランニングマトリックス（試案）の様式を完成させることができた（第2章6（2）②）。ちなみに「(試案)」とつけ加えたのは、今後の研究次第では改訂しうるものである、という意味を込めたためである。

4 マトリックス（試案）の作成 ② ～学年・学科の協議から完成まで～

- ① キャリア教育という考え方やその必要性についての共通理解

② 在学生や卒業生の実態把握

➡ ③ 学校教育目標の達成に向けた「今養版キャリアプランニングマトリックス」の作成と各学年・学科の指導目標・内容の見直し

（１）学年部会における協議

８月から、完成したマトリックスの様式の中身（空欄、すなわち指導方針にあたる部分）を埋めていく作業に取り組んだ。これは、各指導観点について各学年段階でどのように指導していくかを具体的に記述していく作業であり、いわば各学年段階の指導方針を明確にする作業である。各学年では、今年度の当該生徒に指導することを想定し、これまでのキャリア教育学習会や学習資料、国総研のマトリックスなど関連文献をもとに、協議を進めることにした。

ところで、このマトリックスはそもそも学校教育目標の達成という“目標への道”を示すべく作成するものである。従って、全ての空欄が埋まった時点で指導観点ごとに見たときには、“前学年の指導方針を次学年が引き継ぐ形で指導方針が立てられており、結果的に学校教育目標の達成に向けた道筋が明確になった”と言える状態でなければ意味がない。

しかし、各学年が別々に協議・記述を進めることになるため、各学年段階の指導方針に大きなズレや差が生じてしまうおそれがある。これを最小限に防ぐため、１０月に行った中間報告会で途中経過を発表しあった。また、各学年では誰がどの指導観点を担当しているのかを一覧にすることで、学年の枠を越えて協議がしやすいよう工夫した。

< １学年部会における協議の様子（１学年部会より） >

【はじめに】

１学年部会では、研究推進委員会から出された「今養版キャリアプランニングマトリックス（試案）」の「観点の中身」について注目した。そして、観点の中身が各学年でどれくらいの到達レベルになるのか掘り下げて、段階的に差を付けて簡単に表現するよう努めた。

本来であれば１学年段階のみを考えれば良いのだが、他の学年段階における到達レベルも合わせて考えることで、高校初めの学年として身につけるべき要素がより明確になると考えた。また、箇条書きの簡単な文章で表現することで、その後の文章化がイメージしやすいと考えた。

【過程】

９月は２～３人ずつ６つの作業班で手分けし、観点の中身を一つずつ掘り下げた。各班で分量や意識の違いによる差は若干あるが、学年ごとにステップアップするよう一人一人が意識できたのではないと思う。しかし、所属する学科によって生徒の能力に差が生じること、観点の中身によっては学年段階の到達レベルを言葉で表現できにくいこと（「〇年に同じ」という表記になってしまう）、観点は異なるが「体力」「持続力」などの似たような中身があるので大きな観点をしっかり踏まえないと求めたい力がぶれる可能性があること、などが課題として挙げられた。

10月では、各班で掘り下げた文を学年部会で持ちよって一覧にまとめ、中間発表で発表したが、箇条書きのため荒削りなマトリックスであった。ところが、他の学年の進捗状況を見たところ、すでにまとまって文章化されていた。こちらで思い描いていた到達レベルよりも一層各学年段階に沿ったものが書かれていたため、非常に参考になった。また、中間発表時の意見から国総研のマトリックスも参考にし、学年に持ち帰って再度班ごとに集まり文章化すべく取り組んだ。

11月は各班が頭をひねる時期だった。観点によっては中身が多すぎて、一文にするためには削がざるを得ないものもあったが、なるべく他学年の文章量と大差がないよう各班で工夫した。12月には観点がそれぞれ文章化された形で「1学年段階で目指す生徒像」のマトリックス一覧がひとまず完成した。

<2学年部会における協議の様子（2学年部会より）>

【はじめに】

2学年部会では、8つの指導観点を4つに分け、14名いる職員3～4名でひとつを担当するようにして作業を進めることにした。学年部会の時間を利用し、国総研のマトリックスや小樽高等支援学校の資料を共有することからスタートした。

【過程】

少人数でグループ編成したことにより、各グループで時間を見つけて資料を参考にしながら原案を作成することができた。できあがった原案を学年部会で検討し、中間報告前に研究推進委員会へ提出することもできた。中間報告後にも、1学年と3学年が作成した文章を見ながら話し合いを進め、加筆・修正を加えながら2学年段階全てを文章化することができた。また、こうした研究を学年で取り組んだことで、「キャリア教育」という言葉だけではなく、その中身について理解を深めることができた。国総研のマトリックスや小樽高等支援学校の資料は、大変参考になった。

この取り組みは、現在の2学年の実態を改めて見つめ直す良いきっかけとなった。しかし、1学年や3学年のことも考慮しながら作成しなければいけなかったため、対象を2学年のみに絞り込んだものにするのは難しく、結果として幅広く指導していく内容となってしまった。現在、そしてこれからの生徒に対応するマトリックスを作り上げていくには、今回完成したマトリックスを実践しながら、生徒の実態に応じて付け加えや訂正をしていくことが望ましいと考える。

<3学年部会における協議の様子（3学年部会より）>

【はじめに】

研究推進委員会から出された空白のマトリックスを前にして、まずは“3学年として目指す生徒像”について考えた。学年の職員からは、「3学年段階といっても生徒の実態によって目指す生徒像が違うのではないか」「焦点をどこに当てるのか」「1学年、2学年段階での目標を明確化させなければ系統性を持たせたものができあがらないのではないか」というような意見が挙がった。そのような中、いくつかの柱をしっかりと立てることにより、“3学年として目指す生徒像”が明らかになり、共通認識のもとで作業を進めることができるのではないかと考え、研究を開始した。

【過程】

8月から10月は現場実習期間でもあったため、担当メンバーがそろって話し合う時間をあまり持つことができなかった。しかし、10月の中間発表直前の学年部会をひとつの目安とし、それぞれの作業グループで作成した指導観点ごとの内容案を持ち寄った。そこでは、当初見据えた柱（視点）から外れていないことや、国総研のマトリックスを踏まえたものであること等を確認および修正し、学年としての1次案を完成させた。

その後、中間発表で「目標は具体的で評価のしやすいものである方が良い」「生徒自ら相談する力のような観点が抜けてはいないか」等、他学年の職員からいただいた意見をもとに各作業グループで再度見直しを進めた。12月の学年部会で修正箇所の最終確認を行い、2次案を完成させることができた。

一方、中間発表後の見直しと併せて、この取り組みに関して3学年の職員にアンケートを実施した。その結果、「学年全体でキャリア教育について学ぶ機会が持てた」「目的を共有し学年で協力しながら作業が進められた」といった点が成果であり、「担当学年のみに焦点を当てたので3年間の系統性や積み重ねの意識が十分ではなかった」ことが課題である。

（２）学年部会における協議を終えて

各学年の協議を終え、全ての空欄を埋めることができた。しかし、指導観点ごとに見てみると、前述したような“前学年の指導方針を次学年が引き継ぐ形で指導方針が立てられており、結果的に学校教育目標の達成に向けた道筋が明確になった”と言える状態にはならなかった（第2章6（2）③）。



そこで急遽、ある1日の放課後を「マトリックス検討日」と設定し、学年を追うごとに段階的な指導方針になるよう調整する時間を設けた。調整は、各学年から各指導観点の検討を担当した職員を1名ずつ選出してもらい、選出された職員同士で行ってもらうことにした（写真がその様子である）。その結果をさらに研究推進委員会で検討することで、年を越して2月初頭、ようやく現実的な学年進行形のマトリックスに仕上げることができた（第2章6（2）④）。なお、各指導観点内で指導方針をより整理するため、『指導の柱』というカテゴリーを新たに設けることにした。さらに、「○学年」の軸を「○学年段階（補足文）」という形に変えることで、その学年段階の基本方針を明らかにしつつ、生徒の実態によっては他の段階の指導方針を参照して指導することもあり得るだろうというニュアンスを持たせた。

（３）学科部会における協議

1（4）の推進日程では1月には各学科による協議を終えて最終調整に入る予定だったが、前述までの研究が遅れてしまったため、学科部会において十分な協議をするだけの時間を設けることが困難となった。また、マトリックスが第2章6（2）④の段階でかなりまとまった形になったため、ここからさらに学科で協議するにしても、何をどう協議すればよいのか困惑させてしまう懸念が生じた。ましてや、第2章6（2）①のような学科による区切り線を設けた形にするよう要望するには無理がある。

こうした状況を踏まえ、学科における協議をどうしたらよいか研究推進委員会で検討した。その結果、第一にマトリックスが“前学年の指導方針を次学年が引き継ぐ形で指導方針が立てられており、結果的に学校教育目標の達成に向けた道筋が明確になった”かどうかを確認してもらうことにした。第二にマトリックスを活用して各担当生徒に授業・指導をしていくと想定し、不都合がないか、使い勝手はどうかなどの意見をいただくことにした。

<産業科部会における協議の様子（産業科部会より）>

指導観点の到達目標が1学年から3学年へと段階的になっているかを話し合った際は、到達目標の配列について問題ないということでまとまった。全員の意見として「マトリックスに記された指導観点を取り入れた授業を行い、改めて学科内で全体周知を行い、意見を出し合い、調整・検討してみよう」という結論に至った。また、学科として指導するには厳しい内容が書かれているのでは、という意見はなかった。

ただし、「授業を行う際、どの授業でどの観点を取り上げれば良いのか（例えば、『応用力』は生単で取り上げれば良いのか、他の授業に取り込めば良いのか、など）」という意見があった。また、到達目標が学年をまたいで「継続」とされている指導観点についても、授業の構成や指導法はどのようにすれば良いのかといった質問もあった。さらに、指導観点相互の関係性（例えば自己内省と自己理解の相関など）をもっと明確に知りたいという意見もあった。多数の質問・意見があったことから、マトリックスの活用方法や学科としての取り組み方について、今後も話し合いが必要であるという結論に至った。

<農業科部会における協議の様子（農業科部会より）>

農業科部会では、「3学年段階が最も学校教育目標に近い形になると思うが、各指導観点の各学年段階で書かれているものは学校教育目標で目指す3つの生徒像のどこに当てはまるのか明確になっているだろうか。しかし、相互にリンクし合う部分・要素があるので明確にはできないものなのだろうか。」という質問があり、これについての話題が中心となった。この意見に対し、「ゴールである学校教育目標の達成を意識しながら、マトリックスの中身を見て指導計画を立てるため、明確にする必要はないのでは」「学校教育目標の3つの中で『希望に向かって努力する生徒』とあるが、これが最も漠然としたものであるため、明確にするのは難しいのでは」といった意見もあった。こうした意見を総合すると、細分化したものは相互に関わりが深いため、どの学校教育目標や目指す生徒像につなげるかを明確にするのは難しいという印象が強かった。しかし、ほぼ完成に近いと思われたマトリックスを初めて見た職員にとっては、多少の認識の違いや戸惑いがあることがわかった。

その他、「前回（第2章6（2）③の段階）に比べて非常に見やすくなり、読みやすくなった」「段階を踏んだ、系統性のあるものになっている」といった意見もあった。また、「『健やかな体』とあるが、体力づくり等を行っているわりにマトリックスではこの部分に関するところが少ないのではないか」「マトリックスは学校のみならず、寄宿舎とも共通認識した上で活用し、指導していくことが必要である」といった意見も出された。

<生活家庭科部会における協議の様子（生活家庭科部会より）>

生活家庭科部会では、マトリックスの系統性については特に意見はなかった。一方、生徒の実態を踏まえて活用できるかという点については、「その年によって生徒の実態が異なると思う」と心配する声もあった。しかし、「今回できあがったマトリックスをまずは活用して実践し、訂正や改善をしていけばよいのではないか」という意見でまとまった。

（４）学科部会における協議を終えて

以上の協議結果は、今年度の研究のまとめを発表する２月の研究報告会において発表された。上記のように、おおむね「このマトリックスでよい」「実践あるのみ」という内容が大半を占めた。よって、第２章（２）④のマトリックスを完成版と位置づけた。

なお、完成したことで職員に配布する際には、次の文言を欄外に加えることで、今後の活用を促すとともに、変更もあり得ることを明記した。

このマトリックスは、平成２４年度の校内研究において、研究推進委員会、学年部会、学科部会が検討を重ねた、最終的に結果まとまった完成版です。

これは各学年段階の指導方針として捉えていただき、これをもとに授業・指導・支援していくよう、また必要に応じて保護者等に説明していただくようお願いします。

しかし、日頃の教育実践等により、再度検討が必要になることも考えられます。そのため「試案」としてしています。検討の必要性を感じたら、研究推進委員会に連絡をお願いします。

（５）今後について

今年度最後の研究推進委員会では、各学年・学科の協議結果や、４月に発表した第６次研究計画をもとに、次年度の方向性を検討した。基本的には、公開研究会に向けて、マトリックスを活用した授業づくりなど、実践的な研究を推進することで一致した。そのための研究組織については、今のところ次のような形が案として挙がったが、これを踏まえて次年度の研究推進委員会や研修部で検討してもらうこととした。

- ① 例えば生単の１年では何を、２年では何をというように、各授業における各学年の系統性を再確認・検討できるよう、教科・形態部会を研究組織とする。
- ② 学科（作業学習）をメインに据え、それとからめて他の授業を見直すという流れで研究が進むような研究組織にする。
- ③ 今年度は学年・学科でマトリックスを作成したことから、引き続き学年・学科を研究組織とする。

※ 第４次研究までは、形態部会を研究組織として行っていた。業務多忙、発表にとどまる等の反省があり、第５次研究は学年を研究組織として行っていた。現在の第６次研究は、その年ごとの研究目的にあわせて研究組織が変化する可能性を示唆してスタートした。

5 成果と課題

(1) 今年度の研究を終えて

- ① キャリア教育という考え方やその必要性についての共通理解
- ② 在学生や卒業生の実態把握
- ③ 学校教育目標の達成に向けた「今養版キャリアプランニングマトリックス」の作成と各学年・学科の指導目標・内容の見直し

～取り組みそのものについて～

- ・①にあたる「キャリア教育学習会」は、キャリア教育の概念を共通理解する上で有効であった。今後もこうした取り組みを継続したい。
- ・②については、③に取り組む過程で要望が挙げられれば実施する予定としていた。結果、要望はなく実施しなかった。③で手一杯だったとも言えるのではないか。今後この②については、どのように取り組んでいくべきか検討していく。
- ・③では、キャリア教育の視点から本校の教育方針が見える形にできた。学校教育目標の達成に向けて、どの段階でどのような内容を指導していくべきかを具体化することができた。しかし、あくまで「試案」であるため、次年度からの実践を通して必要があれば見直していく。
- ・①や③を経て、教職員全員でキャリア教育と本校の教育について考えることができた。そうすることで、一人一人が“こう育てたい”という気持ちを再整理し、それを伝え合い、マトリックスという教育方針にその思いを込めることができた。その過程で、一人一人の教育への取り組みがより明確になるとともに、責任感を再度確認することができた。

～取り組み方法について～

- ・研究計画が大まかすぎて、何をどうするかははっきりしない中でスタートしてしまったため、研究推進の見通しが持ちにくかった。いわば“やりながら考える”というスタイルであったため、進めていくにつれ何かが明らかになったり、こうしたらいいのではという懸案が見えたりした。ゆえに、計画が変更になったり、会議も計画的に行えなかった。
- ・③については、各学年の協議を終え、全ての空欄を埋め、指導観点ごとに見てみると、“前学年を引き継ぐ形で指導方針が立てられている”と言える状態にはならなかった。協議の方法は学年内では工夫されていたが、最初から抽出メンバーによるワーキンググループで指導観点ごとに検討を進めるという方法もあった。いずれにしても、時間が足りなかった。
- ・寄宿舎には研究の推進状況を伝えてはいたが、学舎ともに積極的に歩み寄って研究を進めていたとは言い難い。寄宿舎職員の全体研修会への出席や、マトリックスに基づく実践協力など、今後は連携強化を検討した方がいいのではないかという意見が聞かれる。また、今年度

の学校評価には、卒業後を見据えた余暇活動に関する指導の充実が明記されている。こうしたことを踏まえ、次年度の研究については計画段階から学舎で協議していく。

～まとめ・次年度に向けて～

以上の反省をもとに、今後は研究の推進方法をさらに検討・計画し、このマトリックスを有効に活用した系統性のある教育活動（学習指導・生徒指導・進路指導）を展開できるような研究を進めていきたい。そうすることで、生徒のキャリア発達を促していく効果的な教育の創造を目指していきたい。

それにはまず、授業そのものの見直しは不可欠である。しかし、指導方法や教材教具を見直すだけではなく、年度当初から意識的・意図的に教育計画や年間指導計画を作成することや、次の実践へとつなげるための適切な評価の在り方を検討するといった、広い視点からの見直しが必要になるだろう。また、今年度の学校評価には、社会体験やボランティア活動など体験的な特別活動を一層取り入れること、公開授業や授業参観を通して教職員の授業力を向上することも明記されていることから、こうした取り組みも検討が必要になるだろう。

（２）本研究と関係する本校特有の課題について

本研究でまとめたマトリックスは、就労を前提とした社会生活を送るために必要な力の育成を目指した指導方針の一覧と言えるだろう。しかし、教職員がマトリックスに基づいた学習指導をしたとしても、その指導効果を左右しかねない問題が近年顕著に見られる。例えば、雇用環境や福祉分野の支援体制といった進路指導上の諸課題、家庭環境や入学以前の生育歴などから派生している生徒指導上の諸問題などがある。

特に後者の諸問題には、従来の知的障害・発達障害に対応した教育では対応しきれないような複雑な場合もある。マトリックスはこうした問題を発見したり、解決へと踏み出すきっかけとはなり得るかもしれないが、解決に向けては別の方策が必要ではないかと考える。

また、「本校におけるキャリア教育の推進」と同時に「その指導効果を左右しかねない問題への対処」も必要であるならば、本校はどのようにこれを進めればよいのだろうか。

本校は今金町という人口６千人以下の郡部の町に位置し、檜山管内唯一の特別支援学校である。３学科（既設科２、生活科１）を設置し、生徒数は７５名、寄宿舎を併設しており、７１名が入舎している。総職員数は７０名、うち教務（教諭、実習助手等）４６名、寄宿舎指導員１５名である。特筆すべきは、期限付き教諭、新採用教諭、長期休暇中の教諭の多さによる仕事の継承性である。教諭３９名中１０名が期限付き及び新採用、４名が長期休暇中である。さらに外勤中心の教諭は授業に入りにくいなど、様々なことを考慮した上で教育課程・時間割・授業・その他の業務を組み立てなければいけない。

キャリア教育実践のカギは、１つに「生徒が主体となること」、１つに「教育課程の見直しと授業改善をすること」、そして「組織の見直しをすること」であると言われる。つまり、このままの組織体系で果たして機能するのだろうか、検討が必要ではないか、ということである。これを機に、組織の在り方や、教職員一人一人の在り方を見つめ直す時期にきているのではないだろうか。

「キャリア教育」について考える

H24.5.11 研究推進委員会

はじめに

「キャリア教育」という言葉自体、堅苦しいイメージはないでしょうか。難しそう、よくわからない横文字ということで、嫌いな方も正直いらっしやると思います。確かにキャリア教育は理想主義的なところがあり、限界があると言われています。

しかし、知らぬ間に実践していたことが「それってキャリア教育じゃない!」ということもたくさんあるので、「やることはほとんど同じだけど、新しい見方・考え方で今一度見直してみよう」という意識で取り組んでいただけたらと思います。

そのために、この資料では難解な言葉をかみ砕いて、キャリア教育に対する共通イメージが持ちやすいよう工夫しました。まずは“共通理解”を念頭に、研修を進めていただきたいと思います。

(1) 「キャリア教育」とは何なのか

数ある「キャリア教育とは」という堅苦しい定義…そのなかで、最新のものはこちらです。

一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育

中央教育審議会『今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）』（H23年1月）

「キャリア発達」とは何かというと、こちらです。

社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現していく過程

中央教育審議会『今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）』（H23年1月）

過去のもの比べると、端的にわかりやすい定義になった方だと思います…。

ですが、まだ「?」という方もいらっしやると思います。これはどうでしょうか。

生涯にわたる自分のキャリアを、自分で考えるようにするための教育。

学校段階で自分のキャリアを考える重要性を理解し、そのための方法を学び、

学校を出てから自分で自分のキャリアを考えていけるようにするために必要な教育を行うこと。

下村英雄「キャリア教育の心理学」より

「キャリア」を「進路」に置き換えて考えると、いくぶんイメージしやすいかと思います。

が、「キャリア」の言葉の中身は「進路」だけではないのです。もっと広い意味を持っています。

(2)「キャリア」という横文字をどうイメージするか

「キャリア」という言葉の意味…これがピンとくると、あとは早いです。

人は「働くこと」を通して、人や社会にかかわることになり、そのかかわり方の違いが「自分らしい生き方」となっていくものである。このように、人が、生涯の中で様々な役割を果たす過程で、自らの役割の価値や自分と役割との関係を見いだしていく連なりや積み重ねが「キャリア」の意味するところである。

中央教育審議会『今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）』（H23年1月）より一部抜粋

“連なりや積み重ね” という言葉が出てきました。

いままで「キャリア」と聞くと、**図1**のようなイメージをお持ちではなかったでしょうか？

「キャリア」の語源はラテン語の carrus（荷車）で、車が道をずっと走っていくような「続くもの」という考え方・状態を指すそうです。つまり**図2**の方が本来の意味に近いと思われます。

「キャリア」を訳そうとした昔の専門家たちは「経歴」「進路」「職業」という言葉を当てたそうですが、意味が限定されてしまって、しっくりこなかった、なのでそのまま「キャリア」という言葉が遣われるようになったらしいです。なので、日本のキャリア教育の理解は、各自の解釈で決まってしまう面があるそうです。

いずれにせよ、この「キャリア」という言葉は、今まで日本語にはなかっただけで、人の一生において欠かせない考え方ではないでしょうか。人は産まれて死ぬまでずっと「キャリア」を積み重ね続け、生きている。といったところでしょうか。

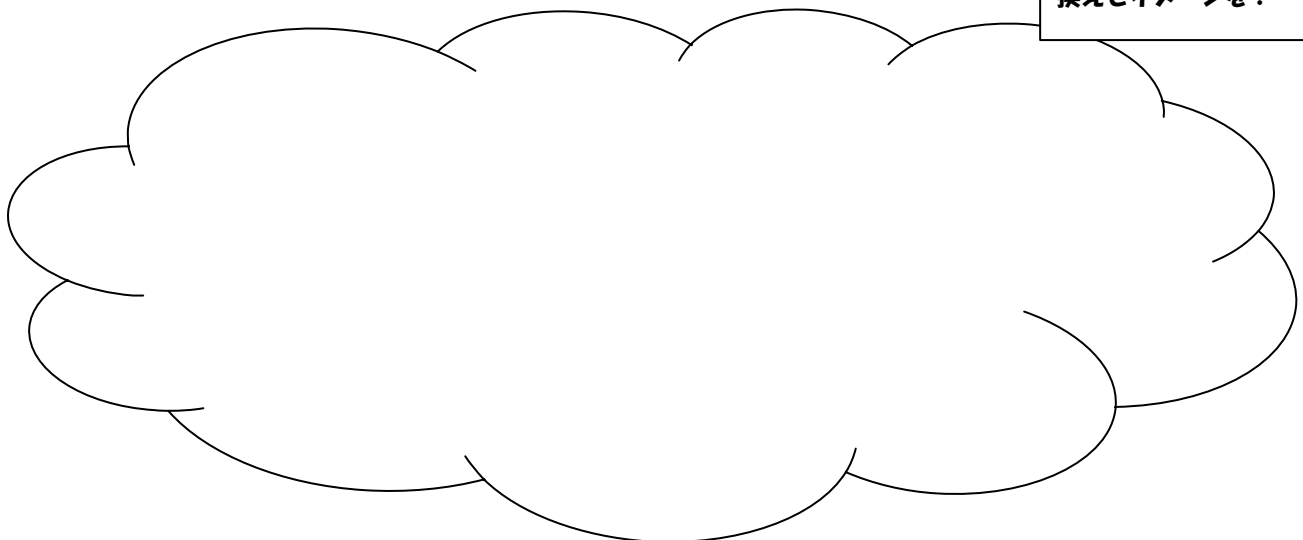
図1



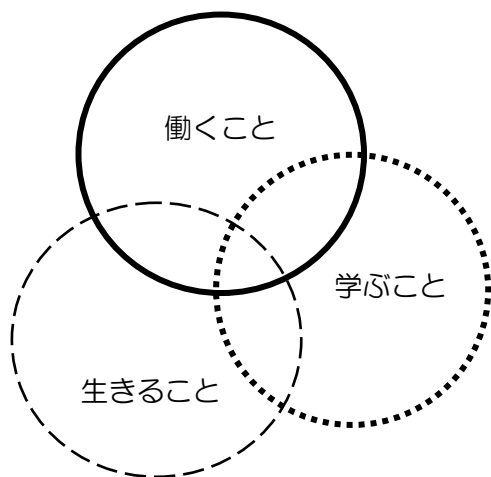
図2



～ 先生のキャリアを教えてください！ ～



(3)「キャリア教育」を実践する前に・・・



キャリア教育の重要な3つの要素は、左図の3つであると言われています。

長く「働く」ためには、「学ぶこと」も続けていく必要がある・・・そうすることで、幸せに「生きること」ができる・・・この3つがくっついている（つながっている）ことが望ましいというのが、キャリア教育の根幹にある発想です。

我々は、どうでしょうか。

卒業した生徒たちは、どうでしょうか。

キャリア教育は、単に職業や仕事を決めるだけではなく、その後の生活を考え、それに備えた準備をさせようとするものです。準備といっても、モノの準備から心の準備まで、いろいろあると思います。

かずや	たつや	
 ・将来子どもにいろいろな話をしてあげられる教員になりたい	二人の共通点 ・土木、建築、コンビニ店員、ボランティア・・・仕事を転々としている（様々な職業を経験している） ・仕事は長くても1年くらい、短くて数ヵ月	 ・食っていくだけの生活費を稼げればいい ・特に何がしたいというものはない

世間一般的に“いい人生”を送れそうなのは、どちらでしょうか。自分がいまやっている仕事（こと）が、次に繋がっているという感覚、将来に役立っているという感覚を持てなければ、仕事に対する不満が募り、ちょっとしたトラブルもストレスになり、仕事自体に大きな不満を抱き、職を転々とし・・・ニートになり・・・と悪循環に陥るでしょう。つまり、_____の感覚（考え方）、すなわち自分の人生全体という視点から物事を考えるということが重要であると言えます。

では、子どもを育てる側の我々大人（教師、保護者、地域住民、企業の社員、施設の職員・・・）は、すでにこのような考え方を持って生きているのでしょうか・・・？

ところで、今の時代は変化の激しい時代です。情報化・国際化・技術の進歩等によって、働き方は様々になった一方、働きやすいとは言い切れない世の中になっています（雇用形態の多様化、能力主義、効率化…フリーターやニートの増加の一因）。なので、キャリアという考え方を持ちにくいのは確かです。

しかしながら、社会の動きが激しくなり、複雑化し、見通しの持てない世の中を生きる上では、決まり切った一本道をいかに選ぶかではなく、より根本的に、自分が進む道をいかに切り開いていくかが重要になっています。つまり、卒業までに職業や仕事を決めるだけでなく、卒業後のキャリアを自分で作り上げていくための力を身につけさせる必要がある…と言えます。

具体的には、新しい知識や技術が必要になるたびに、自分で情報を集め選択する力、自分で勉強する力、それを仕事や生活に生かす力（勉強の仕方を学ばせる、勉強したことを生かす方法や喜びを学ばせる）を身につけさせる教育が必要なのではないでしょうか。

というわけで、そんな「キャリア教育」をどうやっていくかを考えるのが、この研究です。

明日からでも授業・指導を見直すのもアリですが（来年から本格的に行う予定）、それをしつつも今年は、“〇〇科の〇年段階ではどんな力を身につけさせるべきか”というオオモトをしっかり固めていければと考えています。

ではどうやって固めていくのか？ということは、いま研究推進委員会で話し合っています。

次の学年部会までに、その第1案を出しますので、ご意見等よろしくお願いいたします。

「キャリア教育」の概要と必要性を考える

H24.5.11 研究推進委員会

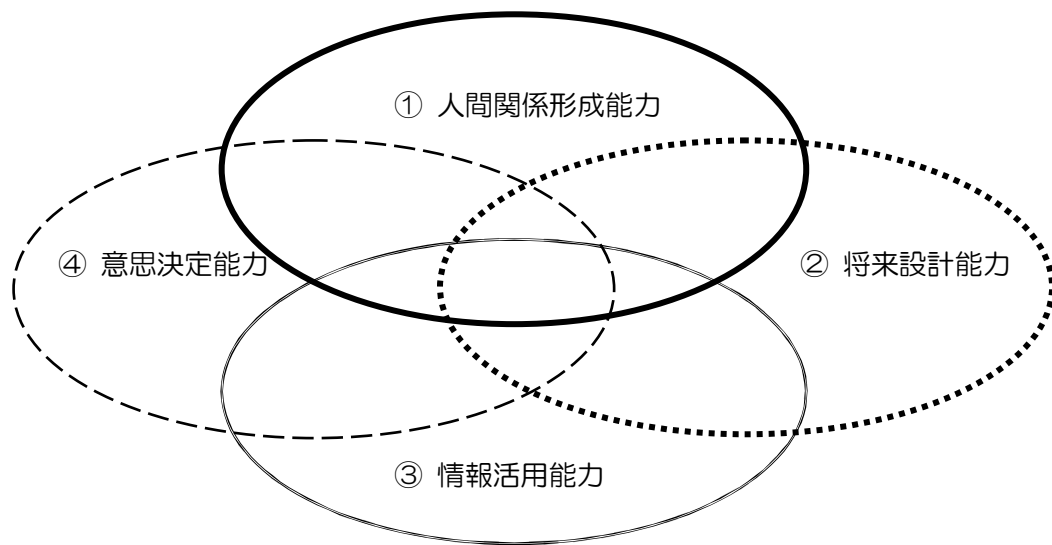
はじめに

学年部会でも「キャリア教育」について学習していただくので、しつこいと思われるかもしれませんが、よろしくお願いします。こちらの資料は、学年の資料よりも詳しく、細かい点を学習していただくように作成していますので、多少堅苦しくなってしまうかもしれませんがご了承ください。

また、普段は主に作業学習について話し合っている場での学習会なので、どうしても作業学習のシーンをイメージしがちだと思いますが、キャリア教育は作業学習だけで成し遂げられるものではない…ということは、学年の学習会を踏まえるとご理解いただけたらと思います。これまでの学科部会よりもちょっと広い目線で、まずはざっくりばらんにキャリア教育の必要性を“共通認識”していただくことを念頭に、研修を進めていただけたらと思います。

(1) 概要 ～ 押さえておきたい4領域8能力

「キャリア教育」についてよく言われるのは、4つの領域、8つの能力というものです。



4 領 域	8 能 力
① 人間関係形成能力	・ 自他の理解能力
	・ コミュニケーション能力
② 将来設計能力	・ 情報収集・探索能力
	・ 職業理解能力
③ 情報活用能力	・ 役割把握・認識能力
	・ 計画実行能力
④ 意思決定能力	・ 選択能力
	・ 課題解決能力

これが職業観・勤労観の形成に関係する能力であるとい一般に押さえられています。学年が上がるごとにより高度な内容に育まれていくため、キャリアの発達段階と言い換えることもできます。

※ 最近では「基礎的・汎用的能力」という名称で、この4領域8能力が再編されていますが…

↑ よりややこしいので、ここでは割愛します。

(2) データから見る必要性

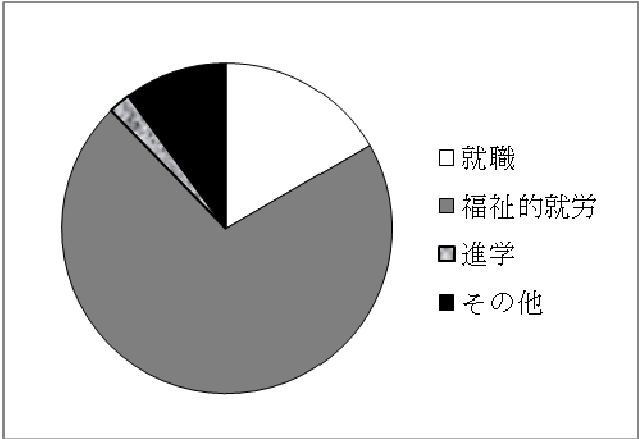
表・図1 本校の卒業生の動向（1～13期生）

	就職	福祉的就労		進学	その他	卒業生数合計
		通所	入所			
男	31	99	33	6	19	188
女	19	50	15	2	10	96
合計	50	149	48	8	29	284

（福祉的就労合計 197）

※ 入所・通所についてはショートステイ・私的契約を含む）

※ 2012年度現在



このような表を掲載していますが、動向が複雑で所属先が不明確であるケース、動向がつかみきれないケース等があり、データとしては曖昧な側面があります。論拠としては弱いですが、これしかないのでご了承ください。

表2 就職に関する数値の変化 ※ 研究紀要編成にあたって、2013年1月末現在のデータに修正しています

		1期生	2期生	3期生	4期生	5期生	6期生	7期生	8期生	9期生	10期生	11期生	12期生	13期生	合計
卒業生数	A	23	18	22	17	18	23	21	23	25	26	24	21	23	284
卒業時の就職者数	B	7	5	4	2	0	3	4	5	4	6	0	6	4	50
卒業時の就職率(B÷A)		30.4%	27.8%	18.2%	11.8%	0.0%	13.0%	19.0%	21.7%	16.0%	23.1%	0.0%	28.6%	17.4%	17.6%
福祉的就労・技専等からの就職	C	1	0	1	2	1	0	4	1	5	2	3	0	1	21
離職者数(再雇用された者は除く)	D	6	2	3	1	0	1	3	4	3	2	0	0	0	25
現在の就職者数(B+C-D)	E	2	3	2	3	1	2	5	2	6	6	3	6	5	46
現在の就職率(E÷A)		8.7%	16.7%	9.1%	17.6%	5.6%	8.7%	23.8%	8.7%	24.0%	19.2%	12.5%	28.6%	17.4%	16.2%

参考としてデータをあげました。

就職率を上げることが本校の役割・キャリア教育の姿とは言い切れません（それが全てではないと思います）。

問題は、離職した人（D）が多いところにあります。卒業時、また卒業後に就職した者の数（B+C）に占める離職者の割合（離職率）は35.2%。

また、現時点で就職している人は16%程度であり、卒業時点は17%程度だった就職率より若干悪くなっています。

進路指導部によると、離職の理由には以下のようなものがあるそうです。

- ・職場の人への暴力（本人は自閉傾向）
- ・職場の対人関係のもつれ
- ・GHの対人関係のもつれ
- ・意欲（仕事を休みがち）

生徒自身の問題が大きいのでは？
つまり本校の指導にも課題が…？

- ・農家手伝いだが、冬場は仕事がなく在宅
- ・会社が倒産
- ・家庭の事情
- ・家業手伝いのため

支援する側（家庭、会社、地域）に課題があるのでは？
つまり本校の支援の仕方にも課題が…？

このような人たちは、離職してから進学、福祉的就労へと結びついたケースもありますが、在宅というケースもあるそうです。

また、上記と同じような理由で、卒業時点・卒業後の福祉的就労からも辞めたケースもあります。

卒業時点で就職した人も、そうでない人も、その後どれだけ豊かな人生を送ることができるのか…豊かな人生を送るには何が不可欠なのか…

そうした実態を捉え、在学生に対する授業・指導を改善・工夫していくことが必要ではないでしょうか。

（３）他校の実践例

昨年度、研推の中でキャリアの学習会をした際に、他校の実践例をたくさん紹介しました。その中から厳選したものを次項に載せました。

これらはすべて、キャリア教育の考え方をもとに計画を立てて実践しているものです。

学習活動内の工夫・取り組み

学校名	教科・領域	目的	取り組み内容
和歌山大学付属養護 学校高等部	作業学習 (窯業)	芸術教育の観点を取り入れた作業 学習の試み。	・作業学習(窯業)と芸術教科(陶芸)との接点と相違点をふまえ、芸術価値をプラスし 付加価値を高めることで、労働意欲の喚起につながるような授業展開。
東京都立青島特別支援学 校・都市園芸科	作業学習 (農・園)	「農」の教育力	・作付け計画から、一人一ウネで責任を持たせて、個人で取り組ませている。
埼玉県立特別支援学校 羽生 ふじ高等学校 農業技術科・園芸コース	職業教育 (農業)主に草花栽培	職業教育(農業)を通して、就労 に必要な態度、習慣、意欲の育成 (栽培から販売まで)	・毎週木曜日に農産物販売会。 ・イベント参加(JA・市役所)。 ・校外(公園、市役所、老人保健施設)での作業実習(通常授業内で)。

学校としての取り組み

学校名	教科・領域	目的	取り組み内容
滋賀県立甲南高等養護学 校〔職業高校(甲南高校) との併設が特徴〕	・作業学習 (農) ・職業高校との連携	実践交流を通して、生徒ががんば れる機会を増やす環境づくり	・職業高校のノウハウを生かし、職業体験交流のなかで農業技術(機器の操作も含め)の 指導を行う。また、様々な活動を合同で行う(学校行事、生徒会行事、部活動)。 ・教職員の兼務。
山形県立鶴岡高等養 護学校	・作業学習 ・関係機関との連携	関係機関と連携した職業教育と就 労支援	・入学時に学科を決めず、希望適性を見て選択(生徒、保護者、学校の考えをまとめて) →1年次は野菜班と草花班 →2,3年次は被服班、木工班、窯業班、紙工班 ・産直で継続的な対面販売(5月～11月の毎週金曜日)。 ・移行支援ネットワーク会議(各市町村福祉科、商工課、職安、商工会議所、就業・生活支援センター)。
東京都立田園調布特 別支援学校	・作業学習	地域・企業等の連携	・さくらカフェ&ショップ(営業時間→月・木の作業時間) ・地域の企業、施設での作業学習 ・カタログ販売 ・企業等アドバイザー事業
さいたま桜高等学園	・作業学習	確かな就労と定着のために	・全員通学(2時間かかる子も) ・現場実習の特定期間がない(会社のニーズに合わせ) ・専門教科の売り上げ400万円 ・コミュニティショップ桜

横浜市立日野中央高等特別支援学校	・作業学習 ・進路指導、開拓	企業就労100%を目指す	・教育課程編成の基本方針の最初に「社会的自立に必要な能力を育成する」。特に、挨拶・返事・報告・質問の徹底が図られている。 ・作業は受注作業が中心。地域とのかかわりの中で、卒業生がいる居酒屋に食器を納入。 ・体力つくりなし。部活が盛んで朝練あり。 ・進路専任に市役所の方が入る。 ・企業とタイアップし、3年間通じて実習、インターンシップを行っている。
------------------	---	--------------	--

※東京都立石神井特別支援学校、青島特別支援学校、あきるの学園、千葉県立流山高等学園・・・これらの学校は各学校のHPを参考にしてください。

組織としての取り組み

組織	目的	取り組み内容
埼玉県教育委員会	・学校紹介 ・啓発	・「教育さいたまマガジン」の読者プレゼントで、県立特別支援学校の生徒が作業学習で製作した作品を詰め合わせでプレゼントとしている。県のHPにも掲載。
京都市立（鳴滝・白河）総合支援学校 京都教育委員会	教育委員会も含め、企業と連携したディアルシステムを使った取り組み	・1年次 12時間（流通サービス、家政を6時間並行履修）2年次 14時間（選択履修） ・資格取得（ワープロ、パソコン、クリーニング、ホームヘルパーなど） ・地域や企業との連携（ディアルシステム）巣立ちのネットワーク（学校、行政、教育委員会が連携）企業に対して、生徒の企業就労についての理解を深めてもらう年1回の雇用フォーラム開催（15年で70社参加）。ディアルシステムを利用し、1、2年で職場体験実習を行い、色々な職種職場を体験させる。白河総合支援学校では、夏休みに保護者と職場開拓。
鳥取県	・一次産業との連携 ・啓発	・「鳥取発！農福連携モデル事業」（実践例、鳥取県における農業や水産業等と障がい者福祉施設との連携について紹介）平成22年12月28日発刊。また、農業分野への障がいのある人の職域拡大を目標として、農林水産部門と福祉部門が連携し事業を推進。

まとめてみて感じたこと

- ・関係機関との連携した取り組みが多い（企業、教育委員会、ハローワーク等）。
- ・地域の素材を生かしている。
- ・発達段階もふまえ、「指導内容表」「入学から卒業までを見通したシラバス（学習計画）」を作成している。
- ・地域の実態を生かした作業種の導入や、外部発信の仕方を工夫している。

6 資料 （2）マトリックスの推移

① マトリックス様式の原案

縦軸・研修部がまとめた 8つのカテゴリー		と、その中身 (抽出した文言90個)		今養版キャリアプランニングマトリックス (イメージ)		
観点	下位項目(観点の中身)	科	1学年	2学年	3学年	学校教育目 標の達成
健康な 心と体	元気な力、元気、体力、健康、睡眠・休養、食べる こと、規律ある生活リズム、ストレスとうまく付き 合える、気分にもうを作らない	産業科	学科による区切り線	横軸・1～3学年		
		農業科				
		生活家庭科				
自己理解	特技・自分の強み、課題を見つける力	産業科			到達目標の明記	
		農業科				
		生活家庭科				
進路 (職業)	仕事のえり好みをしない、気分的に嫌でも受け入れ る、責任感、向上心、自立心、働く意識、課題を解 決する力	産業科				
		農業科				
		生活家庭科				
意欲	集中力、持久力、持続力、忍耐力、積極性、負けず 嫌い、自主性、前向きである、様々な物に興味を持 つ	産業科				
		農業科				
		生活家庭科				
知識・技術	職業理解・分析能力、技術・知識、専門性、買い 物、乗り物を利用できる 常識、マナー、身だしなみ、礼儀、ルールを守る、 整理整頓、時間を守る	産業科				
		農業科				
		生活家庭科				
コミュニ ケーション	素直さ、忠実に、声の大きさ、あいさつ・返事、報 告・連絡・相談、言葉遣い、話す・聞く、協調性、 周囲と協力できる、謙虚な心、反省の心、感謝の 心、困った時に助けてくれる人、ネットワーク構築 能力、相手を認める	産業科				
		農業科				
		生活家庭科				
応用力	洞察力、周りを見ること、判断力、気づく力、意思 決定、理解力、気遣いできる、空気を読む、めんこ がられる力、計画立案能力・計画性、実行力、目的 意識(余暇・お金)やりがいを見つけられる・見い だす、生活全てを楽しむ力、余暇の充実、柔軟性、 効率性、情報収集、情報活用、情報共有、取捨選択 能力、探索能力、自己統制力、自己管理、笑顔でい ること、安全に気をつける、休まない	産業科				
		農業科				
		生活家庭科				
感性	発想力、表現力、感じる力	産業科				
		農業科				
		生活家庭科				

② 完成したマトリックスの様式

今養版キャリアプランニングマトリックス（試案）

指導観点	観点の中身(解説)	1学年	2学年	3学年	枠作成:平成24年7月末日
心と体	元気、体力、健康、睡眠・休養、食生活、規則正しい生活、ストレスコントロール				学校教育目標の達成 豊かな心と健やかな体をつくる生徒 希望に向かって努力する生徒 自ら判断し行動する生徒
自己理解	自分の長所や課題を見つける力、他者からの評価を受け入れる力				
職業	責任感、向上心、自立心、働く意識、将来の目標に向けて課題を解決する力、将来の目標を立てる力、職業理解・分析能力、実行力、働く喜びを知る				
自己内省	集中力、持久力、持続力、忍耐力、積極性、負けず嫌い、自主性、前向きである、様々な物に興味を持つ、素直さ、忠実さ、謙虚な心、反省の心、感謝の心				
知識・技術	公共交通機関の利用、金銭管理、職種に応じた知識・技能、読み書き計算、常識、マナー、身だしなみ、礼儀、ルール、整理整頓				
コミュニケーション	声の大きさ、あいさつ・返事、報告・連絡・相談、言葉遣い、話す・聞く、協調性、人づきあい、他者理解				
応用力	洞察力、判断力、意思決定、理解力、計画性、余暇の充実、柔軟性、効率性、情報収集、情報活用、取捨選択能力、自己統制力、危険回避、協力				
感受性	発想力、表現力、感じる力				

イメージ（学年で協議して、研推ですりあわせたら・・・）主語は生徒になっていますが、指導者が指導する際の目標であると捉えてください。達成できる！

自己理解	自分の長所や課題を見つける力、他者からの評価を受け入れる力	自分のいいところと、直した方がよいところを知る。	いいところは伸ばし、直した方がよいところは直すよう努力することができる。	自らの成長と課題を理解し、卒業後の生活を見据えて必要な努力を重ねることができる。
------	-------------------------------	--------------------------	--------------------------------------	--

↑この観点と観点の中身について、その学年段階の到達目標を立てる

1年次を踏まえてより高い目標

2年次を踏まえてより高い目標

すると卒業時には・・・

③ 学年部会における協議を終えた時点のマトリックス

今養版キャリアプランニングマトリックス（平成24年12月6日現在 試案）

指導観点	観点の中身(解説)	1学年試案	2学年試案	3学年試案
心と体	・元気 ・体力 ・健康 ・食生活 ・睡眠・休養 ・規則正しい生活 ・ストレスコントロール	●毎日元気に一日を過ごすことを目標とする。そのためには、気持ちや体の具合の不調に気づき、改善を試みる姿勢が身につくよう指導する。 ●日課を基本として生活リズムを整えること、望ましい食生活を身につけること、体力向上の努力をすることを指導する。	●自分の体調の変化に気づき、訴える力を育む。 ●悩みを相談できる相手を作る力を育む。 ●健康維持に必要なことに気づき、実践する力を育む。	●卒業後の生活を見据え、自ら心と身体の健康が保てるよう、望ましい生活習慣を形成できる力を育てる。
自己理解	・自分の長所や課題を見つける力 ・他者からの評価を受け入れる力	○自分について知り、人から受けた評価にも耳を傾けられるよう指導する。	○自分の長所や課題を受け入れる柔軟な思考を持つ力を育む。 ○周囲のことに興味や関心を持ち、相手の存在を受け入れることができる力を育む。	○他者の気持ちや考え、評価を謙虚に受け入れ、尊重しながら自己理解を深めることができる力を育てる。
職業	・責任感 ・向上心 ・自覚心 ・実行力 ・職業理解・分析能力 ・働く意識 ・働く喜びを知る ・将来の目標を立てる力 ・将来の目標に向けて課題を解決する力	●与えられた仕事の意味を理解して時間いっぱい集中し取り組むよう働きかけ、責任ある態度を育てる。 ●身の回りのいろいろな仕事について、社会との関わりやその仕事に求められる能力などを考える力を育てる。	●自分の適性がわかり、将来の職業について具体的に考えることができる力を育む。 ●手早さ、正確さ、丁寧さを意識しながら与えられた仕事に責任を持って取り組むことができる力を育む。	●自立した社会人を目指すために自ら課題を理解し、問題解決能力を育てる。 ●職業生活の中にやりがいや生きがいを見いだし、前向きに自己の未来を設計する意識や社会の一員である自覚を育てる。
自己内省	・集中力 ・持久力 ・持続力 ・忍耐性 ・自主性 ・素直さ ・忠実さ ・負けず嫌い ・前向きである ・様々な物に興味を持つ ・謙虚な心 ・反省の心 ・感謝の心	○集中するイメージと継続して学習する意識を持ち、目標を達成する力を育てる。 ○身近なものや事柄に興味を持ち、成功や失敗を繰り返しながら自分の考えを整理し、適切な判断ができる力を育てる。 ○自分の行動や言動が相手に及ぼす影響に気づき、自己を振り返りながら、素直な気持ちで話を聞く態度と力を育てる。	○他者との関わりを通して、自分の考えを持ち、発言することができる力を育む。 ○自己決定・自己反省の過程を繰り返し自己内省を深めることができる力を育む。 ○自主的・積極的に活動に取り組む力を育む。 ○他者への感謝の心を持ち、それを表現することができる力を育む。	○自らの課題解決に向け、素直な気持ちで取り組む力を育てる。
知識・技術	・公共交通機関の利用 ・金銭管理 ・職業に応じた知識・技能 ・読み書き計算 ・常識 ・マナー ・身だしなみ ・礼儀 ・ルール ・整理整頓	●金銭管理や読み書き、計算などの生活に必要な基礎的な知識が身につくよう指導する。 ●集団生活を通して、社会のルール、マナー、礼儀などを意識して生活し、行動できるよう指導する。	●仕事や生活、余暇について学習し、社会人として必要な知識を身につけさせる。 ●各教科などで得た知識を、作業や現場実習の場面で生かすことができる力を育てる。 ●他者の心情も考えながら、身なりを整えたり、身の回りを整理することができる力を育てる。	●どのような相手や場面においても、礼儀正しい態度や表情、言動ができるよう指導する。 ●社会生活に必要な、全般的な知識や生活技能を身につけることができるよう指導する。 ●社会生活において守るべきのしくみやルールが理解できるように指導する。
コミュニケーション	・声の大きさ ・あいさつ・返事 ・報告・連絡・相談 ・言葉遣い ・話す・聞く ・協調性 ・人づきあい ・他者理解	○あいさつや返事、簡単な敬語を使うなど、社会生活に必要な意思表現能力が高まるよう、日常的に指導する。 ○相手の考え・気持ちを受け入れる力や集団に合わせる力を育てる。	○場や状況に合わせた声の大きさや、言葉遣いができる力を育てる。 ○場や状況に合わせた、あいさつ、返事・報告ができる力を育てる。 ○必要な支援を他者に求めることができる力を育てる。 ○相手の立場や考え方を理解して、かかわることができる力を育てる。 ○相手の話を最後まで落ち着いて聞くことができる力を育てる。	○自分や他者のよい点を認め、思いやりを持って、よりよい人間関係を形成できる力を育てる。 ○目上の人に対し尊敬の念を持ち、相手の人格を尊重するような適切な言語の表現能力を養う。 ○解決出来ない問題に対して、地域の中で適切な相談相手を選んで支援を求める力を育てる。
応用力	・洞察力 ・判断力 ・理解力 ・計画性 ・意思決定 ・柔軟性 ・効率性 ・情報収集 ・情報活用 ・取捨選択能力 ・自己統制力 ・危険回避 ・協力 ・余暇の充実	●場や状況に応じて、何ができるか、何をすべきかを考える力を育てる。 ●目標を達成するためには工程があることを理解し、与えられた計画や工程に取り組む態度を育てる。 ●学習活動や余暇活動に取り組む中で、様々な分野の活動を知ることができるよう支援する。 ●自分の発言や行動が周りにどのような影響を与えるかを知るとともに、望ましい発言や行動の方法がわかり少しずつ積み重なっていくよう、日常的に指導する。	●自分の得意なこと、不得意なことがわかる力を身につけさせる。 ●学校生活、家庭生活において自分が果たす役割を理解し、実行することができる力を育む。 ●自己の個性や興味・関心に基づいた選択をすることができる力を育む。 ●集団における役割がわかり、周りと協力することができる力を育む。	●余暇の充実に向け学校・寄居舎・地域生活を送ることができ、卒業後の生活に生かせる力を育てる。 ●進路希望の実現に向け、卒業後の生活に必要な情報収集・取捨選択し、自ら判断して行動できる力を育てる。 ●社会人として必要な規範意識を育てる。
感受性	・発想力 ・表現力 ・感じる力	○感じたこと・思いついたことを人に伝えることができるよう指導する。	○必要な支援を適切に求めたり、相談できる表現力を身につけさせる。 ○指示・助言を理解し実行することができる力を育む。	○他者とかかわる機会を増やし、様々な経験を積むことによって、自分以外の人の気持ちを考える力を育てる。 ○柔軟に物事を受け入れたり、表現する心を育てる。

学校教育目標の達成

豊かな心と健康な体力を生徒をつくる生徒

希望かな断行す努力かな生徒

④ マトリックス検討日＋研究推進委員会による調整を経た時点のマトリックス

今養版キャリアプランニングマトリックス II－3（平成25年2月4日現在 試案）

指導観点	観点の中身(解説)	指導の柱	1 学 年 段 階 (学びを通して気づく・知る)	2 学 年 段 階 (将来を意識し、自ら学び・行動する)	3 学 年 段 階 (将来を見据え、自ら学び・行動する)
心と体	・元気・体力・健康 ・食生活 ・睡眠・休養 ・規則正しい生活 ・ストレスコントロール	心身の健康	●健康でたくましい心と体の必要性に気づかせ、身につけることができるよう指導する。	●自らの心と体の変化をとらえ、心身の健康を維持できるよう指導する。	●卒業後の生活を見据え、自ら心と身体の健康が保てるよう、望ましい生活を組み立てる力を育てる。
		基本的生活習慣の確立	●生活リズムを整え、望ましい食生活や規則正しい生活ができるよう指導する。	●自立した生活を意識し、望ましい生活習慣を身につけることができるよう指導する。	
自己理解	・自分の長所や課題を見つける力 ・他者からの評価を受け入れる力	長所・課題の理解	○自分の長所や課題に気づくことができるよう指導する。	○自分の長所や課題を受け入れるとともに、自己肯定感を持つことができるよう指導する。	○自分の長所や課題を踏まえて、自分の気持ちや考えをしっかりと持ち、自分らしさを持てるよう指導する。
		他者からの評価の受容	○他者から受けた評価に、耳を傾ける気持ちを育む。	○他者から受けた評価を受け入れる気持ちを育む。	○他者の気持ちや考えを理解・尊重し、自分のあり方・生き方にいかすことができる力を育てる。
職業	・責任感 ・向上心 ・自主心 ・実行力 ・職業理解・分析能力 ・働く意識 ・働く喜びを知る ・将来の目標を立てる力 ・将来の目標に向けて課題を解決する力	働く態度・能力	●与えられた仕事の意味を理解して時間いっぱい集中し取り組めるよう指導する。	●手早さ、正確さ、丁寧さを意識しながら、与えられた仕事に取り組む事ができる力を育てる。	●自らの仕事の工程や課題を理解し、効率よくやりとげる力を育てる。
		職業理解	●身の回りのいろいろな仕事について、社会との関わりやその仕事に求められる能力などを考える力を育てる。	●自分の適性がわかり、将来の職業について具体的に考えることができる力を育てる。	●職業生活の中にやりがいや生きがいを見だし、前向きに自己の未来を設計する意識や社会の一員である自覚を育てる。
自己内省	・集中力 ・持久力 ・持続力 ・忍耐力 ・積極性 ・自主性 ・素直さ ・忠実さ ・負けず嫌い ・前向きである ・様々な物に興味を持つ ・謙虚な心 ・反省の心 ・感謝の心	物事に対する意欲	○時間いっぱい集中して学習する意識を持ち、目標を達成しようとする気持ちを育む。 ○自主的・積極的に活動に取り組む大切さを知り、自ら努力を続けようとする気持ちを育む。	継続	○自らの課題解決に向け、素直な気持ちで物事に取り組む姿勢を育てる。 ○他者への感謝の心を持ち、それを表現する姿勢を育てる。
		課題を解決しようとする心	○成功や失敗を繰り返しながら反省を積み重ね、他者の意見も受け入れながら、自分の気持ちや考えを整理する力を育てる。 ○自己決定・自己反省の過程を繰り返し、課題を解決する姿勢を育てる。	継続	
知識・技術	・公共交通機関の利用 ・金銭管理 ・職種に応じた知識・技能 ・読み書き計算 ・常識 ・マナー ・身だしなみ ・礼儀 ・ルール ・整理整頓	社会の仕組みなどの知識・技術	●集団生活を通して、社会のルール、マナー、礼儀などを意識して生活し、行動できる生徒を育てる。	●社会のルール、マナー、礼儀などを、状況に応じて使うことができる生徒を育てる。	●社会人として必要なルール、マナー、礼儀を身につけ、社会の一員として生活できる力を育てる。
		読み書き計算などの知識・技術	●金銭管理や読み書き、計算などの生活に必要な基礎的知識が身につくよう指導する。	●身につけた知識を、日常生活で生かすことができる生徒を育てる。	●身につけた知識を応用し、社会の中で生きていく力を育てる。
コミュニケーション	・声の大きさ ・あいさつ・返事 ・観音・建礼・相談 ・言葉遣い ・話す・聞く ・協調性 ・人づきあい ・他者理解	自分から相手に発信	○場や状況に合わせた声の大きさと、あいさつ、返事・報告ができる力を育む。	○あいさつや返事、簡単な敬語を使うなど、社会生活に必要な意思表現能力が高まるよう、日常的に指導する。	○その場にに応じたあいさつ、返事・報告をする力と、相手の人権を尊重するような適切な言語能力を育てる。
		相手の話を聞いて判断	○相手の話を最後まで落ち着いて聞くことができる力を育む。	○必要な支援を他者に求めることができる力を育む。	○解決出来ない問題に対して、地域の中で適切な相談相手を選んで支援を求める力を育てる。
		相手の受け入れ、自らそこに参加する	○相手の考え・気持ちを受け入れる力や集団に合わせる力を育てる。	○相手の立場や考え方を理解して受け入れ、かかわることができる力を育てる。	○自分や他者のよい点を認め、思いやりを持って、よりよい人間関係を形成できる力を育む。
応用力	・洞察力 ・判断力 ・理解力 ・計画性 ・意思決定 ・柔軟性 ・効率性 ・情報収集 ・情報活用 ・取捨選択能力 ・自己統制力 ・危険回避 ・協力 ・余暇の充実	意思決定	●TPOに応じて何ができるか、何をすべきかの選択肢を与え、その意味を理解させ、選択していきける（判断する）力を育てる。	●TPO、自己の個性や興味・関心に基づいて、よりよい選択をできる力を育む。	●卒業後の家庭生活・社会生活・職業生活において、自らの意思と責任でよりよい選択・決定を行うことができる力を育む。
		将来設計	●目標を達成するためには工程があることを理解させ、与えられた計画や工程に取り組ませ、習慣化できるよう指導する。	●家庭生活・学校生活に必要な習慣の確立を目指し、職業生活に活かす力を育む。	●社会生活・職業生活等に必要な習慣の形成に向けた指導をするとともに、余暇の活用等を図り、前向きに自己の将来を設計する力を育む。
		情報活用	●学校・寄宿舎・地域社会の中には様々な活動があることを、体験を通じて理解できるよう指導する。	●自らの興味のある活動や職業等に関して、様々な情報を収集し、自ら活用できる力を育成する。	●希望する進路の実現に向け、卒業後の生活に必要な情報収集・取捨選択し、自ら判断して活用できる力を育成する。
		人間関係	●集団活動に参加し、他者と協力することができる力を育む。	●集団において自分が果たす役割を理解し、周りと協力することができる力を育む。	●集団の一員として自ら役割を理解し、協力していくとともに、その役割を遂行していく力を育む。
感性	・想像力 ・表現力 ・感受性	感受性	○事象や人物によって様々な感じ方・とらえ方があることを知り、経験や疑似体験を通じてその価値に気づいたり認めたりできる心を育む。	継続	○事象や人物によって様々な感じ方・とらえ方があることを理解した上で、柔軟に物事を受け入れる心を育む。
		表現力	○真・善・美として感じたことを言葉・造形・音楽・行動などで表現できる力を育む。	○真・善・美として感じたことを、自身の理想や希望を込めて言葉・造形・音楽・行動などで適切に表現できる力を育む。	○卒業後の豊かな生活を目指し、真・善・美として感じたことを、自身の理想や希望を込めて適切に表現できる力を育む。

学校教育目標の達成

豊かな心と健康な体力を
断念し、行動する力を
生ずる生徒をつくる生徒

第3章

プロジェクト研究

研究主題

『産業科作業行程表の作成 ～製作手順や粘土の取り扱い、清掃手順など、指導内容の統一を図るために～』

1 研究を始めるにあたり（経緯）

学科内の教員が統一した内容で授業を行うための補助教材（資料）づくりの2年目である今年度は、作業工程表ファイルに取り扱われている題材の整備を行うこととした。また、初めて粘土を取り扱う新入生にむけて、作業に必要な道具の名称、保管場所、配置についての補助教材を作成した。

2 担当について

- ① 基本的な動作の工程表：（1 学年）
【作業に必要な道具の準備】
- ② 作業工程表の政策および見直し：（2・3 学年）
【カフェオレカップの工程表】（2 学年）
【ツリー型ランプシェード、白樺カップの工程表】（3 学年）

3 成果と課題

- ① 成果
授業で取り扱う題材の工程表を作成することで、指導者間において作成手順や道具の使用法などについて生徒にわかりやすく伝えるための話し合いにつながった。また、作成にともない一つひとつの工程に着目することで、各工程の中にある重要な動き（集中した状態や複数の工程を同時に進めるなど、指導者がねらいたい活動）について共有することにもつながった。他にも、生徒の実態に応じて題材や作業分担を選定したり、授業全体の時間配分を構成する目安にもなった。
- ② 課題
工程表の作成にあたり、作業手順の細分化をどの程度まで記載するかについて指導者によって考えがあり、突き詰める必要があることがわかった。また、工程表が必要な題材は他にもあり、今後も継続して工程表を整備していく必要がある。必要であれば新たな題材や工程手順を記録した動画の作成なども検討していく。

生徒に統一した指導を行うための教材研究や授業についての話し合いの際に、この工程表が活用され、さらに充実されていくことが望まれる。今後も補助教材（資料）の整備を進めていきたい。

基本的な道具の配置図

- ・水の入ったボール
- ・スポンジ
- ・きりふき
- はかり
- かたくり粉
- ・ボール
- ・ぞうきん
- ・粘土
- ・ぞうきん
- 木型
- ・カッター
- ・切り針
- ・自分の印花
- ・のべ棒
- ・布
- ・たたら板
- ・ぞうきん
- ・切り糸
- ・弓
- ・手回しろくろ
- ・石こう型
- 水の入ったバケツ

- 木型

みんなで使う道具

- ・ ぞうきん（3 枚）
- ・ 水の入ったバケツ
- ・ 粘土
- ・ きりふき
- ・ 水の入ったボウル
- ・ スポンジ
- ・ はかり
- ・ かたくり粉
- ・ 清流印

自分が使う道具

- ・ のべ棒
- ・ たたら板
- ・ 布
- ・ 木型
- ・ 道具箱 （切り糸、弓、切り針）
- ・ 石こう型
- ・ 印花
- ・ カッター
- ・ 手回しろくろ



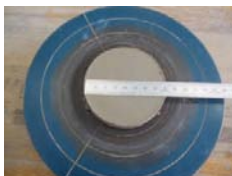


1 学年

石こう型

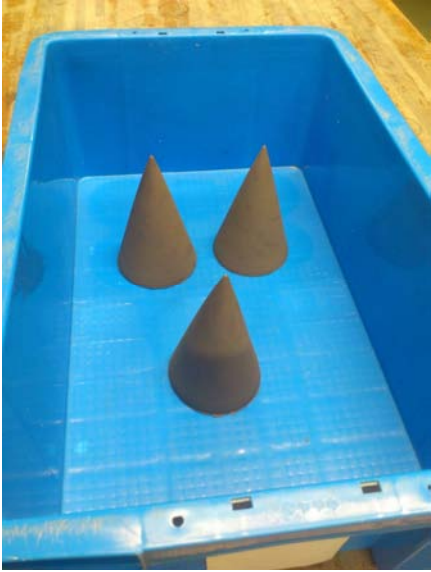
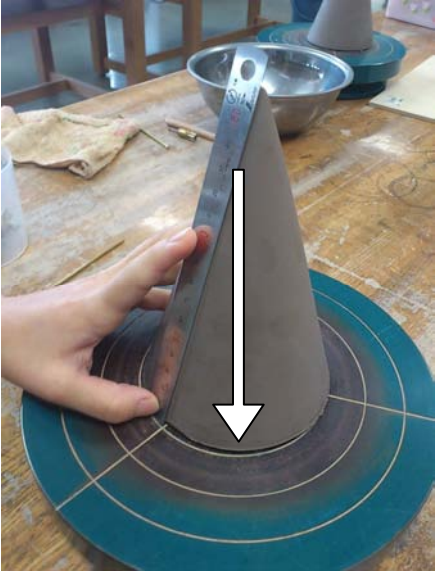
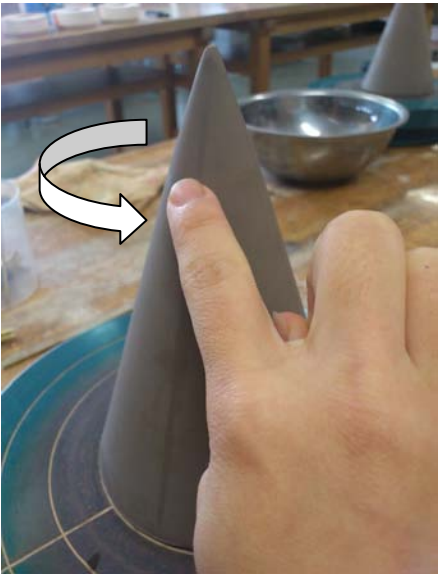
道具箱

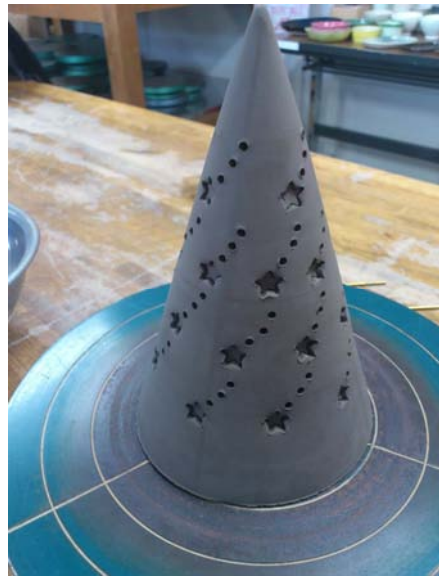


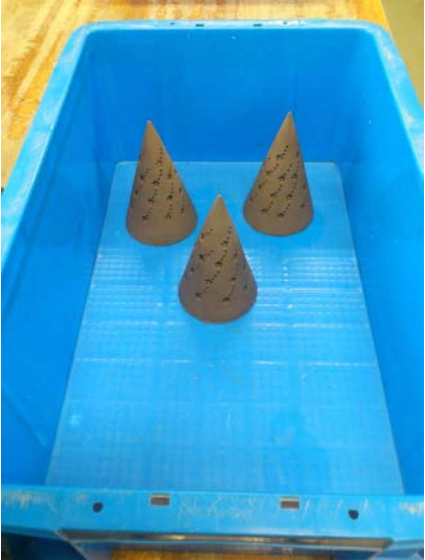
カフェオレカップ	材料	粘土（白土、黒土、赤土）		
	用具	切り糸、針、弓、カッター、柄ごて、つげべら、定規、手回しろくろ、布、たたら板（5mm・7mm）、のべ棒、雑巾、ボール、秤、どべ、トースカン、たたき板、ぼうず、なめし皮、補助具①、補助具②、補助具③		
作業工程	作業内容		作業図	留意点
1. 準備	①必要な用具を準備して作業台に並べる。 ②粘土をバケツから出して乾かないように濡れた雑巾をかぶせる。			
2. 成形 板作り＋ 接合	【底板作り】 ①布を敷き、たたら板2枚を重ねたもの（5mm＋7mm）をのせる。 ②400gの粘土を球形になるようたたきしめながら丸める。空気を抜き、表面がなめらかになるようにする。 ③手のひらでたたら板の厚さ近くになるまで叩き伸ばす。 ④のべ棒で直径8cmの円がとれるように、向きを変えながら丸く伸ばす。 ⑤手回しろくろを回しながら、切り針を使い、直径が8cmになるよう切る。 ⑥側板を接着する部分に針でキズをつける。		  	＊高台を掘るため、底板の厚さは12mmにする。 ＊切り針がぶれないために、反対の手で手首をしっかりと固定し、腰を作業台にくっつける。 針は中心より左側（時計で8時の位置）に刺し、ロクロは時計回りに回転させる。
	【側板作り】 ①布を敷き、たたら板（5mm）をのせる。 ②500gの粘土を直方体に整える。 ③手のひらでたたら板の厚さ近くになるまで叩く。 ④のべ棒でたたら板の厚さになるまで粘土を伸ばす。 ⑤型板に合わせて切る。 ⑥補助具①を粘土の端に合わせる。 ⑦補助具①の端に補助具②を合わせ、補助具①をとる。		  	＊底板8cm用の型板を使用する。  補助具①  補助具②

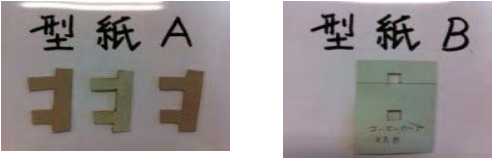
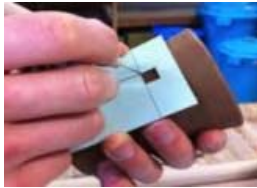
	⑧カッターを補助具②にぴったりと合わせ、左から右へ7割くらい切り、残りは右から左へ切る。 ⑨切り落とした部分に、補助具②を置いたままキズをつける。 ⑩粘土をひっくり返し、反対側も同じように作業する。 ⑪キズをつけた部分にどべを塗り、張り合わせる。その後、つげべらを使用し接合する。内側も同様に行い、しっかり張り合わせる。 ⑫つげべらを使用して接合した部分を、指で整える。	    	*一方向に切ると粘土が引っ張られて変形してしまう。 *ここで接合部がきれいな状態でないと後から修正ができない。
	【接合】 ①底板のキズをつけた部分にどべを塗る。 ②底板に円筒状にした側板をのせ、側板の内側からつげべらを使用して外側に広げるように底板の端へ合わせる。外側からは、広がりすぎないように指で押さえる。 ③つげべらを使用して下から上へ接合する。 ④指を使い、接合した部分をきれいにならす。 ⑤よりを作る。 ⑥リング状にしたよりを中に入れ、柄ごてを使用してつぶす。よりの真ん中から半分を底板へ押すようにつぶす。終わったら、真ん中から半分を側板へ引っ張り上げるようにつぶす。 ⑦柄ごてでつぶした部分をよりきれいにする。	    	*よりの長さ、太さは 8cm の型板に書いてある大きさにする。粘土が乾かないよう、机を雑巾で湿らせながら行う。

	⑧内側はボウズ、外側はたたき板を使用して成形する。ロクロは、ボウズの場合は時計回り、たたき板の場合は反時計回りに回転させる。 ⑨成形し終わったら製品の高さが 10cm になるようにトースカンで印をつけ、針を使用して切り落とす。 ⑩切り落とした縁を 3 本の指（親指、人差し指、中指）で軽く整える。 ⑪ボウズを使用し、内側を広げカップに丸みをつける。 ⑫口縁をなめし皮できれいに整える。	   	*ボウズ、たたき板を持たない方の手で手首をしっかりと固定し体を作業台にくっつける。 *ボウズ、たたき板は回転している時のみ当てて、整える。
	【取っ手付け】 ①板作りをし、定規の太さで切っていく。とってと本体の水分量に差がない方が接合しやすいため、ある程度の硬さまで乾燥させておく。 ②なめし革でめんとりをし、角をとる。 ③とってをつける場所に補助具③を使用し、口の中に針でキズをつける。 ④キズをつけた部分にどべを塗る。 ⑤取っ手をのせ、つげべらや細工べらを使い、接合する。 ⑥なめし皮やスポンジを使用して整える。 ⑦ケースなどに入れ、ゆっくり乾燥させる。	   	*カップは取っ手を接合する前にある程度乾燥させ、高台を彫っておく。 補助具③

ツリー型ランプシェードの型抜き (鈴木 Ver)	材 料	半磁器土泥しょう		
	用 具	型抜きする製品、ポンス、星形の抜き型、雑巾、切り針、手まわしロクロ、定規、ボウル、バット、ビニール		
作業工程	作 業 内 容	作 業 図	留 意 点	
1 準備	・ 鋳込みで製作して石膏型からはずした製品を適度な硬さになるように、乾き具合を調整しながら保存しておく。		柔らかすぎると、穴をあける時に凹みすぎたり、変形してしまい、硬すぎると穴があけられなかったり、ひび割れてしまうので、穴を開ける時にちょうどよい硬さになるように保存状態を調整しておく。底部分の修正は先に終わらせておく。	
2 印つけ	・ 石膏型からはずした鋳込みの製品に均等に模様の型抜きをするために、縦に 4 分割の印をつける。		製品に傷をつけるのではなく、定規をあてて縦に指でなぞる。	
	・ 型抜きの模様の横のラインを均一にするため、最初の位置を決めて指をあてた状態で手まわしロクロを回して横の印をつける。		製品はロクロの上に置いているだけなので、あまり勢いよくロクロを回しすぎると、製品がロクロから落ちてしまうので、縦の印と同様に傷をつけない程度に指をあててロクロを回す。	
	・ 最初の装飾の位置は、縦の印と横の印の交差した場所にする。		ポンスは製品に対して、できるだけ垂直になるようにあてて、ポンスを回しながら穴を開ける。ポンスの穴に粘土が詰まった場合は切り針で掻きだす。	
	・			

3 装飾	・ポンスで 3 つ緩い弧を描くように下方 向に向かって穴を開け、その下に星形の穴 を開ける。 ・2 段目以降の模様は 1 段目の星の下の中 心にくるようにポンスの穴を開けていく。 ・同じ模様を 4 段目まで開けていく。 ・縦に 4 本の模様のラインができれば、 模様と模様の間にさらに模様を追加する が、1 段目は間隔が狭いのでこの場合は 2 段目から模様をつける。 型抜きした粘土はこの時、本体に残った ままになっているが、この時点ではこのま ま保存する。	   	ポンスのラインは全体的に揃っていれば、多少 ラインが直線的になっても問題ない。 ポンスの 3 つの穴の前後左右のバランスを見 ながら穴を開けていく。 4 段目の最後の星の位置が、下になりすぎると 中に入れる LED ランプ本体が見えてしまう。 追加する模様のラインを 1 段目から開けると、 穴と穴の間隔が狭くなり凹み過ぎたり、星の穴 を開けた時にひびが入る可能性がある。
-------------	--	--	--

	・触っても変形しない程度まで乾燥した状態になったら製品についたままになっているバリを取り除く。切り針で押すと簡単に取り除くことができる。	 	針先で製品に傷をつけないように注意する。
4 保存と乾燥	・型抜き装飾が終了後はバットに入れてビニールを被せるなどして調整しながらゆっくり乾燥させる。	 バットにビニールを被せた状態 → 	鋳込みの製品は板づくりなどの製品よりも水分が多いため、急激な乾燥による片乾きをしやすい。鋳込み製品のゆがみのおもな原因は厚みの不足と片乾きによるものが多いので、急激に乾燥しないようにする。 少しずつ、ビニール隙を開けていき、乾燥とともにビニールを外し、乾燥が進んだらバットから出す。

白樺カップ の製作	材 料	信楽上すいひ赤、うすらマット釉薬、金そば釉薬		
	用 具	道具箱（針、ステン尺、コテ、切り糸、弓）、タタラ板、のべ棒、取っ手型紙、カッター、ぞうきん、バケツ、ボウル、なめし革、スポンジ、釉はがし刷毛、ドベ、細工ベラ、布、発泡スチロールケース		
作業工程	作 業 内 容	作 業 図	留 意 点	
1 準備	・道具箱、タタラ板（5mm×2）、のべ棒、取っ手型紙、カッター、ぞうきん、バケツ、ボウル、なめし革、スポンジ、刷毛、ドベ、細工ベラ、布、発泡スチロールケース	    →細工ベラ	・白樺カップ本体の規格 ：直径70mm、高さ100mm ※高さ60mmの部分がくびれている	
2 取っ手の 接合	・10mmの厚さで粘土を伸ばす。 ・伸ばした粘土に型紙 A を乗せ、型紙に沿ってカッターで切断する。 ・切断した取っ手の角を指でつぶす。 ※角柱形から円柱形へ ・円柱形になった取っ手の表面をなめし革で整える。 ・完成した取っ手は、発泡スチロールで保存する。 ※作りたては柔らかいので本体に付けられない。 ・白樺本体に型紙 B を当て、針で型の位置に傷を付ける。（目印程度） ・取っ手と本体がしっかり合うかどうか確認する ・傷は型紙の口の中に傷を付ける。 ※取っ手の形状を考慮し傷を大きくしない。 ・仮止めを行う。 ・傷を付けた目印の上に「どべ」をやや多めに塗る。 ・白樺本体と取っ手を「細工ベラ」を使い接合させる。 ・なめし革等を使い、接合面をなめらかに 整える。	          	・乾かないよう、ぬれぞうきんを敷く。 軟らか過ぎると接合しにくいので注意する。 ※高台を彫った直後くらいが、取っ手を付けるには丁度よい硬さ。 ・本体と取っ手が付けた傷と合うかどうかを確認する。 ・細工ベラは、使いやすい物を選ぶ。 ・取っ手の粘土を本体に持って行く感じで接合し、本体と取っ手にすき間は作らない。 また、取っ手の付け根を細くしすぎない。 ・取っ手は取れやすく、変形しやすいので丁寧に扱う。	

	～素焼き～ ・やすりがけ、水拭き後に撥水剤を塗る。		※素焼き後、取っ手に亀裂が見られた時は、「セラミックペースト」で補強する。 ・やすりは＃２４０を使用する。
4 撥水剤	・撥水剤は、底面から１．５mm程度塗る。		・釉薬がけ前に新聞を敷き詰めるが、作業台の端が分からなくなならないよう端が少し見えるように敷く。 ・違う釉薬が混じらないよう細心の注意を払う。※道具は事前に拭いておく。
5 釉薬がけと修正	・「うずらマット釉」、「金そば釉」、新聞紙、刷毛、スポンジ、ボウル、ぞうきん３枚以上を準備する。 ・うずらマット釉の目安濃度は、釉薬バケツ側面に記載さて手いるので確認する。 ・取っ手を持ち、本体を底部方向から釉薬の中に浸ける。（３秒くらい） ※素焼き後であっても取っ手は取れやすいの扱いに注意を払う。 ・取っ手の付け根の７割程度の高さまで釉薬をかける。 ・一番細い刷毛、新聞紙を準備する。 ・白樺樹皮の模様をイメージし、刷毛で「うずらマット釉」をこすり落としていく。 ・樹皮の模様をイメージし、平行に釉薬をはがすようにする。また、一方向からではなく、両方からはがす。	     	・やや傾け本体底部方向から浸けて行き、底部から出す。 ※コップ内に空気が入ると釉薬がかからないことがある。 ※本体にくびれがあるので、取っ手の付け根まで釉薬をかけてよい。 ・うずらマット釉は、乾きやすくはがれ難い。 かけムラも目立たないのでクレーターやかかり残しのみ修正する。 ※刷毛の選択が一番細いもの ・取っ手の釉薬がけについては、くびれがあるので本体に金そば釉が付かない浸ける高さに配慮する。 ※刷毛づかいは、くっきりとはがすのではなく、かすれる感じではがすと風合いがでる。 ※手回しろくろに乗せて釉薬はがしをしても良い。 ・金そば釉薬の表面のぶつぶつが金色に発色するので修正でつぶさない、落とさない。
	～１日程度乾燥させる～ ・しっかり本体を乾燥させてから取っ手の釉薬がけを行う。 ・本体を持ち、取っ手を釉薬に浸ける。 ・取っ手の付け根部分の釉薬が厚がけ過ぎる場合は修正する。※はがす等 ・完成		

第4章

寄宿舎の研究

(1) 研究主題

『卒業後を見据えた生活の指導』

(2) 研究の目的

今年度より本校の第6次研究であるキャリア教育がはじまり、寄宿舍でも一貫した教育を行うべく教務と連携し行っていく。

研究を進めるためにはキャリア教育の概要を職員一人一人が学び共通認識を図っていく必要があり、今年度は学びの段階と考える。また、「卒業後を見据えた生活の指導」というキーワードで事例研究を進め、学校教育目標である「豊かな心と健やかな体をつくる生徒」「希望に向かって努力する生徒」「自ら判断し行動する生徒」を目指す。

(3) 研究の内容と方法

① キャリア教育の共通理解

校内の全体研修会や校外のキャリア教育研修会への参加を行っていく。また研究推進委員会へは舎監が参加し、後日資料を回覧し理解を図る。さらに参考資料があれば随時回覧を行い、関心を深めていく。

② 事例研究

- ・男子棟を3グループ、女子棟を2グループに分け、各グループより1人の対象生徒を抽出する。生徒の実態、課題、それに対する指導仮説を設定し、事例研究を進めていく。
- ・研究主題は『卒業後を見据えた生活の指導』とし、副題は『生徒の実態に応じた基本的な生活の目標』とする。
- ・研究期間は1年間とする。

《研究計画》6月…事例研究生徒抽出、グループ会議、研究内容決定、全体発表、協議。

研究開始

10月…中間発表、協議

2月…最終発表

(4) 成果と課題

キャリア教育の共通認識については、職員一人一人がしっかりと理解するための時間と研修が充分ではなかったため、今後も共通理解できるような勉強会が必要と考える。

事例研究については、具体的なテーマがあることで共通した方向性で進めることができた。また、アセスメントをしっかりと行った上で研究を進めることにより、統一した指導を行うことができた。

今後はキャリアプランニングマトリックスを用いた指導について学舎で連携を深め、より具体的な指導目標を設定したい。また指導の重点を確認し、個別指導計画や事例研究の取り組みを行っていきたい。

事例報告

『卒業後を見据えた生活の指導』

男子棟Aグループ 和田雅史、島野五樹、伊藤亮

1 事例対象生徒 Aさん

- ・学科学年 産業科 2年
- ・IQ 78 (WISC-Ⅲ、田中ビネー式 平成22年8月判定)
- ・障害名、併せ持つ障害及び疾病…知的障害、心室性期外収縮

2 対象生徒の環境

- (1) 家族構成、及び家庭環境
児童養護施設入寮
- (2) 就学歴
平成20年3月 ○○小学校 卒業
平成23年3月 ○○中学校 卒業
平成24年4月 本校入学

3 対象生徒の実態

- (1) 基本的生活習慣
 - ・身辺処理能力は高く、身の回りのことはほとんど一人で行うことができる。
 - ・掃除や整理整頓は一人で行うが、丁寧さに欠ける様子も見られる。
 - ・身の周りの清潔感については、自分で気づいて整える意識がまだ身についていなく不十分である。
 - ・能力そのものに大きな問題はないが、行うことの意味をあまり理解していない様子が見られる。
- (2) 社会性
 - ・社会経験が不足していると思われる。
 - ・余暇では基本的に一人で過ごすことが多く、自分から他人に関わる様子はほとんど見られない。
 - ・コミュニケーション能力に乏しく、人と関わるのが苦手である。

4 保護者との連携

- (1) 家庭での様子
父親はバスの運転手、母親は知的障害の疑いがある。兄弟は多く、本人は長男である。保護者は子どもの人数が多いため、面倒が見きれないとの理由により、児童養護施設に措置された。
- (2) 保護者（児童養護施設）の意向
本校卒業後は家庭に戻ることはできないため、一般就労を希望している。

5 課題の設定及び指導仮説

- (1) 実態の整理
 - ・身辺処理能力は高く、習得するのも早い方であるが、行うことの意味をあまり深く考えないで流れとして覚えている傾向にある。
 - ・児童養護施設での生活が長いためか社会経験不足の面が見られる。指示されて行動することに慣れているが、自分で考えたり判断して行動することが苦手な様子も見られる。
 - ・趣味を持っているが、余暇の時間に活動する方法は理解が不十分である。
- (2) 課題の設定
以上の実態から下記の課題を設定することにした。
『一般就労に向けた生活の知識や余暇の過ごし方を身につける』
- (3) 指導仮説
能力や理解力は高い方であるが児童養護施設での生活が長いため、家庭で経験できることや知識を身につけることができなかつたと考えられる。また、人との関わりが苦手であり、自分と趣味や話題が共通した人との関わる程度である。本人、保護者ともに一般就労することを目標としているため、今後は社会に出るための一般常識や知識を身につけることが必要である。卒業後の生活に必要な知識の学習を集中的に行うことと、余暇の過ごし方について指導者と一緒に考えながら充実させる方法を探ることで、課題を解決することができると思われる。

6 指導内容及び方法

- (1) 働くために必要な生活習慣を身につける。
 - ・一人で生活する際に最低限行わなければならない身の周りのことや洗濯の仕方など、仕事に影響が出ないように生活する方法を指導する。
- (2) 一人暮らしを行うために必要な知識を身につける。
 - ・一人で生活をする際に必要な基礎知識（衣食住）について、資料を活用しながら指導する。
 - ・給与（収入）と支払い（支出）の関係を学習するため資料を活用しながら指導する。
- (3) 余暇を充実させる方法を知る。
 - ・本人の趣味や興味のあることを基に、休日の過ごし方を充実させる方法を一緒に考えながら指導する。
 - ・生活費の中から趣味にかかるお金を支出する際は、計画的に使用することを指導する。

7 指導経過

- (1) 働くために必要な生活習慣を身につける。

最低限、行わなければならないことについては問題なく行うことができているが、時間を見ながら行動することや効率よく時間を消化しようとする意識が身についていないため、腕時計や部屋の時計を見ながら行動するように指導してきた。しかし、時計を見て時間を確認する意識がなかなか定着しないため、空いている時間を利用して洗濯をするということが身につかず、洗濯物が溜まっても翌日に洗濯することが未だに見られる。社会人には清潔感も必要であることを指導し、入浴日以外にもシャワー浴することと、制汗スプレーを使用するように指導したところ、体を清潔にする意識は少しずつ身についてきている。寝具類の洗濯については職員の言葉かけがないと行わないなど、意識は不十分である。

- (2) 一人暮らしを行うために必要な知識を身につける。

はじめに本人の実態を知るため、アンケート様式のプリントを作成した。最初は就職に対する考え方や意識に関する内容から始まり、仕事や労働時間、賃金に関する知識について、卒業後の生活について、どこまで現時点で知っているかプリントで答えてもらい実態把握を行った。その後、具体的にイメージできるよう実習を行った会社での給料やグループホームを利用した場合の支払額、障害者年金の受給額を自分で調べて答えるという様式のプリントを作成。それを基に給与と支払いの関係や生活をした際に必要となる基礎知識の学習を行っている。また、本人が一番苦手としている部分が衣服の購入や場面ごとの選択についてである。冠婚葬祭時の服装の選び方やマナーなど、基礎知識を学習できる資料を作成し、10月中に重点的に取り組んでいく。

※参考資料 N o 1～N o 4 参照

- (3) 余暇を充実させる。

本人の興味のあることとして、プロ野球やバドミントンがある。本人は卒業後もバドミントンは継続して活動をしていきたいと考えているため、仕事をしながら余暇で活動ができるように地元で活動している団体がないか、または加入の仕方を今後指導していく。また、自転車に乗ることができないため、休日の行動範囲を広げる方法として自転車の運転技術を身につけさせるため練習することを勧めていく。

8 結果及び考察

- (1) 働くために必要な生活習慣を身につける。

経過の時に見られた時計を意識して行動するという課題については、寄宿舍での生活では誰かが声をかけてくれるという環境に甘えてはいけないうことと、卒業後の生活を意識しながら、緊張感を持って行動することが大事であることを指導した。3学期には、洗濯が終了する時間を自分で確認して、声をかけられる前に行動に移す様子が見られた。寝具類の洗濯についても、2週間に1回のペースで洗濯する習慣が身についてきている。
- (2) 一人暮らしを行うために必要な知識を身につける。
 - ・就職のことや賃金関係に関する知識については、指導者側が予想していたよりも理解をしており、正確ではないものの、平均的な回答をすることができていた。卒業後の生活の仕方についても自分の現状を把握していて、どのような形態で生活することになるのか、イメージができていた。支払いの部分では、実際にどのくらい生活費で支払いをするのかを数名の職員に直接聞いて調べることによって具体的に知ることができ、いくら貯蓄をすることができるのかを計算する様子が見られた。

- ・ 本人が苦手としていた衣服の場面ごとの選択については、服のマナーについての基礎学習と何種類かの服の写真を用意して設定した場面ごとに選ばせる方法で学習を行った。服のマナーや取り扱い方については、それなりに知識が身につけていることが分かった。喪服とスーツの違いについては、実際に用意した物を見比べさせてから気づいた点をプリントに記入させ、服のルールについて確認をした。

※参考資料 No 5～No 6 参照

(3) 余暇を充実させる。

2学期の実習先が今金町からa町に変更となったため、将来的にa町で生活を想定することにした。a町の町内を移動するためには自転車が必要になると考え、本人がまだ取得していない自転車技術を身につけるため練習を行った。年齢を重ねてからの練習のため、バランス感覚を身につけることが難しく、技術を取得するのは練習がまだ必要な状態であった。

本生徒は児童養護施設での生活が長いため、家庭で経験できることや社会経験については不足しているのではないかと考え、今回の指導を行ってきた。指導を進めているうちに、就職に関わることや一人暮らしを行うにあたっての知識は最低限、理解している様子が見られ、今まで学校や施設で学習したことによって、ある程度は身につけていることがわかった。しかし、施設や寄宿舍での生活が中心であり、知識はあっても実際に体験する機会はほとんどないため、考えと行動が伴っている様子はあまり見られない。本生徒の実態からも、実際に経験をすることで記憶している知識をより活かすことができ、現場実習や寄宿舍生活の中で、できるだけ成功や失敗の実体験を増やすことが本人の社会経験を拡大させるために効果的であると思われる。

今後でもできるだけ、一人で生活することを想定した生活指導を行っていくことが重要であると考ええる。

A 君がどこまで将来について知っているかアンケート その1

- 1 A 君は就職するのが目標ですが、どうして就職をしたいのですか？
理由を書いてください。
(お金をがいて親を養にさせたいから)
- 2 自分の好きな仕事はなんですか？好きな理由も書いてください。
(休日を休日に働かずに仕事 今までの生活のような生活)
- 3 では、嫌いな仕事はなんですか？嫌いな理由も書いてください。
(手先が不器用な仕事 金銭的な面で苦しい場所)
- 4 就職をした場合、1ヶ月の給料はいくらくらい、もらえるでしょうか？
(約 12万～15万円ほど)
- 5 仕事は1時間働くごとにもらえるお金が決められていますが、いくらでしょうか？
(500円～800円ほど)
- 6 1日、働く時間は何時間くらいになりますか？
(8時間)
- 7 就職をするために今、自分に足りないと思う所を答えて下さい。
(勉強を怠らないう、集中力、忍耐を怠らないう事)

A 君がどこまで将来について知っているかアンケート その2

- 1 A くんが実習をした 1ヶ月の給料はいくらもらえますか？
(12万円ほど)
- 2 就職した場合、対馬くんはどこで暮らすことになるでしょうか？
(7000-20000)
- 3 一人で生活するために、支払いが必要になる物はなんでしょうか？
(家賃 税)
- 4 一人で生活した場合、1ヶ月にいくらお金が必要でしょうか？
(約 5万円)
- 5 グループホームを利用した場合、支払う利用料はいくらでしょうか？
(約 9万円)
- 6 卒業後、やってみたい活動(運動、習い事など)はありますか？
(11ドミントン)
- 7 仕事が休みの日は何をして過ごしますか？
(今は暇にたむ)
- 8 給料をもらったら、お金の使い道を教えてください。(自分なりの考えで良いです。)
(親にいくらお金を振り込む)

ミッション1 A くん卒業後のことを調べよう。

A くんが卒業したあとの生活について、質問して調べましょう。

- 1 での1ヶ月の給料はいくらですか？
(約 10万円)
- 2 グループホームの月々の支払額はいくらですか？
(5万円)
- 3 支払いの内訳を調べて下さい。(光熱費、食費など)
(食費、光熱費、水道料)
- 4 障害者年金は何歳になると支給することができますか？
(20才)
- 5 障害者年金はいくらぐらい支給されますか？
(約 6万円ほど)
- 6 一人暮らしをすることで、住むところを借りたら家賃はいくらぐらいですか？
(約 5万円)
- 7 家賃の他に、お金が必要となる物はなんですか？(最低限、必要とする物)
(衣類、車)

社会人のこと、色々質問してみよう！

社会人になり働く給料をもらえます。お金をもらえても、全て自由に使えるわけではありません。社会の先輩達は、どのようにお金を使っているか質問して教えてもらいましょう。

質問1～先生が社会人1年生のときにもらった給料はいくらですか？

質問をする先生 (① 和田 先生 ② 川村 先生 ③ 77 先生)

- ① 12万円
- ② 18万円
- ③ 18万円

質問2～その時の家賃はいくらですか？

- ① 3万5千円
- ② 2万5千円
- ③ 4万(家)

質問3～もらった給料の中から、支払い以外で主に使っている物はなんですか？

- ① 車の支払い
- ② 交際費(友人)
- ③ 貝子金

《服のマナーについて》

○スーツはどこで購入すれば良いでしょうか？

AO KI 青山

○スーツの値段はいくら位でしょうか？

2万~3万 14

○スーツはどのように保管すれば良いでしょうか？

防虫 木, 木

○スーツはどのように洗えば良いでしょうか？

$$77 - 27 = 50$$

○冠婚葬祭の時、適切な服装はどれでしょう。以下から選んで記入して下さい。

お葬式 (喪 服)

結婚式 (2-7)

職場での飲み会 (私服)

喪服、私服、スーツ

☆実際に喪服とスーツを見比べてみよう！

違うところを書いていこう！

☆私服はどのようなものを着れば良いんだろう？

服のルールについて

・喪服を着るときのきまり

Yシャツは白
 小巾分類は黒
 初物は黒の無地
 初物は白の無地
 初物は黒の無地
 初物は白の無地

・スーツと喪服の違いをまとめてみよう！

7-216 生 地: 光たかか、あたや、ストライプのちり

喪服 黒の無地

・今日、学んだことをまとめよう！

2. 271にある股で着るより袖の股で着る方がよい。
一番大切な事は袖口と股口の縫い目。
股の縫い目は、股の縫い目と股の縫い目。

事例報告

『卒業後を見据えた生活の指導』

男子棟Bグループ 川村洋二、齊藤直美、猪瀬雅法

1 事例対象生徒 Bさん

- ・学科学年 農業科 2年
- ・IQ 71 (WISC-Ⅲ知能診断検査 平成22年8月判定)
- ・障害名、併せ持つ障害及び疾病…知的障害

2 対象生徒の環境

(1) 家族構成、及び家庭環境

母、姉2名、本人の4人家族で長女は結婚して別居である。

(2) 就学歴

平成20年3月 函館市立〇〇小学校 卒業

平成23年3月 函館市立〇〇中学校 卒業

平成23年4月 本校入学

3 対象生徒の実態

(1) 基本的生活習慣

- ・身辺処理については全般的に自分で行うことができる。
- ・自主的に机上やロッカーの整理整頓を行う様子が見られず、定期的な言葉かけや確認が必要である。
- ・遊びを優先してやるべきことを忘れることがある。
- ・先生や実習先の担当者の方に指導された内容を忘れてしまうことがある。

(2) 対人関係

- ・友達とカードゲーム等をして過ごしている。

(3) 社会性

- ・気を遣いすぎて質問やお願いすることができないことがある。

4 保護者との連携

(1) 家庭での様子

- ・母子家庭で、普段は母親が働いており家を留守にすることが多い。
- ・鳥の世話、食器洗い等家事の手伝いをしている。

(2) 保護者の意向

- ・就労形態は一般就労を目指している。
- ・集団生活を通して自立させたい。
- ・自分で考えて行動できるようになってほしい。

5 課題の設定及び指導仮説

(1) 実態の整理

- ・忘れ物が多く、指導されることが多い。
- ・指導の直後は緊張感をもって生活することができるが、自主的に継続することが難しい。

- ・ロッカーの中や机の中の整理整頓を丁寧に行うことが難しい。
- ・必要なもの unnecessaryなものを整理することが難しい。

(2) 課題の設定

以上の実態から下記の課題を設定することにした。

『忘れ物の多い生徒の指導について』

(3) 指導仮説

本生徒は整理整頓など、自分から丁寧に行う意識が薄く、指導者の言葉かけや確認が必要である。また遊びを優先し、やるべきことを忘れてたり適当に終わらせたりしようとするものが多く、忘れ物も多い状態である。

そこで身のまわりを整え、必要な物と unnecessaryな物を理解し日々指導者と一緒に確認を行うことによって、課題を解決していけると考える。

6 指導内容及び方法

(1) 自分で持ち物を確認できる環境を整える。

持ち物チェック表を使用して持ち物を準備し、指導者に確認をするよう指導していく。

(2) 整理整頓する習慣を身につける。

必要なもの unnecessaryなものを伝え、日頃から身のまわりを整えられるよう指導していく。

(3) 日常の様子を記録する。

記録用ノートを作り、その日の様子や傾向、実態等を把握し、今後の指導に生かしていく。

7 指導経過

(1) 自分で持ち物を確認できる環境を整える。

学校へ持って行く物を準備した時に本生徒がチェック表に記入し、必ず指導者に確認してもらうよう指導した。初めは自主的に指導者に確認しに来ることが少なかったが、継続的に言葉かけをすることによって、自分から確認しに来ることができるようになってきた。一人で持ち物を準備したときには忘れ物をしてしまうことが多かったが、指導者と一緒に確認することによって少しずつ減ってきている。

家からの忘れ物については、宿泊研修用のバックを準備し忘れたことや、療育手帳、バスカードなどの貴重品を忘れてくることがあり、チェック表がなくても確認を怠らないよう口頭で指導を行った。

指導者への確認については、遊びを優先して確認に来ないこともあり、その都度、優先順位を伝え、必ず確認にくるよう指導を行っている。

(2) 整理整頓する習慣を身に付ける。

通学用のカバンの中に、ゴミや古いプリント類などの不要品と、ハンドクリームやリップクリームなど普段必要としている小物類が混在している状態だったので、指導者と一緒に整理を行った。一つずつ本生徒に必要なか不要かを確認して、いらぬ物は処分し、小物類は中身がすぐわかるように透明の袋にまとめて入れた。また、机上やロッカー内なども必要な物と不要な物が一緒に置いてあったり、タオルや衣服が分類されずに収納されていることが多く、定期的に指導者と一緒に整理整頓を行っている。何が必要な物であるかということやどのような状態が望ましいかと言うことは理解しているが、依然として、自ら継続して整理整頓を行うことは難しい状態である。

指導者がカバンを確認した時に、衣服やタオルの必要な枚数はそろえているが丁寧にたためていないことがあり、指導者と一緒にたたみ直し指導している。

(3) 日常の様子を記録する。

記録用ノートに日々の様子や指導内容、本生徒の態度などを記入し、実態把握や情報の共有、日々の指導などに生かしている。

8 結果及び考察

(1) 自分で持ち物を確認できる環境を整えるについては、学校へ持って行く物を準備する際に、生徒がチェック表を使用し、指導者と一緒に確認するよう指導してきたことで、持ち物に対する意識が定着し、結果として忘れ物の件数が減った。昨年度10件あった忘れ物を半分に減らすことができた。

(2) 整理整頓する習慣を身に付けるについては、通学用のカバンの中に不要な物と必要な物とが混在している状態だったが、指導者と一緒に整理をしたことや次の日の持ち物を指導者と確認するようにしたことでカバンの中を継続的に整理することができるようになった。特に衣服やタオルについては、丁寧にたたんで入れる事ができるようになった。

(3) 日常の様子を記録するについては、記録用ノートに日々の様子や指導内容を細かく記録してきたことで、指導者間で共通理解のもとに、取り組むことができた。

今回は学校への忘れ物に限定して取り組みを行ってきた。通学用カバンという狭い範囲での持ち物の管理については改善が見られたが、それ以外の部分では持ち物の管理ができておらず、貴重品類の忘れ物などが数件あり、広い範囲での物の管理が課題であることが見えてきた。

今後は、決まった持ち物だけではなく、必要な物とそうでない物とを自分で考えて準備ができるような指導方法を考え、実践していかなければならないと考える。

[illegible][illegible]

事 例 報 告

『卒業後を見据えた生活の指導』

男子棟Cグループ 上山真人、泉波卓也、竹端賢一

1 事例対象生徒 Cさん

- ・学科学年 農業科 1年
- ・IQ 55 (田中ビネー式 平成22年10月判定)
- ・障害名、併せ持つ障害及び疾病…知的障害

2 対象生徒の環境

(1) 家族構成、及び家庭環境

両親と2人の姉の5人家族である。両親と祖母は同居しているが、姉は2人とも函館市内に住んでおり別居している。

(2) 就学歴

平成21年3月 函館市立〇〇小学校 卒業
平成24年3月 函館市立〇〇中学校 卒業
平成24年4月 本校入学

3 対象生徒の実態

(1) 基本的生活習慣

- ・起床時間が遅く、職員の言葉かけが必要である。
- ・洗面時、石けんの流し残しがある。
- ・ロッカー内の整理整頓が丁寧さに欠ける。
- ・遊びを優先し、職員の指摘されたことについて、すぐに行動することが難しい。

(2) 社会性

- ・温厚な性格で、誰とでも仲良く接することができる。
- ・時と場にあった敬語を使うことが難しい。
- ・人との適切な距離を持ち、他者と接することが難しい。

4 保護者との連携

(1) 家庭での様子

- ・家庭では、両親が共働きをしているため、テレビやビデオを見て一人で過ごすことが多い。
- ・自分の身の回りのことを自主的に行うことは少ない。

（２）保護者の意向

- ・卒業後は自宅からでなく、グループホームやケアホームから職場に通わせたいと考えている。
- ・身辺面の自立を優先的に人との適切な関わり方を学んでほしいと考えている。

5 課題の設定及び指導仮説

（１）実態の整理

- ・本生徒は今まで自分中心の生活を送ってきており、身の回りのことを自分で行うことや集団生活の経験が少なく、遊びを優先し、すべきことを行わないことが多い。指導者が指摘をしてもすぐに行動に移せないことがある。
- ・家庭で、好きなときに好きなことをする生活を送ってきたため、集団生活の中で日課に沿った行動が難しい。特に、朝の起床は目覚ましが鳴っても起きられないことが多い。また、就寝前に洗面や歯磨きを行う習慣が今までないため、指導者の確認が必要である。
- ・身辺処理全般が丁寧さに欠けるため、ロッカー内が整頓されていなかったり、洗濯物をため込んだりしていることが多く、定期的に指導者が確認する必要がある。

（２）課題の設定

以上の実態から下記の課題を設定することにした。

『身辺的自立の向上を図る』

（３）指導仮説

本生徒は、今まで身の回りのことを保護者にやってもらっていたこともあり、自ら進んで身辺処理に取り組むことが少ない。そのため、初めて取り組むことについては、指導者の言葉かけが必要であり、何事にも丁寧さが欠けている状況である。

一つ一つ丁寧に指導し、目で見て達成できたことがわかるように示していくことで、身辺処理能力を獲得していくことができると考えられる。

6 指導内容及び方法

（１）目覚ましを使って決まった時間に起床する。

- ・ベッドの上で目覚まし時計が鳴ると、止めてからまた寝てしまうため、指導者で時間を合わせて机の上に目覚まし時計をセットし、自分で止めるようにする。
- ・自分で目覚ましをセットできるよう、合わせ方の指導をしていく。
- ・毎日、起床時間と目覚まし時計を自分で止めたか、記入用紙を用意し、自分でつけさせて指導者で確認し、指導していく。

（２）ロッカー内の整理整頓を行う。

- ・ロッカーのどこに、何を片付けるか写真を用意し、その通りに片付けるよう指導していく。丁寧に片付けができるようになれば、写真をはずして文字だけで片付けを行うよう指導していく。
- ・ロッカーの衣紋掛け下の空きスペースに、着たものや取り込んだものを詰め込むことが多いため、脱いだ衣類は洗濯袋に入れるよう指導していく。
- ・定期的に指導者でロッカーを点検し、丁寧に整頓されていないときには適切な片付け方を指導し、

整頓させる。

(3) 寄宿舎の日課に沿って行動する。

- ・日課の理解はできているが、すべきことを後回しにすることが多いので、下校後、夕食後、就寝前など、場面を区切って提示し、できているか自分でチェックするようにする。
- ・指導者から指摘があれば、すぐに行動するよう指導していく。

7 指導経過

(1) 最初のうちは指導者で目覚ましをセットしていたが、現在は就寝前に本生徒と確認しながら時間を合わせている。依然として、自ら時間をセットすることは難しいが、指導者が付いて教えるとセットすることができる。起床時間に関しては、まず7時までに起きるという目標を立てて指導している。記入用紙を使って指導を始めた6月は、7時を過ぎても起きない、指導者や周りの生徒に起こしてもらわなければ起きないことが続いていたが、7月に入ってからには楽しいこと（野外活動部のキャンプ）が目の前にあると意識して起床することができるようになってきている。夏休み中の起床について、家庭でも規則正しく生活するよう保護者に依頼をしてきた。しかし、夏休み中は7時までに起きるという約束の時間に起床することはなく、不規則な生活を送っていた。そのため、休み明けには日課に沿った起床は難しく、起床時間にばらつきがあり定着はしていない。また、目覚ましをセットしない日や自分で止めない日があったり、記入用紙に時間と目覚ましを止めたかを記入するのを忘れていることもある。※別紙①参照

(2) ロッカーの衣紋掛け下の空きスペースに衣類を入れることはなくなった。ロッカー内の整頓に関しては、指導者が確認すると写真と違うところに片付けていたり、脱いだ衣類をロッカーに入れていたりすることがある。洗濯を行った次の日が特に整頓されていないことが多いので、衣類を取り込む時に指導者が確認することを伝え、丁寧に行うよう指導している。衣類のたたみ方については今後、丁寧にたためるように型を用意し、指導していく。

(3) 場面ごとに行うことを提示したものを本人に渡し、提示している。自分で取り組んだことについては項目ごとにチェックするよう伝えているが、依然として遊びを優先にすることが多く、指導者に声をかけられてから行っている状況である。取り組んだこともチェックするのを忘れていたり、指導者が確認すると着替えた衣類などをカバンに入れっぱなしにしていることが多い。指導者が声をかけなくても自ら取り組めるよう継続して指導をしていく。※別紙②・③参照

8 結果及び考察

(1) 目覚まし時計の時間を自分で合わせることができるようになったが、就寝前にセットをするのを忘れてしまい、鳴らないことが依然としてある。それでも、習慣として時間になったら自分で起きる様子も見られる。前期は7時を目途に指導を続けてきた結果、起床できるようになったため、後期は6時50分を目途に起床するよう指導してきた。チェック表も1ヶ月ごとに記録用紙を変更し、何日間続けることができるか指導してきた。長期休み中には時間を決めて規則正しい起床を心がけるよう家庭へ協力を依頼してきた。1ヶ月に1度7時頃に起床することがあるが、ほぼ時間通りに起床することができるようになってきている。今後も継続して指導をしていく。

- (2) ロッカー内は入学当初に比べると丁寧に整頓されている。しかし、ロッカーの引き出しに写真と違うものを片付けていることがある。そのため、引き出しが閉まらなくなっていることがある。また、脱いだ衣類を洗濯袋に入れないことは依然として見られる。指導者が注意をしてやり直しをさせると丁寧に行うことができるが、指導者がいないときは手を抜いてしまう傾向がある。ただし、同室の上級生に注意されると整頓することから、ロッカー内を整頓しようとする意識は芽生えつつあると感じている。今後も継続した指導が必要である。
- (3) 下校後、夕食後、就寝前にすべきことは理解しているが、行動が伴わないことが多い。依然として遊びを優先してしまい、指導者に声を掛けられなければ行わないことが多い。チェック用紙も忘れていたり、適当に付けていることがあり、指導している。それでも、忘れ物が多いことを指摘すると、少し自分で意識するようになり、下校後に進んで次の日の準備をするようになってきている。

今回の事例研究を通して、入学当初より身辺処理能力は向上されているが、依然として不十分な点が多い。指導に関しては、できることが増えてきていることもあり、意識して取り組むこともできるようになってきている。自ら進んで取り組む姿勢は依然として見られないが、今後も指導を継続することで定着することができると考える。現在できている点においては、徐々に言葉かけを減らしていき、自主的に取り組めるよう指導が必要である。

目で見て達成の度合いがわかるチェック表を活用したことは、本人も理解しやすく有効だったと考える。ただ、取り組みに対して消極的な本生徒に2つのチェック表は負担が大きく、適当に付けてしまうこともあった。今後の指導においては、内容を精査して有効に使えるときのみ用意していくことが必要だと感じた。

おしやうじかん ひょう
起床時間チェック表

日付	起きた時間	自分で目覚ましを止めた
6/11	7:15分△	はい・いいえ
6/12	7:15分△	はい・いいえ
6/13	6:49分△	はい・いいえ
6/14	7:1分△	はい・いいえ
6/15	6:46分△	はい・いいえ

6/18	7:1分△	はい・いいえ
6/19	7:5分△	はい・いいえ
6/20	7:10	はい・いいえ
6/21	7:00分△	はい・いいえ
6/22	6:45分△	はい・いいえ

6/25	7:3分△	はい・いいえ セットせず
6/26	6:56分	はい・いいえ
6/27	6:50分	はい・いいえ
6/28	7:2分	はい・いいえ
6/29	6:56分△	はい・いいえ

起床時間チェック表

日付	起きた時間	目覚ましを自分で止めた
12月1日		
12月2日		
12月3日	6:55	はい・いいえ
12月4日	6:45	はい・いいえ
12月5日	6:50	はい・いいえ
12月6日	6:55	はい・いいえ
12月7日	7:5	はい・いいえ
12月8日		
12月9日		
12月10日	6:50	はい・いいえ
12月11日	6:55	はい・いいえ
12月12日	6:55	はい・いいえ
12月13日	6:55	はい・いいえ
12月14日	6:55	はい・いいえ
12月15日		
12月16日		
12月17日	6:55	はい・いいえ
12月18日	6:55	はい・いいえ
12月19日	6:55	はい・いいえ
12月20日	6:55	はい・いいえ
12月21日	6:45	はい・いいえ
12月22日		
12月23日		
12月24日		
12月25日		
12月26日		
12月27日		
12月28日		
12月29日		
12月30日		
12月31日		

げこうこ
◎下校後

・次の日の学校の準備

- ・ジャージ上、ジャージ下
- ・体操服、体操ズボン、体操帽子、体操ベルト
- ・Tシャツ×2
- ・タオル×2

※ 特別日曜があるときはこのほかにも準備するものがあるので確認してください。

・お風呂の準備 (月、水、金)

- ・シャンプー、ボディソープなど
- ・フレックサー (体拭きするもの)
- ・フェイスタオル、バスタオル
- ・パジャマ、パンツ

・洗濯に名前を貼る (洗濯をするとき)

きうしきこ
◎夕食後

・洗濯をする (下校後に終わっていない場合は)

ね まえ
◎寝る前 (2040 までにすること)

- ・布団を敷く
- ・歯磨きをする
- ・顔洗う (火、水、土、日)

ひょうにのぞいてすべきこと

7月1日(日)

項目	チェック
・次の日の学校の準備	×
・お風呂の準備	×
・洗濯に名前を貼る	✓
・洗濯をする	✓
・布団を敷く	✓
・寝る前に歯磨きをする	✓
・寝る前に顔を洗う	✓

事 例 報 告

『卒業後を見据えた生活の指導』

女子棟Dグループ 藤田美華、大場さおり、生内 希

1 事例対象生徒 Dさん

- ・学科学年 生活家庭科 1年
- ・IQ 65
- ・障害名、併せ持つ障害及び疾病…知的障害

2 対象生徒の環境

(1) 家族構成、及び家庭環境

父、母、兄

(2) 就学歴

平成21年3月 函館市立〇〇小学校 卒業

平成24年3月 函館市立〇〇中学校 卒業

平成24年4月 本校入学

3 対象生徒の実態

(1) 基本的生活習慣

- ・身辺処理について全般的に自分で行うことができる。
- ・野菜やマヨネーズで和えたものが苦手で食べ終わるまでに時間がかかり、苦手なものを口にたくさん含んだまま汁物や水で流し込んで食べることがある。
- ・自由時間は一人で過ごすことが多く、ポータブルゲームや、音楽を聴いて楽しんでいる。

(2) 社会性

- ・気が散りやすくコミュニケーションが一方的で相互的になりにくい。興味が持てないことには集中しにくい、自分の好きなことに関しての集中力は高い。
- ・注意喚起に対して、納得ができないことには顔を近づけてきて大きい声を出すことや、壁をたたく等の行動をとることがある。
- ・人とのかかわりにおいて相手の顔を見て話しをすることが難しい。相手の態度や気持ち、場の空気を察することができない。時間を意識することが難しく、マイペースに時間を使ってしまう。
- ・自分にとって不快と思われる音に対して、その場から離れトイレ等に閉じこもることがある。
- ・中学生の頃から吹奏楽部に所属しており音感が良い。
- ・中学生の時からバスを利用しており、公共の交通機関を利用することに慣れている。

4 保護者との連携

(1) 家庭での様子

- ・父は運送会社のドライバーで、本州や市街に配達に行くときには家を空けることがある。
- ・母は教育熱心で、本生徒に対しての要求が高い。小中学校は普通学級に通っており、保護者も本生徒も障害への受容ができていない部分がある。
- ・家族関係は良好で、休日は家族で出かけることも多い。

(2) 将来の方向性

- ・福祉的就労で、家から通勤するかグループホームの利用を希望している。

5 課題の設定及び指導仮説

(1) 実態の整理

- ・日課など理解しつつあるが、時間を意識していないため自分のやりたいことがやめられず、日課に沿って行動できないときがある。

- ・注意されたことや、自分の納得がいけないことに対して大きな声を出したり、大げさな行動をとることがある。

(2) 課題の設定

以上の実態から下記の課題を設定することにした。
『時間を意識して、落ち着いて行動することができる』

(3) 指導仮説

本生徒は、集中が困難であったり不注意な行動が多く、こだわりが強い。ルールに従うこと、日課に沿って行動をすることが難しい。自由時間などに自分の好きなゲームや音楽を聴くことに夢中になり日課に遅れることがある。

また集団生活の経験がなく、決まりや日課を守ることが難しい。集団生活を送る中で決まりを守る意識や日課に沿って行動することを身につけさせることにより、就労や卒業後の自立した生活ができるようになることを考える。

6 指導内容及び方法

(1) 日課がわかり遅れずに行動する。

- ・日課がわかりやすいように日課表を自分の机に掲示させ、その都度確認するように働きかける。
- ・一週間の予定がわかるように日課表を作成し掲示する。段階を追って指導し、全体の行事、棟指導などの日課の流れがわかるようになったら1ヶ月の予定表へと移行する。
- ・日課の5分前に行動することを意識づけしていく。
- ・その都度言葉をかけて、時計を見ることを定着させる。
- ・言葉をかけなくても遅れずに行動できたときには称賛し、本人の励みになるよう指導する。

(2) 落ち着いて行動することができる。

- ・周りを意識して行動するように言葉をかけ、大きな声を出すことは周りの迷惑であると知らせる。
- ・大きな声や大げさな行動をしたときには、話し合いにならないことを知らせ、落ち着くまで静かな環境で過ごすように促す。
- ・落ち着いてから話をして、何がいけなかったかをわかりやすく知らせる。
- ・集団生活において人との関わりを意識させ、周囲の人が感じる快、不快を知らせる。
- ・日課に応じて必要な物を準備し、忘れ物がないように気を付けさせる。

7 指導経過

(1) 日課がわかり遅れずに行動する。

- ・週の日課表を作成し、机に掲示をした(別紙参照①)ことで、週の予定や日課の時間を事前にわかり行動することができるようになってきている。
- ・週の日課表は理解することができつつあるため、1ヶ月の予定表へ移行していく。(別紙参照②)
- ・常に時間を意識して行動するまでには至っていないが、5分前に声をかけ行動を促すことで、棟指導や、入浴等に遅れないで行動することが増えてきている。
- ・自分のやりたいことを優先するため、すべきことを早めに済ませて自分の自由時間を作ろうとするときもあれば、自分のやりたいことがやめられず時間に遅れてしまうことも多い。しかし、自ら時計を見て行動することも多くなってきており、食事以外の場面では時間に間に合うよう行動できる場面が増えてきた。
- ・日課の5分前に行動することができたときには、称賛することが本人の励みになっており日課を意識して行動することが増えてきている。

(2) 落ち着いて行動することができる。

- ・大きな声を出している時には、落ち着かせ、周りを見て、周囲の人からどう思われているかを考えるよう言葉をかけたり、一般社会の中で、自分が出かけた際、公共の場などでこのような行動が適切かどうか

かを客観的に考えさせることで、一般社会においては不適切であることを知らせてきた。

- ・指導者や他生徒からの言葉がけに納得ができないときには、大きい声や大げさな行動を取ることがあるが、部屋など静かな環境で落ち着くように言葉をかけ、落ち着いてから話をすると、自分の行動を振り返り謝罪をすることができるようになってきている。
- ・集団生活の中で、自ら周囲の人を意識する様子は少ないが、他生徒から注意を受けたり、指導者から言葉をかけられることで周囲の人の快、不快についても少しずつではあるが意識しつつある。
- ・机の前に自分自身で「大きな声を出さない」等の寄宿舍での決まりごとを書いて掲示し意識をするように心がけることで、年度当初に比べ大きい声や大げさな行動は少なくなっている。
- ・学校での必要な物の準備をすることについては、毎日指導者が確認をしてきたが、指導者が確認をしなくても、自分で用意をすることが定着しつつあり忘れ物をすることは少なくなっている。

8 結果及び考察

(1) 日課がわかり遅れずに行動する。

日課表を作成し、机に掲示することで日課表を見て確認しながら行動することができるようになり

日課を理解し、時間を意識して行動することができるようになってきた。日課表を徐々に週の予定表から、月ごとの予定表に変えてきたが、食事の時間だけは時間内に終わることが難しいことが多く見られた。そのため食事時間において終了時間の目安を決め、月ごとの日課表にチェック項目を書き加えた（別紙参照③）。「7日間〇がつづいたら、アイスクリームを食べに行こうね」という目標を設定すると、目標達成に向けて励みになり努力することができた。

しかし目標を達成したいがために、嫌いなものを口に詰め込んで水で流し込んだり、嫌いな物を残そうとしたり、マナー面での不適切な行動も増えてきている。食事面の時間の遅れ以外は日課に沿って行動することができており、指導者による言葉かけも少なくなっている。

(2) 落ち着いて行動することができる。

高校生であることの自覚を持たせ、大きい声を出すことや、大げさな行動をとることはふさわしくないことを知らせてきたことで、少しずつ大きい声を出すことは減ってきている。自分の気に入らないことがあったときは大きい声を出すことや、大げさな行動をすることがあっても、指導者の言葉かけで気持ちを切り替えることができるようになってきている。また、上記の日課表に大きい声を出していないか、決まりを守れているかのチェック項目を書き加えた。それによって意欲も芽生え落ち着いて行動できるようになってきている。

入学当初から、日課に沿った行動をとることが難しく、落ち着いて行動することが難しかったため、先述した指導内容に沿って指導を行い、改善を図ってきた。指導を進めていく中で、日課やきまりを意識しながら行動することが難しく、当初は自分の思い通りにならないことには大きい声を出したり、大げさな行動をとることがあった。しかし、集団生活を通して、少しずつ日課は理解してきており、マイペースで行動が遅れがちであったが、毎日の言葉かけや、できたときの称賛などが励みになり、日課表に沿って行動することで、自ら行動することができるようになってきている。

寄宿舍生活を送る中で、卒業後も社会においてふさわしい行動をとれることや適切な人間関係を築くことは、本生徒にとって卒業後の生活を見据えた指導の手がかりになったと考える。

今週の予定表(今週は配ぜん当番です)

	時間	9/30(日)	10/1(月)	10/2(火)	10/3(水)	10/4(木)	10/5(金)
下校時間		帰舎日	15:10	15:10	15:45	15:15	13:40
		せたな号で帰舎したら、早く着替えて食事の放送がかかるのを待ち、夕食は早く終わらせましょう。	洗濯				帰省の準備をして 14:40に食堂に 集まる。
掃 除	17:00～		16:55に準備を始めましょう。17:30 配ぜん当番を忘れずに。				
夕 食	17:50～		18:20を目安に食べ終えて下膳をします				
自由時間・入浴	18:30～		汗をかいたらシャワー浴をしましょう	入 浴(1 階優先)	汗をかいたらシャワー浴をしましょう	入浴(2階優先)	
月に2回棟指導の時間があります							
	20:00～	20:00 までに洗面をする					
就寝時間	21:00～ 21:25						
消灯・就寝	21:30						
起床・洗面	6:45	洗面後、洗濯物を取り込んでたたみ、片付けます					
配ぜん	7:30						
朝食	7:45	7:40～8:10を目安に食べ終え下膳をします					
登校	8:35	歯磨き後、着替えて朝点検(月、木)をうけて準備をしてください					

時間内に食べ終われるか表 10月

	日	月	火	水	木	金
行事		1	2	3	4	5
朝食						○
夕食					○	
行事	7	8	9	10 棟指導 7時	11	12
朝食				○	○	○
夕食			○	○	○	
行事	14	15	16 スポレク事前説明 下校後	17 スポーッレク4時～ 棟指導7時	18	19
朝食		○	○	○	○	○
夕食	○	○	○	×	○	
行事	21	22 健康教室 15:20～	23	24	25	26 ○
朝食		○	○	×	○ 完食♡	
夕食	○	△	×	×	○	
行事	28	29	30	31		
朝食		○	○	○		
夕食	○	○	○	○		

朝食は8:15 夕食は6:16までに食べ終わったら先生に○を書いてもらって下さい。

・○が1週間続いたら、ソフトクリームを食べに行きましょうね。

12月 時間と生活のチェック表

- ・食事が時間内に食べ終われたら女子1階の先生に○をつけてもらいましょう
朝食は8:15 夕食は6:20までに食べ終わらしましょう。
- ・生活全般の時間ときまりをまもり生活しましょう。大きい声をだしていませんか？
- ・「生活のきまり」と「大きい声」は一日の終わりに確認してもらいましょう。

○が7日続いたら、おやつを買いに行きましょうね。

日	曜日	行 事	朝 食	夕 食	きまり	大きい声
1	土					
2	日					
3	月					
4	火			○	○	○
5	水		○	△		
6	木					
7	金					
8	土					
9	日					
10	月	女子棟大掃除		△	○	○
11	火		×	△	○	○
12	水	クリスマス会16:20～	×	○		
13	木			×		
14	金		○			
15	土					
16	日					
17	月	棟指導 7時～		○	○	○
18	火					
19	水	全体指導・女子お楽しみ会				
20	木			×	○	○
21	金	終業式				
22	土	冬休み				
23	日					
24	月					
25	火					
26	水					
27	木					
28	金					
29	土					
30	日					
31	月					

終了時間 12:30

事 例 報 告

『卒業後を見据えた生活の指導』

女子棟 E グループ 松尾晴奈、山本絵理、清野恵美

1 事例対象生徒 Eさん

- ・学科学年 生活家庭科 2年
- ・IQ 55 (田中ビネー式 平成21年5月判定)
- ・障害名、併せ持つ障害及び疾病…知的障害、ヌーナン症候群

2 対象生徒の環境

(1) 家族構成、及び家庭環境

父、母、兄の4人家族

(2) 就学歴

平成20年3月 北斗市立〇〇小学校 卒業

平成23年3月 北斗市立〇〇中学校 卒業

平成24年4月 本校入学

3 対象生徒の実態

(1) 基本的な生活習慣

- ・身辺処理はおおむね自分で行うことができるが、注意力が散漫なため、時間がかかったり、間違えがあるため、言葉かけと確認が必要である。
- ・下校後に行う日課はおおむね理解しているが、優先順位を付けることが難しく時間を有効に使えていないことがある。
- ・時間の余裕がなくなると、やるべきことの順番や手順がわからなくなり焦るため、指導者の言葉かけを必要とすることがある。
- ・二槽式洗濯機を好んで使っているが、本生徒は洗濯機が回っているのを見ているのが好きでその場にいるため、時間がかかることがある。
- ・日記を書いている途中で、雑誌を読んでいたりと、他のことを考えていることがあり、時間がかかることがある。
- ・忘れ物をすることがある。
- ・衛生面や身だしなみを意識することが難しい。

(2) 社会性

- ・決まりを守ろうとする気持ちが強く、素直である。
- ・周りの生徒と関わりたい気持ちはあるが、場面に合わないことを話したり一方的な関わりになることがある。
- ・相手が話していても割り込んで話すことがあり、注意を受けることがある。
- ・余暇は机に向かい読書、書き物、音楽を聴き一人で過ごしていることが多い。

4 保護者との連携

(1) 家庭での様子

- ・家庭は母親の料理の手伝いや、本を読んだり、テレビを見て過ごす。
- ・週末は地元の放課後クラブを利用している。放課後クラブでは小さい子の面倒を見たり、簡単な調理を行っている。

(2) 保護者の意向

- ・寄宿舎の生活の決まりを守って集団生活の中で成長してほしい。
- ・卒業後は放課後クラブの系列が新たに設立する施設に就労し、自宅から通うことを希望している。

5 課題の設定及び指導仮説

(1) 実態の整理

- ・ 身辺処理はおおむね自分で行うことができるが、注意力が散漫なため、時間がかかったり、間違えがあるため、言葉かけと確認が必要である。
- ・ 下校後に行う日課はおおむね理解しているが、優先順位を付けることが難しく時間を有効に使えていないことがある。
- ・ 時間の余裕がなくなると、やるべきことの順番や手順がわからなくなり焦るため、指導者の言葉かけを必要とすることがある。
- ・ 日記を書いている途中で、雑誌を読んでいたりと、他のことを考えていることがあり、時間がかかることがある。
- ・ 二槽式洗濯機を好んで使っているが、本生徒は洗濯機が回っているのを見ているのが好きでその場にいるため、時間がかかることがある。

(2) 課題の設定

以上の実態から下記の課題を設定することにした。

『時間を有効に使うことができる』

(3) 指導仮説

本生徒は下校後の日課は理解しているが、時間に追われながら生活をしている。要因としては時間を有効に使うための優先順位の判断が難しいこと、また、注意力が散漫なため、一つ一つの行動に時間がかかっていることが考えられる。特に、日課の中で多くの時間を費やしているものは日記と二槽式での洗濯である。日記は集中力が続かず遊びながら行っていることがある。二槽式での洗濯はすべての工程が終わるまで洗濯機の前にいるので他のことができない状態である。効率よく時間を使うための日課を組み立てることや、目標時間を設定できる日課は、制限時間を決めて集中して行うことで、時間に追われることなく、有効的に時間を使うことができるのではないかと考えた。

6 指導内容及び方法

(1) 毎日、下校後その日のやるべきことの順番を確認する。

- ・ 就寝までに行う項目の書かれた札を使って、指導者と一緒にその日のスケジュールの組み立てを行う。
- ・ 時間を有効に使う方法を教える。(例：洗濯をしている間に入浴の準備を行うなど)
- ・ 指導者とのスケジュールの組み立てができるようになったら本生徒が一人で行い、指導者が確認する。

(2) 時間のかかっている日課を克服する。

- ・ 時間の目標を決めて、タイマーを使い時間内に集中して終わらせるよう指導していく。
- ・ 担任に協力を依頼し、本生徒が書きやすい質問形式の日記にしてもらう。短い時間で書けるようになってきたら、通常の日記の形式にする。
- ・ 二槽式洗濯機の使用を一旦中止し、他の日課を確実に短い時間で行えるようになってきたら、使用できる日を設定する。

(3) 日課を終えてから余暇に入る。

- ・ 日課を終えたら指導者に報告し、一緒に確認を行う。
- ・ 時間に間に合わなかった場合は、その日の行動を振り返り、次回に生かしていくよう指導を行う。

7 指導経過

(1) 毎日、下校後その日のやるべきことの順番を確認する。

- ・ 下校後に行う日課が書かれたマグネットをホワイトボードに貼り付け、指導者と一緒にスケジュールの組み立てを行った。スケジュールの組み立てが難しく、初めは指導者と一緒に行った。その日の他の予定や洗濯機の混み具合などから、洗濯を行っている間に学校の準備をするなどの、効率良く日課をこなせるようなスケジュールの組み立て方や、有効な時間の使い方を、指導者と話し合う中で考えさせた。現在は一人でスケジュールの組み立てを行えるようになり、指導者に確認をしてもらってから日課を行っている。本人もホワイトボードを見ながら一つ一つ整理しながら日課を行うことによって、混乱することなく、スムーズに日課を行えるようになってきた。徐々にではあるが、時間を有効

的に使えるようになってきた。

(2) 時間のかかっている日課を克服する。

- ・洗濯物を干している途中で、周りの声が気になって手を止めたり、友達と話しながら行っていることが多く、時間がかかってしまうことがあった。洗濯物干しを始める前に、終了の目標時刻を決め、腕時計を見ながら時間を意識して行うよう指導した。時間を確認しながら手際よく終わらせられるようになってきている。
- ・日記を書いている途中で雑誌を見ていたり、ねりけしで遊んでいることがあった。その都度集中して行うよう言葉かけをすることで、以前より集中して短時間で書き終えることができるようになってきている。
- ・二槽式洗濯機の使用は一旦中止した。忘れ物をしないことや、起床時間に自ら起きること、決められた時間内に洗濯物干しを終えることなどを条件にし、守れた際には二槽式の使用を日付を決めて許可した。条件を満たし、二槽式の使用を許可しても、二槽式での洗濯が本生徒の楽しみの一つになっているため、そちらばかりに意識がいつてしまい、本来やるべき日課がおろそかになることがあった。今後は二槽式を使える曜日、時間、その他日課を終えていることなどの条件を明確にし、提示していく必要がある。

(3) 日課を終えてから余暇に入る。

- ・日課を終えたことを指導者に伝えてから余暇に入るよう指導を行ってきた。しっかり報告できることもあったが、報告せずに余暇に入っていることもあり、指導者から確認することがあった。
- ・時間がかかってしまった場合、具体的に改善する点や時間を有効に使う方法を指導してきた。本生徒も真剣に話を聞いている姿勢はあったが、話を理解し、次からの行動に生かすことは難しかった。今後は本生徒が理解しやすい説明をし、繰り返し指導していく必要がある。

8 結果及び考察

(1) 下校後に行う日課が書かれたマグネットをホワイトボードに貼り付け、確認をしながら一つ一つの日課を確実にを行うよう指導を行ってきた。始めた当初は、何を優先的に行えばよいか理解することが難しかったが、指導者と一緒に相談しながら日課の組み立てを繰り返し行うことによって、時間の配分を考えながら、時間を有効に使うことができるようになった。

(2) 洗濯物干し、日記を書く、二槽式洗濯機の使用の3つに重点を置いて指導を行ってきた。

- ・他生徒が乾燥室にいるときに話に夢中になり、時間がかかることがあった。時間がかかっているときは『〇〇分までに終わらせてね。』など終了時間の目標を言葉かけしてきた。時間内に終わらせることができたときは褒めて達成感を持たせるような指導を行ってきた。また、時間内に終わらせることが難しかったときには、次回はどんなことに気を付けながら行えば良いか、言葉かけを行ってきた。現在言葉かけは少なくなったが、始めた当初に比べ、早く洗濯物干しを終えることができるようになった。
- ・周りにねりけしや雑誌などといった本生徒が好んで遊んだり読んだりするものが目の入る場所にあり、そちらの方が気になり、時間がかかっていたと考えられる。日記に集中できるようにねりけしや雑誌を日記が終わるまで机の引き出しの中にしまい、環境を整えることによって、日記を早く書き終えるようになった。
- ・二槽式洗濯機の使用は時間がかかってしまうため、一旦中止した。二槽式洗濯機を使うことが本生徒の楽しみになっているため、二槽式チャレンジカード(※1)と言う確認表を用いて指導を行ってきた。書かれた項目は6時40分に起きる、朝食までに洗濯物をたたみ終える、忘れ物をしないの3つであり、月曜日から金曜日まで、毎日丸を付けて、10個以上で翌週の月曜日から火曜日に二槽式洗濯機を使用できるという券(※2)の発行をしてきた。条件を満たすことが難しく、券が発行される日は少なかった。しかし、特に落ち込むことはなく『また頑張ります。』と前向きであった。二槽式洗濯機を使ったのは数えるほどであったが、二槽式洗濯機を使うために日々の生活を努力しようとする意識を持つことができた。

(3) 日課を終えてから余暇に入るよう指導を行ってきた。報告を忘れて、指導者から確認をすることもあった。一方で忘れずに報告できたときには、称賛することで達成感を持たせるような言葉かけを

行ってきた。本生徒も決まりはしっかりと守り、一度褒められると次も褒められようと努力する性格であるため、忘れずに報告できるようになった。

本生徒は視覚的な提示の方が理解しやすいため、ホワイトボードを使って自分で確認しながら日課を行うことによって、見通しをもって行動し、効率よく時間を使うことができるようになってきた。しかし、注意力が散漫なため、周囲に友達がいたり、遊び道具がある状況では難しく、本生徒が集中して取り組めるように環境を整える必要があった。

今後も視覚的にわかりやすく、本生徒が興味を持って取り組めて、達成感が得られるような手立てを継続していきたいと考える。

11/5 ~

二槽式チャレンジカード

	月	火	水	木	金
6時40分 に起きれま したか??					
朝食まで 洗濯物だ み替えま したか??					
忘れ物し ませんでした か??					

・Oが10個以上で翌週の二槽式使える券を
発行します!!

残念ながら9個以下の場合は発行できま
せん。。。

・パーフェクトカードを5枚集めるとCD1
枚焼いてもらえます(*^v^*)

頑張れ!! さん(・v・)♡

10/29 ~

二槽式チャレンジカード

	月	火	水	木	金
6時40分 に起きれま したか??					
朝食まで 洗濯物だ み替えま したか??					
忘れ物し ませんでした か??					

・Oが10個以上で翌週の二槽式使える券を
発行します!!

残念ながら9個以下の場合は発行できま
せん。。。

・パーフェクトカードを5枚集めるとCD1
枚焼いてもらえます(*^v^*)

頑張れ!! さん(・v・)♡

二槽式洗濯機使える券

有効期限：2年生のあいだ

第 5 章

研究の成果と課題

1 今年度の研究のまとめ

平成23年度初頭、平成23年度のプロジェクト研究では何に取り組むかという職員アンケートを実施した。その結果、「本校の教育をキャリア教育の視点に照らし合わせながら、本校の良い所、改善ポイントを探る」という内容の研究をスタートさせ、キャリア教育についての研修や、キャリアの視点を具現化かつ現実化するために今年度の第6次研究をどのように進めていくかが話し合われた結果をもとに、今年度の研究がスタートした。

今年度の研究主題は『社会の変化に対応できる力を育てる実践的研究 ～「今養版キャリア教育」の創造を目指して～』を掲げ、課題研究では研究主題を具現化するために「キャリアプランニングを中心とした基礎的研究」をテーマに研究がなされた。またプロジェクト研究では、昨年度取り組んだ産業科の作業学習に関する研究が行われると同時に、寄宿舎での研究も行われた。

(1) 成果と課題 ～課題研究～

課題研究においては、キャリアプランニングを中心とした基礎的研究をテーマに「キャリア教育という考え方やその必要性についての共通理解」「在学生や卒業生の実態把握」「今養版キャリアプランニングマトリックスの作成」の3本柱で研究を行った。

① キャリア教育という考え方やその必要性についての共通理解

年4回ある本校の研究の進み具合を全職員で確認し合う全体研修会場の場を利用し、キャリア教育の職員間の共通理解を図るために学習会を行った。「働く力とは何かを話し合う」「自身のキャリアのイメージしてみる」「キャリアの視点から前特連全国大会報告（講義形式）」「道外の特別支援学校視察報告とキャリア教育推進に向けて（講義形式）」の4つの内容で学習会を進めた。ときには職員間で話し合う時間を設けながら学習会を進めることによって、キャリア教育の必要性やイメージの共通理解を進めることができた。

来年度はキャリアの視点をより授業に生かすステージになっていく。職員間のキャリア教育に対する考え方や方向性をより明確にするために、今後もキャリア教育の学習会を定期的に行っていく必要があると考える。

② 在学生や卒業生の実態把握

学習会とマトリックスの作成で手一杯になったことや、現段階の研究で必要性があまりなかったことから、実施されなかった。しかし、来年度はキャリアの視点をより授業に生かすステージになっていくため、実施の必要性が高まったときには実施する必要があると考える。

③ 今養版キャリアプランニングマトリックスの作成

本校としてのキャリアプランニングマトリックスをまとめるために、研究推進委員会を中心として本研究を進めた。全体研修会において職員から出された「(キャリア)教育に対する思い」を出発点として作成を進めたことで、各学年部会からは多くの意見が出され、それがマトリックスに反映され、キャリア教育の理念が次第に浸透していくといった効果があった。

そうしてまとめた「今養版キャリアプランニングマトリックス」は、本校の設立意義でもあ

る就労を達成し、豊かに生きるための力の育成を目指した指導方針の一覧というべきものとなり、学校教育目標の達成に向けた指針となった。

しかし、このマトリックスはあくまで「試案」としている。今後は、年間指導計画や授業を組み立てる中で、このマトリックスがどれだけ生徒の実態や本校の教育活動に適合されているものなのかを検証し、よりよいものに見直していく必要があると考える。

（２）成果と課題 ～プロジェクト研究・寄宿舎の研究～

プロジェクト研究は、課題研究の研究組織だけでは解決できない課題の解決に向けて、別の組織で研究を進めるものである。昨年度に引き続き、産業科では作業工程表の作成を行った。寄宿舎の研究では、事例研究を行った。

① プロジェクト研究

産業科で昨年度に引き続き、作業工程表などの資料改訂に取り組んだ。各学年が制作する代表的な製品の工程表を見直すことができた。作業工程表を見直すことで、改めて生徒の実態に合わせた工程を考える機会になった。しかし、工程の細分化や誰もが見やすい工程表の作成など、今後もよりよいものに改訂していくことが課題として考えられる。

② 寄宿舎の研究

昨年度の研究で取り組んだ「個別の指導計画」「舎室経営計画」「フェイスシート」の様式改訂を基盤に、今年度はそれを活用しての事例研究を行った。改訂された様式の実用性を実証することができた。また、個々の事例について、寄宿舎の職員間で共通理解を図ることができた。今後は、学校で取り組んでいるキャリアの視点を取り入れた指導・支援をしていくこと、学校との連携をより密にしていくことが課題として考えられる。

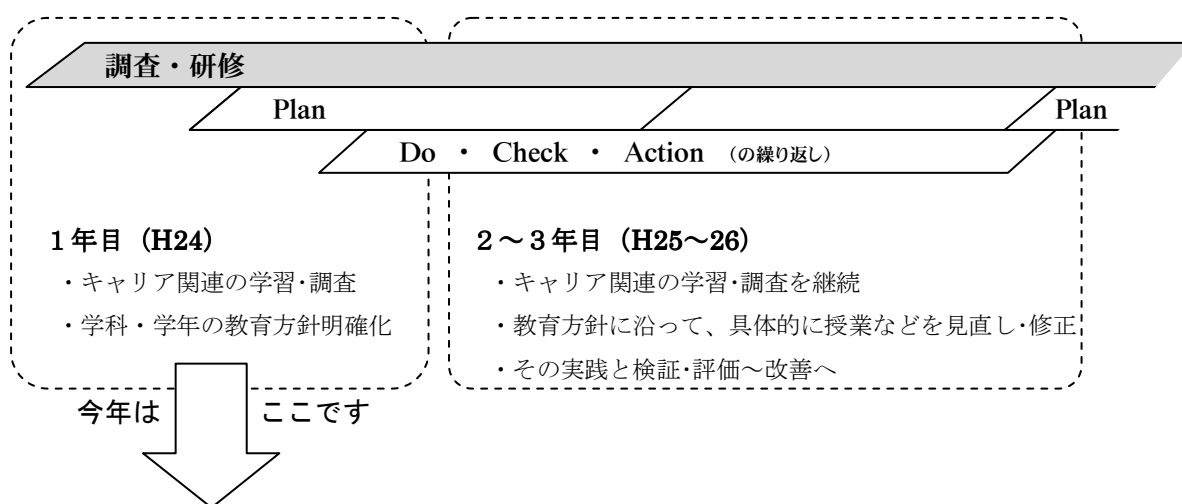
2 次年度に向けて ～第6次研究2年目に向けて～

本研究は、キャリア教育の視点をどのように本校の教育課程や教育活動に位置づけていくか、教職員間で共通理解していくことから始まった。第6次研究の1年目としての今年度は、「キャリア教育」をどのように捉え、どのように進めていくかを全職員で考える1年であった。その結果、「キャリア教育」の理念や考え方を職員間で共通認識できてきただけでなく、「今養版キャリアプランニングマトリックス」を完成させることもできた。また、プロジェクト研究や寄宿舎での研究を同時に進めることで、授業改善や生徒の実態把握にも努めることができた。

第6次研究の2年目となる次年度は、マトリックスを活用しながら、これを検証する1年になるだろう。マトリックスには、生徒を立派な社会人に育てたいという、職員全員の思いが詰まっている。これに沿って教育活動を考えるのは必然であり、指導計画を作成するときから各授業やその他全ての指導場面で指導に当たっているときまで、そこにどのようなねらいがあるのかを考える必要がある。場合によっては、計画や指導そのものを改めていくことにもなるだろう。こうして実践検証を進め、12月に予定されている公開研究会において、本校の実践を発表したいと考えている。

本校の教育活動全てが生徒一人一人の生きる力と明るい将来につながることを信じ、今後も全職員一丸となって「今養版キャリア教育」を創造していく。

～ 図5 第6次研究 課題研究の流れ ～



第6次研究の1年目 (H24) は・・・

- ①キャリア教育理解のための学習会
- ②今養版キャリアプランニングマトリックスの作成

第6次研究の2年目 (H25) は・・・

- ①キャリア教育理解のための学習会の継続
- ②今養版キャリアプランニングマトリックスの教育活動へ活用
- ③在校生や卒業生の実態調査・把握 (必要に応じて)

～ 図6 過去3年間のプロジェクト研究・寄宿舍研究の流れ ～

	産 業 科	寄 宿 舎
平成23年度	作業工程などの資料改訂	よりよい個別の指導計画の在り方 (様式の改訂) ・ 個別の指導計画 ・ 舎室経営計画 ・ フェイスシート
平成24年度	作業工程などの資料改訂(前年度継続)	事例研究(前年度の研究の実践)
平成25年度	終了予定(資料改訂を生かした授業実践)	未定

特別支援教育研修会の記録

平成24年7月27日

キャリア教育の観点を取り入れた
特別支援教育のあり方を考える

特別支援教育研修会とは

特別支援教育の動向に対応するべく、近隣地域の学校関係者をはじめ、障害者教育・支援に携わる全ての方々の研修の機会として、本校が主催して行っている研修会である。平成14年度から開催している本研修会は、毎年多数の参加者に支えられ、今年度で通算13回目を迎えることができた。

平成24年度 開催要項

1 目 的

障がい者の卒業後の実態や関係機関の取り組みを通して、特別支援教育にかかわる教育関係者、福祉関係者、その他関心のある者の専門性の向上を図る。

2 主 催

北海道今金高等養護学校

3 日 時

平成23年7月27日（金） 13:15～16:15

4 会 場

北海道今金高等養護学校 体育館

〒049-4304 瀬棚郡今金町字今金454-1 Tel: 0137-82-3121

5 日程及び内容

12:45～	13:15～	13:30～	14:30～	14:40～	16:00～
受付	開会式	講演	休憩	パネルディスカッション	閉会式

6 研修会テーマ

キャリア教育の観点を取り入れた 特別支援教育のあり方を考える

「キャリア教育」の観点で授業実践を進め、生徒が社会自立を目指す上で必要となる力について改めて学習し、今後の授業実践に活かす。

7 講師

(株)イチヤママル長谷川水産 取締役経理部長

中山 昌弘 氏

NPO 法人せたな共同作業所ふれんど サービス管理責任者

今西 一憲 氏

北海道教育大学函館校 准教授

北村 博幸 氏

8 参加費 無料

9 定 員 150名

< 日 程 >

12:45 受 付

13:00 学校紹介ビデオ（約 10分）を上映

13:15 開会式

開会のことば 司会（研修部：近藤 和也）

講師紹介 北海道今金高等養護学校長 佐々木 誉之

13:30 講 演

講演1 (株)イチヤママル長谷川水産 取締役経理部長

中山 昌弘 氏 「障がい者雇用（就職）の実際」

講演2 NPO 法人せたな共同作業所ふれんど サービス管理責任者

今西 一憲 氏 「福祉的就労の実際と自立支援法」

講演3 北海道教育大学函館校 准教授

北村 博幸 氏 「キャリア教育の視点を取り入れた指導のあり方」

14:30 休 憩

14:40 パネルディスカッション

※ 詳細は次項をご覧ください。

15:30 全体発表と講評（各グループ・講師より）

16:00 閉会式

謝辞 北海道今金高等養護学校長 佐々木 誉之

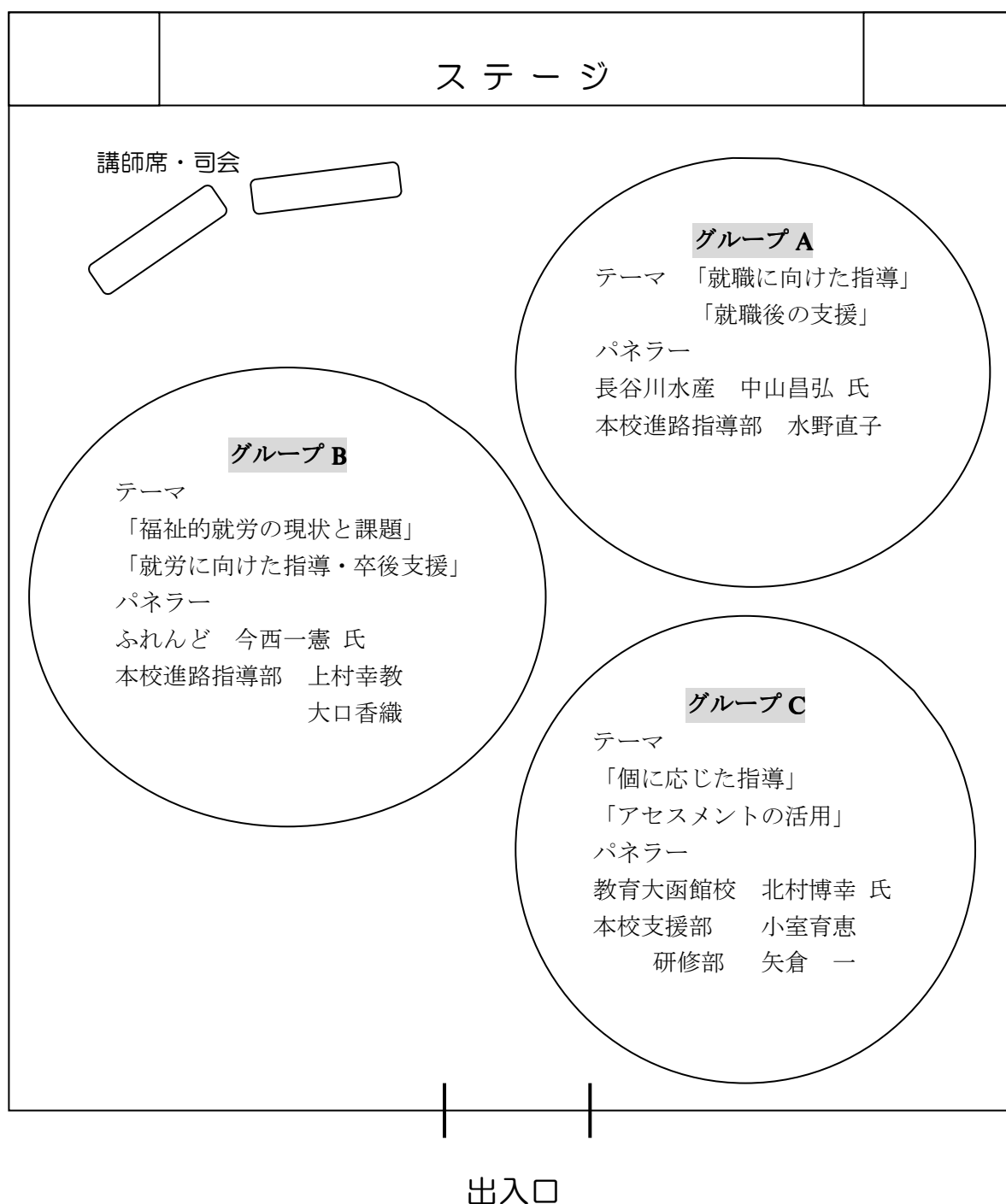
閉会のことば 司会（研修部：近藤 和也）

諸連絡

～ 閉会后、事前に希望された方を対象に、校内見学を行います。16:30には終了します。～

＜パネルディスカッションについて＞

- 休憩時間に、下記の図のように会場設営をさせていただきます。
- パネラーがテーマに沿って順に意見を述べます。その後パネラー間で議論を行います。
- 参加者の皆様からパネラーへの質問は、適宜応じます。
- 3グループに分かれて行います。次項の参加者名簿と会場図をご確認ください。



研修会の記録

1 講演

(1) 長谷川水産 中山 昌弘 氏「障がい者雇用（就職）の実際」

『(株)イチャママル長谷川水産』の紹介

- 八雲町落部で経営。
- 現在は工場を増設し、海外も視野に入れ経営している。
- その中で、障害者雇用にも力を入れている。

『(株)イチャママル長谷川水産で大切にしていること』

- 障がいの有無にかかわらず、あいさつなどの基本的なコミュニケーションが円滑に仕事をしていく上で大切。
- 誰もが経験を重ねていくなかで育っていく。
- 「あいさつ」「返事」「体調管理」「衛生」などの基本が一番大切。技量は後から必ず身に付くものである。



(2) ふれんど 今西 一憲 氏「福祉的就労の実際と自立支援法」

『特定非営利活動法人 せたな共同作業所 ふれんど』の紹介

- 平成 16 年に開設準備。平成 17 年 1 月に開設。
- 平成 23 年 10 月に就労継続支援 B 型として事業開始。
- 利用者 20 名（平成 24 年 4 月現在）
- 仕事内容はパン製造が主である。

『具体的なふれんどの取り組みと課題』

- 地域活動グループは「パン製造・販売」、B 型は「資源回収、陶芸、パン製造」を行っている。
- 工賃は 15000 円。
- 就労にむけて企業実習を行っている。しかし「実習→一般就労」に結びつけるのは難しい。
- 現在の事業形態ではこれ以上の賃金(工賃)値上げは難しいため、新しい事業開発が必要。
- 今後の賃金目標は 30000 円。



(3) 教育大函館校 北村 博幸 氏「キャリア教育の視点を取り入れた指導のあり方」

『キャリア教育とは』

- 【一人一人にふさわしいキャリアを形成していくために
必要な意欲・態度や能力を育てる教育】

『特別支援教育の新たな専門性とは』

- ①アセスメント力
「心理検査も含めた大きな枠組みで考えるべき」



「個人内差を明らかにするためのひとつの手段」

②強い部分を活用する力

「子どもの強い部分を伸ばしていく。それを見つける教師の目（アセスメント）が大切」

③チームで支援していく力

『学習指導要領の個別の指導計画の作成について』

「進んでいる側面を活かし遅れている側面を補う」と記載されている。

『キャリア教育に取り組むに際して』

①職業教育、就労教育にとどまるものではない

②新たに教科を設定するものではなく、全校体制で学校教育活動全般を通して行うもの

③「キャリア発達」と「移行支援」の両視点を基盤とする

④授業の改善につなげる

⑤教育課程の見直し、改善につなげる

2 パネルディスカッション（その後の講評も含む）

（１）A グループ「就職に向けた指導」「就職後の支援」

～ パネラー 長谷川水産 中山 昌弘 氏 ・ 本校進路指導部 水野 直子 ～



【本社での近年の変化など】

- ・ 海外輸出
- ・ 入沢工場新設
- ・ HACCAP 取得

衛生管理が非常に厳しくなった。（作業中のおしゃべりも不衛生なので禁止事項になっている）

- ・ トレーサビリティ導入

担当した社員の名前・番号をラベルに付けて出荷するので、一人が1つ失敗してクレームや返品が来たら、その人の分全てを回収しなければならない。

【最近の障害者雇用の状況】

- ・ 今年本社では、本校卒業生が1名、職場適用訓練制度を受け入れてから1年経過し、本採用となった（他これまでに8名が就職している。）
- ・ 障害者雇用促進法以来、本社でも障害者を受け入れる社会的責任があると考えている。
- ・ 障害のある職員は入沢工場で働いている。入沢工場は水揚げされたものをすぐに扱う最初の工程。本社のようなお客さんのすぐ口元に運ばれる工程ではないので障害者には向いている。（本社は衛生管理以外にも難しくて危険な作業が多い。高い安全意識が求められる。）
- ・ 入沢工場の主な仕事→シール貼り、箱詰め、解凍、運搬、清掃、補助作業が中心。工場長が障害の有無に関わらず、また向き不向き関係なくよく指導している。
- ・ 給料は、最低賃金除外申請をして時給640円。
- ・ 福利厚生→各種保険等すべて（職適の条件なので）。町のソフトボール大会やお祭りにも会社として参加している（社員参加は任意）。

【本校卒業生の様子】

- ・ 体調や気分によ左右されることなく、どのような状況でも毎日同じように働き、手を抜くようなこと

はない。また、問題行動などの報告も工場からは上がってきていない。

- ・特別に配慮していることはないが、指示の出し方や説明、繰り返し教えるなどの工夫はしている。
- ・賃金等の話をする時は親御さんも同席してもらって伝える。さらに、社員になるからには給料面も含めて多少厳しい内容の話もさせてもらう。

【以下、Q&A 式で質問などがあがった。】

Q：食べ物を扱う他の事業所では、障害者が作ったというだけで嫌がるお客さんが実際にいるといわれることがよくある。貴社では実習なども快く引き受けて頂いているが、そういった批判などはないのでしょうか？

A：今の若い人は大変で疲れる仕事、休みの少ない仕事は嫌がるので、求人をかけても応募してこないのが現状で、働き者なら誰でもいいと言うのが本音。本校卒業生は大切な労働力だから障害者だからどうということはない。

Q：卒業後、実際にはどのようなご配慮などがありますか？

A：言葉かけなどは多少は配慮するが、他の職員と同じく扱う。担任の先生が様子を見に来てくれると、子どもは安心したり、初心に返って頑張ろうとする。また、一人じゃない、見守ってくれる人がいると思うだけで、新たな気持ちで仕事に戻ることができる。巡回はけっして邪魔ではないので来てください。

Q：最近の生徒の傾向として、一人親家庭、過保護、不登校、コミュニケーション能力不足などが多く見られますが、会社で上手くやっていける方法やコツ、即戦力になるために学校でやっておくことがあればお願いします。

A：誰にでも環境が変われば心配、不安感がありますが、それは慣れていく、やっていくしかないと思う。そういった経験を積み重ねていくしかない。学校でそういった体験や学習はできないので、学校でまずやるべきはとにかく「あいさつ」ができるようになること。「おはよう！」の一言が言えらばうまくやっていける。そして仕事に乗っていける。失敗は誰にでもあるし、怒られて、泣いてひとつ上に行ける。あまり親に頼っていてはいけない。職場の人に失恋の悩みでも話せるようになれば大成功だと思う。

Q：対人関係について。失敗すると固まって動けなくなる生徒がいるが・・・？

A：そういった体験は大切だと思う。失敗は自分で乗り越えるもの。先生が助けてやってしまっはせっかくの失敗から学ぶ機会が消えてしまう。怒られるのは自分が悪いのだから仕方ない。手をかけすぎて自分で歩けないと困る。あたりまえのことを大切にしてほしい。

Q：江差町からは働きに行っている人はいますか？

A：送迎バスあり。現在ドライバー込みで8～9人いる。通勤可能で体力・気力のある人は積極的に受け入れて行く（不潔な人は商売柄、受け入れできない。）

Q：学校ではどのような事柄を指導したり学習に取り入れればよいか？また会社で打ち切りをされないためにはどうすればよいか？

A：「あいさつ」「仕事ができること（続けられること）」「体調管理」「衛生」「協調性」「チームプレイ」「カバー力」「根性」「失敗しながら成長する」ことを教えてほしい。人に好かれることも大切。

(2) B グループ「福祉的就労の現状と課題」「就労に向けた指導・卒後支援」

～ パネラー ふれんど 今西 一憲 氏 ・ 本校進路指導部 上村 幸教、大口 香織 ～

【『ふれんど』の実態説明】

今養卒業生は、単純知的障害が多く、優しい性格で真面目。コミュニケーションがとれる。他の利用者（精神障害など）は、就労経験を踏んでいる方が多く、保健師や役場の働きかけで現在ふれんどを利用しているが、被害妄想があったりトラブルメーカーになることが多い。しかし、利用者間でお互いがお互いをフォローしている場面が多い。



一次障害よりは、家庭環境・地域環境（偏見）等からくる二次障害によって、コミュニケーション障害が深刻化している。個性を生かす、個性で弱点をカバーする、褒める、明るく、笑うなどが大切で、言わせる表現させることが重要。

卒業後を見据え、あいさつ（コミュニケーション）が一番大切。それをきっかけに職場の理解も産まれる。仕事は時間をかければ覚える。

ふれんどでは、数名の利用者が一般就労に向けて取り組んでいる。今養卒業生の A くんもその一人。彼の特性でもある「人の話を聞く、場の空気を読む、やさしい」を生かし、老人福祉の職場で働いている。良い物（長所）をいかにキャッチし、それを表現できる場を提供できるか（マッチング）が、とても大切。さらに、障害者は孤立しやすいので、地域の人たち（お年寄りや子どもたち）に名前と顔をうつことが大事。それがちょっとずつ口コミで地域に広がってくる。

【卒後支援について】

瀬棚商業や檜山北は、卒担による電話支援。来校時の支援。今養は企業等とのパイプがあるので、ふれんども含め連携して取り組んでいくことが求められる。

瀬棚商業、1 クラス 11 名。集団のなかで目の行き届く人数。支援が必要な時は個別対応を行っているが、卒業後などの自立支援のノウハウがない。檜山北も同じ状況。

【今後の展望について】

現在は工賃 1 万 5 千円。将来的には 3 万円を目指す、それには作業種の問題、運転資金の問題が関わってくる。行政との絡み、町全体のバランスとの絡みもある。また、障害者総合支援法（新法）をよく読み取ることが、今後の支援に大切。

【問題点・課題】

特別支援が充実してきた近年の卒業生等はまだいいが、40～50代の障害をもった方々が一番大変。身内ほど、障害に対して周りに打ち明かさない、引きこもる、コミュニケーションが取れないなど、蓋をする傾向にあり、手帳もなければ年金もない。親が高齢になり、ようやく行政等に助けを求め、実態が見えてくる傾向が多い。

取りこぼしがないような支援が必要であり、発達障害が増加している現実で、アンバランスさを持っている子どもたちにどのように支援していくかが課題である。

(3) C グループ「個に応じた指導」「アセスメントの活用」

～ パネラー 道教大 北村 博幸 氏 ・ 本校支援部 小室 育恵 ・ 本校研修部 矢倉 一 ～

【アセスメントの結果を、どう活用するのが適切なのか】

- ・ 今金では、子ども園、小中高の教員、保健師などの人々と連携することが大事。
- ・ 早期に気づくこと、早期対応が大事
 - 幼少時：生活の基本を身につける。
(身辺処理、考察力、他者への関心)
小学校：人間関係を形成する。
中学校：社会生活能力、自分を鍛える力を身につける。
高等学校：生活能力の確かな力を確立させる(さまざまな情報から取捨選択し、自己決定する力。)
- ・ それぞれの発達段階で考えられる課題を達成していくことが成長していくこと。
 - このために“個に応じた指導”が大切なのでは。
- ・ 個別の教育支援計画、個別の指導計画 → “キャリア”につながる。
- ・ 苦手なところを練習してできるようにするのか、本人の良さを生かして苦手なことにチャレンジさせていくのか。
 - 苦手なところだけでなく、本人の良さを伸ばす指導。どのような手段を用いれば、その子にとってプラスとなるのか。
- ・ チェックシートの活用：子どもを見る目を養う。確実な把握ができるように。
 - 適切な指導がキャリアにつながる。
- ・ 自分たちだけで取り組むのは限界がある。そこで連携が大事になる。定期的な面談や相談を行うこと。このことによって、高等学校から社会への移行がスムーズになるのではないかな。
- ・ ソーシャルスキルトレーニング、コミュニケーションスキルについては、小中学校の段階での指導は十分に時間をかけて取り組んでもよい。まずは、基本的なことが定着し、汎化していることが重要。
- ・ ダイナミックアセスメントというのがある。指導するためにアセスメントするのではなく、アセスメントしながら指導していくことを言う(ダイナミックアセスメント…心理検査だけでなく、普段の生活の中でアセスメント、指導を行っていくことである。)



【以下、Q&A 式で質問などがあがった。】

- Q： 早期からの気づき、対応をどのようにキャリアに結びつけるのか、将来をイメージして行えるか。小中高で就労までの時間が異なるため、段階ごとにキャリアのイメージが異なるのでは。どの段階でも行えることは何か。
- A： 係活動は一人ひとりに役割がある。その活動の中で成功や失敗をしていくことで、自分の中にキャリアができる。家庭でも手伝いをするなど。

子どもの好きなことを見つけてあげたい。絵やぬり絵を長い時間やっているのであれば、それが好きなかもしれない。はさみの使い方が得意な子には、その係をお願いするなど、得意なことを伸ばす。みんなとの活動が苦手な子でも、得意なことがあればいい。「私はこれが好きだ」というものを持つことは大事。自尊心を育む。

Q： アセスメントを活用しての指導は難しいところもある。どんなことに配慮すべきか。アセスメントの小項目をみて、その子の苦手・得意を知ることが大切。

A： 数多くあるアセスメントの中にWISCがある。生徒ができていないことが何かはわかる。しかし、できるようにするために、どうやって教えるのか、手立てがあっているのかわからない、というような状況がある。やはり、複数で対応し、さまざまな視点が必要。

Q： 褒められることで自己肯定感を感じられると思う。だが、上手にできることを褒めるのか、苦手なことをがんばったときに褒めるのか。

A： 子どもをどのように成長させたいのか、その目的に沿った褒め方、褒めるタイミングも異なる。ADHDの子に対しては、簡単な課題設定は不向き。褒めるところを多くつくるのが大事。例えば、何も乱暴しなかった、席に座ってた、友だちを叩かなかつたら褒める。子どもにとって適切に評価すること、フィードバックすることが大事。

ADHDの子に対して5段階の接し方がある。例えば、授業中に席を立ったときは、①反応しない。「座りなさい」すら言わない。②目を逸らす。③ちゃんと座っている子を見る。④ちゃんと座っている子を褒める。⑤席に座ったら、すぐに褒める。

Q： 特別支援学級がない。あいさつができない。言葉に出すタイミングがわからない。「せーの」と言ってもらえるが、プライドが高いこともあって、「せーの」を言われている自分が嫌。この場合どう対応すべきなのか。

A： あいさつをさせることが大事なのか、その子のプライドを傷つけないことが大事なのか。重点を決める。

3 参加者概要

・申込者数（外部）	31名		
・出席者数（外部）	30名		
（本校職員）	47名	計	77名
・パネルディスカッション	Aグループ	20名参加	
	Bグループ	33名参加	
	Cグループ	22名参加	

あ と が き

『平成24年度 研究紀要 創』第15号をお届けいたします。

今年度は第6次研究の1年目ということで、『社会の変化に対応できる力を育てる実践的教育～「今金版キャリア教育」の創造を目指して～』を研究主題（テーマ）とし、全教職員が連携・協働して研究に取り組んできました。

本号には、今年度「キャリア教育」の推進に向けて行ってきたさまざまな取組、実践報告等が収録されています。今年度の最大の成果は、学校教育目標の達成に向けた「今養版キャリアプランニングマトリックス」の完成です（第2章）。完成に至るまでの各学年・学科での話し合いを通し、キャリア教育についての共通理解・意識改革が進んだこと、並びに学校課題を共有し、解決に向けた方策や将来の展望を全教職員が一体となって考え、一定の方向性を示すことができたことは、本校にとって何よりの財産になります。

キャリア教育を本校の視点で解釈し、学校としての一貫性を追い求める道のりは今後も続きますが、今年度の成果と課題が次年度の研究への大きなステップになると感じています。取組はまだまだ始まったばかりです。今後も、生徒一人一人が夢を持ち、その夢の実現に向け、何事にも意欲的にトライしていけるよう、本研究を推進していきたいと思えます。

研究成果に関しましてはまだまだ不十分な部分があり、「読みやすい研究紀要」になっているかについては懸念しているところです。本校教育の推進のためにも、皆様に御一読賜り、御意見・御指導いただければ幸いです。

最後に、校内研修（研究）の推進役となった研修部をはじめ、関係職員に深く感謝します。

平成25年3月

北海道今金高等養護学校教頭

高 橋 一 矢

共 同 研 究 者

学校長 佐々木 誉之
教 頭 高橋 一矢
事務長 青山 義之

<教務部>

1 学年 阿部 昌弘 、岩城 研太 、及川 文雄 、鐘ヶ江真知 、木村 幸子
高田のぞみ 、武田 資 、橘 晴美 、田中龍右エ門 、能代麻衣子
藤倉 雄一 、湊上 香奈 、松原 与人 、矢倉 一

2 学年 上村 幸教 、大口 香織 、小谷 倫也 、金子 亘義 、後藤 倫弘
小松 裕樹 、小室 育恵 、近藤 和也 、佐々木真由美 、天満 理恵
出村 朱美 、外山 陽子 、南波 李佳 、早坂 麗子 、渡邊 雅都

3 学年 小原 雄一 、加藤 奈都 、木田 絢子 、国府由香利 、小林 吾一
三条真知子 、東海林栄徳 、鈴木 貴史 、鈴木 美彩 、塚・英利香
中島 朋之 、三澤麻衣子 、水野 直子 、山田 賢一

<舎務部> 生内 希 、伊藤 亮 、猪瀬 雅法 、上山 真人 、大場さおり
川村 洋二 、齊藤 直美 、島野 五樹 、清野 恵美 、泉波 卓也
竹端 賢一 、藤田 美華 、松尾 晴奈 、山本 絵理 、和田 雅史

<行政> 遠藤 史憲 、川崎 澄子 、高野美智代 、中村 和子 、森谷 香
山崎 直樹

平成 2 4 年度 研究紀要

創

TSUKURU 第 1 5 号

発行者 北海道今金高等養護学校長

佐々木 誉之

発行日 平成 2 5 年 3 月 3 1 日

〒 0 4 9 - 4 3 0 4 北海道瀬棚郡今金町字今金 4 5 4 番地 1

T E L (0 1 3 7) 8 2 - 3 1 2 1

F A X (0 1 3 7) 8 2 - 3 0 9 2